

The Molecular Biology Society of Japan

MBSJ NEWS

日本分子生物学会

2025.6

No.142

会報

目次

■ 第48回日本分子生物学会年会 (MBSJ2025) 開催のお知らせ (その3) —	1
【年会長の挨拶 その3】	1
【プログラム概要】	2
【参加者へのご案内】	2
【参加登録について】	4
【演題投稿について】	5
【一般演題 (ポスター発表・公募シンポジウム口頭発表) における注意事項】	6
【海外若手研究者招聘企画について (応募締切: 2025年7月31日(木))】	8
【全体日程表 (予定)】	9
【演題カテゴリー】	10
【シンポジウム 日程表】	11
【シンポジウム テーマ一覧】	14
【ミニシンポジウム テーマ一覧】	38
【フォーラム テーマ一覧】	51
【宿泊申込のご案内】	56
【特定非営利活動法人 日本分子生物学会 倫理要綱】	58
■ 会員専用ページのご利用について —	59
■ 会員種別の変更について —	60
■ 休会制度のご案内 —	61
■ 学会誌 Genes to Cells 編集室からのご案内 —	62
■ 学術賞、研究助成の本学会推薦について —	64
■ 学術賞、研究助成一覧 —	65
■ 第24期役員・幹事・各委員会名簿 —	70
■ 賛助会員一覧 —	71



特定非営利活動法人
日本分子生物学会

<https://www.mbsj.jp/>



MBSJ
2025

年会長：小林 武彦
(東京大学定量生命科学研究所)

第48回 日本分子生物学会年会

12月3日^水～5日^金

パシフィコ横浜



演題登録

2025年7月1日～7月31日

早期参加登録

2025年7月1日～10月1日

第48回日本分子生物学会年会事務局(株式会社エー・イー企画 内) 〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋 2-4-4 一ツ橋別館4階 Tel: 03-3230-2744 E-mail: mbsj2025@aeplan.co.jp

第 48 回日本分子生物学会年会 (MBSJ2025) 開催のお知らせ (その 3)

会 期 : 2025 年 12 月 3 日(水)~ 5 日(金)※現地開催のみ
会 場 : パシフィコ横浜
年 会 長 : 小林 武彦 (東京大学定量生命科学研究所)
演 題 登 録 期 間 : 2025 年 7 月 1 日(火)~ 7 月 31 日(木)※予定
早期参加登録期間 : 2025 年 7 月 1 日(火)~ 10 月 1 日(水)※予定

年会事務局連絡先 : 第 48 回日本分子生物学会年会事務局 (株)エー・イー企画 内)
〒 101-0003 東京都千代田区一ツ橋 2-4-4 一ツ橋別館 4 階
Tel: 03-3230-2744 Fax: 03-3230-2479 E-mail: mbsj2025@aeplan.co.jp

年会ホームページ : <https://www.aeplan.jp/mbsj2025/>
X(旧 Twitter)アカウント : https://x.com/mbsj_2025

【年会長の挨拶 その3】

公募シンポジウムにはこれまでで最多のご応募いただきました。ありがとうございました。組織委員会で皆様の熱意にお応えべく、ほぼ全てを採択させていただきました。ただ会場数とスケジュールの関係で一部企画には時間の短縮、フォーラム枠での実施をお願いいたしました。ご理解いただけると幸いです。また当初予定しておりましたサイエンスピッチは、これもスケジュールの都合でやむをえずとりやめとさせていただきました。その代わり、優秀なポスター発表をされた学生に、ポスター賞の授与を行う予定です。審査はシニア会員の皆様にも協力をお願いさせて頂こうと考えています。学生にアドバイスや励ましをいただけるとありがたいです。審査にご協力いただけるシニア会員の先生方には、多少ではございますが旅費をご支援させていただきます。

「この指とまれ企画」(マッチングイベント)は現在絶賛公募中です。新しい研究仲間、進路・研究のお悩み相談等々、分生に相応しい企画であればなんでも OK です。5 人用のテーブルからプロジェクター付きの数十人で使えるスペースまで用意してあります。奮ってご応募ください。Meet the speaker 企画は行いませんので、お近づきになりたい研究者の方がおられましたら、ご本人の了解のもと、「この指とまれ企画」でご提案ください。例えば「小林武彦と語りたい人、この指とまれ」みたいに。誰も集まらないかもしれませんが。

この冬、分生であなたの人生の何かが変わるかもしれません。

第 48 回日本分子生物学会年会
年会長 小林 武彦
(東京大学定量生命科学研究所)

We received a record number of submissions for the open call symposium. Thank you very much. After deliberation by the organizing committee, we have accepted almost all of them. However, due to the number of available venues and scheduling constraints, we have had to ask some proposals to shorten their presentation time or consider a forum session instead. Additionally, the originally planned "Science Pitch" session has unfortunately been canceled due to scheduling conflicts. We appreciate your understanding. Instead, we plan to present Poster Awards to students who give outstanding poster presentations. We are planning to kindly ask senior members of the society to serve as judges. It would be greatly appreciated if you could also offer advice and encouragement to the student presenters. For senior members who are willing to support us by participating in the judging, we will be providing a modest amount of travel support.

We are currently accepting applications for the Matching Event “Let’s gather here in Yokohama!” These can be anything suitable for the Molecular Biology Society, such as finding new research collaborators or consulting about your career path or research concerns, etc. We have spaces available ranging from small tables for five people to larger areas with projectors for dozens of participants. We encourage you to apply. We will not be holding a formal “Meet the Speaker” session this year. However, if there is a researcher you would like to connect with, please feel free to propose a “Who’s In?” session with their consent. For example, something like “Who wants to chat with Takehiko Kobayashi?” (Though I doubt anyone would show up…)

This winter, something in your life might change at the Molecular Biology Society meeting.

President of MBSJ2025

Takehiko Kobayashi

(Institute for Quantitative Biosciences, The University of Tokyo)

【プログラム概要】

- ◆指定シンポジウム（全 10 テーマ）（14 頁参照）
- ◆公募シンポジウム / ミニシンポジウム（全 152 テーマ）（14 頁参照）
- ◆フォーラム（全 15 テーマ）（51 頁参照）
- ◆一般演題（ポスター・公募シンポジウム口頭発表）（6 頁参照）
- ◆マッチング（交流）イベント『このゆび、とーまれっ』：詳細は年会ホームページ参照
- ◆キャリアパス委員会企画：ランチョンセミナー形式
- ◆研究倫理委員会企画：ランチョンセミナー形式
- ◆バイオテクノロジーセミナー：年会とセミナー主催者との共催セミナー（ランチョン形式）
- ◆高校生研究発表：12 月 5 日(金)午後 2 時間程度（予定）
- ◆市民公開講座：12 月 5 日(金)夕刻（予定）

※指定シンポジウム等一部プログラムにて、スマートフォンなどで翻訳文をご覧いただける同時翻訳サービスを導入予定です。

【参加者へのご案内】

【日本生物物理学会との連携について】

第 48 回日本分子生物学会年会・第 63 回日本生物物理学会年会においては、相互の学会会員が同等の会員資格で参加・発表できます。

※招聘企画等への応募資格については、各項目をご確認ください。

【オンラインシステム（Confit）について】

Confit は参加登録、演題投稿、プログラム検索・要旨閲覧などの機能が一体となったシステムです。

事前に Confit で参加登録手続きを完了すると、年会参加登録費の請求書・領収証、年会参加章（ネームカード）、参加証明書が Confit から順次ダウンロードできるようになります。

※年会会期中に会場受付で当日参加手続きを行う場合、参加章や領収証は現地でお渡しします。

・ユーザー登録

システム利用前に Confit のユーザー登録が必要です。第 47 回日本分子生物学会年会（MBSJ2024）や、2024 年以降に他学会の学術集会で Confit を使用したことがある方は、まず Confit でユーザー登録の有無を確認してください。

・参加登録（4 頁参照）

参加登録は原則として参加者本人が行ってください。

・演題投稿（5 頁参照）

演題投稿は必ず発表者が行ってください。

・プログラム検索・要旨閲覧：11 月中旬公開（予定）

・参加章 PDF：11 月中旬よりダウンロード可能（予定）

各自印刷して会場にご持参ください。参加章ホルダー（ネームホルダー）は会場で配布します。

・参加証明書 PDF：年会会期初日以降ダウンロード可能

【参加章・ポケットプログラム郵送廃止のお知らせ】

従来、10 月初旬までに早期参加登録された方を対象に、参加章・ポケットプログラム（会場マップや日程表などを掲載した簡易的な冊子）等を郵送していましたが、昨年に続き本年も実施いたしません。

経費を節減し年会参加登録費を抑えるため、ご理解、ご協力をお願い申し上げます。

なるべく会期前に参加登録手続きを済ませ、参加章は Confit から PDF を印刷してご持参ください。ポケットプログラムは会場で配布する予定です。

◆開催形式：現地開催のみ

本年会は現地開催のみとなります。ライブ配信、オンデマンド配信はありません。

登壇も聴講も現地のみといたします。

◆プログラム公開：10 月中～下旬（予定）

Confit でのプログラム検索・要旨閲覧の公開に先立ち、年会ホームページ上で PDF 版のプログラムを公開予定です。

印刷版の抄録集やプログラム集はありません。簡易的なポケットプログラムを会場で配布予定です。

◆使用言語

・指定シンポジウム：英語

・公募シンポジウム：オーガナイザーが指定（セッションごとに英語もしくは日本語）

※公募シンポジウムの使用言語は日程表（11 頁参照）もしくは公募シンポジウムテーマ一覧（14 頁参照）ページにてご確認ください。

・ポスター発表：タイトルは日本語、英語併記とし、要旨本文、ポスターの内容の言語は演者が選択できますが、英語表記を推奨します。討論は日本語、英語どちらでも可。

・フォーラム：オーガナイザーが指定（セッションごとに英語もしくは日本語）

◆海外若手研究者招聘企画（8 頁参照）

◆託児室

お子さま同伴の参加者のために、会場内に託児室を設置します（一部本人負担）。詳細は、9 月上旬に年会ホームページにてお知らせします。

◆年会期間中の宿泊予約（56 頁参照）

◆参加章（ネームカード）

会場への入場には参加章の提示が必要です。また会場内では常に参加章が見える形で着用くださるようお願いいたします。

※ Confit で事前に参加登録をされた方は参加章 PDF を印刷してご持参ください。

【参加登録について】

早期参加登録受付期間：2025 年 7 月 1 日(火)～ 10 月 1 日(水) 17：00

※演題投稿受付期間（7 月 31 日(木) 17:00 まで）とは異なりますので注意してください。

※本年会では、非会員の方の一般演題登録も可能です。その際の参加登録費は投稿なしの方とは異なります。

※早期参加登録締切後は、後期-当日参加登録を行ってください。

※日本生物物理学会員の方は、正会員・学生会員カテゴリーにて参加登録、一般演題登録が可能です。

◆参加登録費

区分	早期参加登録	後期-当日参加登録 ※演題投稿不可
登録受付期間	7/1 ～ 10/1	10/10 ～ 12/5
正会員 (日本生物物理学会員を含む)	13,000 円	20,000 円
学生会員 (日本生物物理学会員を含む)	3,000 円	4,000 円
学部学生 (会員・非会員問わず)	0 円 ※一般演題投稿希望者は「学生会員」、 もしくは「非会員（一般演題投稿 あり）」での参加登録が必須	0 円
非会員（一般演題投稿なし）	22,000 円	30,000 円
非会員（一般演題投稿あり）	30,000 円	

参加登録費の税区分：会員は不課税、非会員は税込
年会参加費に飲食費は含まれません

※学会年度会費と年会参加登録費は異なります。学会員として演題投稿をするには 2025 年度会費と参加費を両方納入する必要がありますので、ご注意ください。

※入会手続きと年会の参加登録・演題登録は同時に進めることが可能です。その場合の参加登録カテゴリーは、学会員（正会員もしくは学生会員）を選択し、手続きを進めてください。

※ Confit（プログラム検索・要旨閲覧）の代金はすべてのカテゴリーの年会参加登録費に含まれています。

※後期-当日参加登録の参加費支払い方法は、オンライン登録でのクレジット決済、もしくは当日参加受付での現金による支払いのみとなります。銀行振込は選択できませんので、ご注意ください。

※当日受付にて登録される場合、参加章（ネームカード）は、受付にてお渡しいたします。

※シニア会員と次世代教育会員につきましても、Confit からの参加登録をお願いいたします。

◆オンラインシステム（Confit）推奨利用環境について

推奨利用環境は PC のみです。以下の環境でご利用ください（各最新版）。

【Windows】Edge / Chrome 【Mac】Safari / Chrome

◆参加登録費支払方法

1. クレジットカード決済（早期参加登録、後期-当日参加登録）

オンライン参加登録時に以下のクレジットカードによる決済が可能です。

Visa、MasterCard、JCB、AMEX、Diners

2. 銀行振込（早期参加登録のみ）

オンライン参加登録後に画面に表示される口座（登録完了メール中にも記載されます）に振り込んでください（ATM からの振込も可能）。

表示される振込先口座は、各参加登録に紐づく個別のものになりますので、必ず該当する参加登録者の参加費のみをお振り込みください。

なお、振込に関する ATM 操作などの不明点は、ご利用の各金融機関に問い合わせてください。

参 加 費 振 込 期 限	2025 年 10 月 2 日(木)
備 考	振込手数料は各自で負担してください。

- ・参加登録費の支払いをもってはじめて登録が完了します。早期参加登録を行っても、参加登録費支払いの確認ができない場合は、早期参加登録は無効となり、後期-当日参加登録が必要となりますのでご注意ください。
- ・参加登録費請求書・領収証、参加証明書は、Confit から PDF でのダウンロードをお願いいたします。原則として郵送はいたしませんので、ご了承ください。
※参加証明書は会期初日以降にダウンロードが可能になります。（参加章データに追記されます）
- ・一度納入された参加登録費は、理由の如何に関わらず一切返金しません。参加カテゴリーの選択にはご注意ください。

年会参加に関する倫理指針

年会参加にあたっては、58 頁に示す本学会倫理要綱（2016 年 第 19 期・第 20 期理事会 制定、2017 年 1 月 10 日から施行、第 23 期理事会にて 2024 年 4 月 23 日に項目 3 を追加）を遵守する。

*これらの指針から著しく逸脱した行為を受けた場合や見かけた場合は、年会事務局にお知らせください。個別に慎重に調査し、対象者に対する注意や年会会場への入場規制などの対応を取ることがあります。

【演題投稿について】

演題投稿受付期間：2025 年 7 月 1 日(火)～7 月 31 日(木) 17:00（締切厳守）

※7 月 31 日(木) 17:00 までに投稿完了した演題のみが受け付けられます。

※ Late-breaking Abstract は例年通り 9 月に募集予定です。発表形式はポスター発表のみとなり、公募シンポジウム口頭発表での採択はありません。

研究発表に関する指針

本学会の重要な目的の一つは、未発表も含めた最新の研究成果を共有し活発な議論と情報交換を行うことである。この目的を達成するため、研究発表に関する以下の指針を定める。

1. 参加者間相互の信頼関係を著しく損なう、以下のような行為は禁止とする。
口頭発表会場とポスター会場（共にオンライン配信を含む）で発表された生データを、発表者の承諾なしに保存（画面キャプチャを含む）および撮影、録音、録画すること。
上記研究データについて、発表者の承諾なしに SNS 等で第三者に公開すること。
2. 発表に際しては、研究の核心となる分子名、方法、理論、アイデアなどを伏せて発表することは、できるかぎり避ける。
3. 特許申請などに関わる情報の取り扱い、発表者の自己責任とする。
4. 発表者は、年会発表において利益相反に該当する状況がある場合は開示する。

2018 年 9 月 14 日 第 20 期理事会 制定

2021 年 11 月 29 日 第 22 期第 3 回理事会にて指針 1. を一部修正 指針 4. を追加

◆一般演題（ポスター発表・公募シンポジウム口頭発表）募集について

一般演題発表形式

- ・ポスター発表：全採択演題で必須
- ・公募シンポジウム口頭発表：希望演題の中から公募シンポジウムオーガナイザーが選抜

【一般演題（ポスター発表・公募シンポジウム口頭発表）における注意事項】

- ・一般演題は、日本分子生物学会非会員の場合でも、「非会員（一般演題投稿あり）」のカテゴリーにて早期参加登録をした方は、投稿・発表が可能です。
- ・日本生物物理学会会員の方は、正会員・学生会員のカテゴリーにて参加登録をし、投稿・発表いただけます。
- ・学会員として投稿・発表をされる場合は、2025 年度会費の納入が必要です。未入会の方は、学会ホームページより別途入会手続きを行ってください。また、年度会費を未納の方は、お早めにご納入ください。
- ・演題投稿を行う前に、必ずユーザー登録と早期参加登録を行ってください。
- ・演題投稿は必ず発表者が行ってください。オンライン要旨では、演題投稿者の名前が自動的に発表者として掲載されます。
- ・本年会では一人一演題の発表とさせていただきます。
- ・発表言語、要旨の登録言語について、ポスターは日本語もしくは英語となり、発表者に一任します。公募シンポジウムの発表言語は各オーガナイザーにより指定されておりますので、公募シンポジウム口頭発表へご応募の際には、オーガナイザー指定の言語で要旨をご登録ください。
- ・発表に使用するポスターやスライドは、英語表記を推奨いたします。
- ・締切後の新規投稿、投稿内容の修正は受け付けません。

1. 公募シンポジウムへの採択希望

全ての公募シンポジウム（120 分枠）および一部公募ミニシンポジウム（80 分枠）において、一般演題から口頭発表の採択希望を募ります。採択希望者は公募シンポジウムページより、採択を希望する公募シンポジウム企画を選択してください。

公募シンポジウムの発表言語は各オーガナイザーにより指定されます。要旨についても各指定の発表言語でご登録ください。

採否の選考は、各公募シンポジウム企画のオーガナイザー、およびプログラム委員会にて行い、9月上旬にメールにて連絡します。

※公募シンポジウムに採択された演題も、ポスター発表を併せて行っていただきますので、ご注意ください。

※日本生物物理学会員の方も採択希望をいただけます。

2. MBSJ2025 ポスター賞 ※学生のみ応募可

本年会では一般演題または LBA に申し込まれた方から学生を対象にポスター賞への応募を募集いたします。優れた演題には MBSJ2025 Poster Award を授与します。学生の皆様は是非、ご応募ください。

応募対象：学生（日本生物物理学会 学生会員の方も応募可能）

応募方法：一般演題または LBA 投稿時に該当の設問にチェックしてください。

選考方法：ご応募いただいた演題は当日会場にて審査予定です。

受賞者への通知：会期後に年会 HP 上で公開予定です。

◆演題投稿方法

一般演題およびシンポジウム指定演者の講演要旨は Confit で受け付けます。

1. 演題投稿方法

年会ホームページ上の「参加登録 / 演題投稿」にアクセスし、画面の表示に従って、先にユーザー登録と早期参加登録を行ってください。

2. 演題の登録・編集

①ホーム画面を開き「新規演題登録」をクリックし、演題の登録を行います。

②演題情報を入力項目に従って入力し「確認する」ボタンを押して確認ページへ進みます。

入力内容を確認し、問題なければ「登録する」ボタンをクリックし登録。

「公募シンポジウム口頭発表」での採択希望がある場合には、該当の設問で選択してください。

③登録演題を編集する場合には、「編集」ボタンから操作してください。

演題投稿を完了させる前に入力途中で「一時保存」をクリックすると、それまでに入力した内容が保存されます。

再度編集を再開する場合には、「編集」ボタンから操作してください。

3. 指定シンポジウム / 公募シンポジウム 指定演題の投稿

指定シンポジウム / 公募シンポジウムの指定演題の講演者には、6 月上～中旬に年会事務局より、参加登録、演題登録のご案内をお送りいたします。Confit へログインの上、7 月 31 日(木)までに要旨の投稿を行ってください。

4. 演題タイトル、著者名、所属名と要旨の形式

演題タイトル、著者名、所属名は、日本語・英語を用意してください。

要旨本文は自身の発表言語（ポスター発表の場合はポスターの言語）に合わせた日英いずれかの言語で用意してください。ポスター発表の討論の言語は発表者に任せます。

※一般演題で公募シンポジウム口頭発表へ応募する場合は、オーガナイザー指定の発表言語で要旨を登録してください。

要旨本文は、日本語では全角 850 文字（半角 1,700 文字）以内、英語では半角 1,700 文字以内で作成してください。

予め、文字数を制限内に調整した原稿を用意し、それを投稿画面にコピー・ペーストしてください。

※本年はグラフィカルアブストラクトの登録はございません。

5. 著者氏名のアルファベット表記

著者の名寄せは、入力されたアルファベット表記をもとにソートをかけて行われます。従って、入力されたアルファ

ベクトル表記が異なる場合は、同一人物として認識されません。複数の演題の著者となる場合には、注意してください。

6. 一般演題（ポスター）連続発表希望

一般演題（ポスター）発表では、連続発表希望（連続した演題番号）を受け付けます。連続発表を希望するすべての演題の投稿終了後、年会ホームページの「連続発表登録」にアクセスし、一連の連続発表の代表者が演題の順序を申請してください。申請の際には、すべての演題の発表者氏名、演題の受付番号が必要です。

7. 演題投稿受領通知

演題投稿後、登録したメールアドレス宛に受付番号を含む演題受領通知が送信されます。このメールが届かない場合は、演題登録が完了していない可能性があります。登録内容を確認後、完了していない場合は、再度登録をお願いします。

8. 投稿内容の修正

演題投稿受付期間中は、Confitにログインすることにより、演題投稿画面から投稿内容の修正が可能です。修正回数に制限はありません。内容を更新するたびに、更新内容がメールで通知されますのでご確認ください。投稿受付締切後の演題修正は原則として受け付けません。ギリシャ文字、斜体、上付き、下付き、数式などは、細心の注意を払って確認してください。

9. 演題の取消

既に登録した演題を取消したい場合は、前述と同様の方法で演題投稿画面にログインし、「削除」を選択してください。投稿受付締切後の演題取消は原則として受け付けません。

10. 一般演題の採否通知

9月上旬にメールにて通知予定です。なお、演題の採否、発表日については一任願います。

【海外若手研究者招聘企画について（応募締切：2025年7月31日(木)）】

本年会では、海外在住の若手研究者の旅費を補助します。

補助金額はアジア在住者の場合10万円、欧米豪在住者の場合20万円とし、演題採択者のなかから20名程度（予定）を厳正な審査によって決定いたします。

応募資格：

- ① 3年以上分子生物学会の会員であること
- ② 2025年12月2日(火)時点で海外滞在期間2年以上（ポジション問わず）かつ学位取得後10年以内の方（ただし、ライフイベントは考慮します）、
- ③ 第47回分子生物学会年会（MBSJ2024）で海外若手研究者招聘企画に採択された方は対象外とします（第46回年会（MBSJ2023）以前の採択者による再度の応募を妨げません）。

応募受付期間：7月1日(火)～7月31日(木)

採択通知：9月上旬（予定）

※本企画へのご応募は日本分子生物学会の会員のみを対象といたします。

※演題投稿締切後の演題取り下げは認められませんので、ご注意ください。

※分子生物学会の貴重な予算からサポートされるものですので、口頭発表者への質疑やポスター討論など、本年会への積極的な参加と貢献をお願いいたします。

◆応募要領

- 1) 年会ホームページより専用の応募フォーマットをダウンロードし、必要事項を入力してください。
- 2) 参加登録画面で「海外若手研究者招聘企画に応募」のカテゴリを選択し、応募資格を満たしているかどうかの設問にチェックの上、入力済みの応募フォーマットをアップロードしてください。

【全体日程表（予定）】

	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21									
12月3日 (水)																							
			シンポジウム (120 min) 9:00-11:00			ミニシンポジウム (80 min) 11:15-12:35	バイテクセミナー (50 min) 13:00-13:50 学会企画 (75 min) 12:50-14:05		シンポジウム (120 min) 14:20-16:20				フォーラム (75 min) 19:15-20:30										
	ポ 貼 ス 付 タ ！										展 示 会 見 学	ポスター 発表・討論 (120 min) 17:00-19:00		ポ ス タ ー ！ 撤 去	マッチング企画 (75 min) 19:15-20:30								
														機器・試薬・書籍展示 11:00-19:00									
12月4日 (木)																							
			シンポジウム (120 min) 9:00-11:00			ミニシンポジウム (80 min) 11:15-12:35	バイテクセミナー (50 min) 13:00-13:50 学会企画 (75 min) 12:50-14:05		シンポジウム (120 min) 14:20-16:20				フォーラム (75 min) 19:15-20:30 通常総会										
	ポ 貼 ス 付 タ ！										展 示 会 見 学	ポスター 発表・討論 (120 min) 17:00-19:00		ポ ス タ ー ！ 撤 去	マッチング企画 (75 min) 19:15-20:30								
														機器・試薬・書籍展示 11:00-19:00									
12月5日 (金)																							
			シンポジウム (120 min) 9:00-11:00			ミニシンポジウム (80 min) 11:15-12:35	バイテクセミナー (50 min) 13:00-13:50 学会企画 (75 min) 12:50-14:05		シンポジウム (120 min) 14:20-16:20				市民公開講座 (75 min) 19:15-20:30										
	ポ 貼 ス 付 タ ！										展 示 会 見 学	ポスター発表・討論 (120 min) 17:00-19:00 高校生研究発表 17:00-19:00		ポ ス タ ー ！ 撤 去									
														機器・試薬・書籍展示 11:00-19:00									

※ 2025 年 6 月時点での予定であり、今後変更される場合があります。

【演題カテゴリー】

演題登録時には下記の演題カテゴリーの1および2から、それぞれ2つずつ選択いただきます。

1. 対象・現象など

大項目		小項目	
1	分子	a	遺伝子・核酸
		b	ゲノム情報
		c	DNA複製
		d	組換え・変異・修復
		e	エピジェネティクス・クロマチン
		f	転写
		g	RNA・RNP
		h	翻訳
		i	タンパク質（構造）
		j	タンパク質（機能）
		k	糖・脂質・代謝産物
		l	分子進化・比較ゲノム
		m	その他
2	細胞	a	染色体・核構造体
		b	相分離
		c	タンパク質プロセッシング・輸送・局在化
		d	細胞質膜オルガネラ
		e	細胞接着・細胞運動・細胞外基質
		f	生体膜・細胞骨格
		g	細胞増殖・分裂・周期
		h	シグナル伝達（翻訳後修飾）
		i	シグナル伝達（生理活性物質）
		j	細胞老化・細胞死
		k	その他

大項目		小項目	
3	発生・再生	a	器官・形態形成・再生
		b	幹細胞
		c	細胞分化
		d	初期発生
		e	生殖
		f	その他
4	高次生命現象・疾患	a	共生・寄生
		b	生物リズム・生物時計・睡眠
		c	脳・神経系・神経発生・構造
		d	脳・神経系・行動
		e	脳・神経系・疾患
		f	免疫・炎症
		g	感染・ウイルス・ワクチン
		h	老化
		i	がん細胞
		j	がん組織・がん治療
		k	代謝・栄養
		l	遺伝性疾患
		m	植物
		n	マクロ生物学・生態
		o	その他

2. 方法など

i	核酸工学・ゲノム編集
ii	タンパク質工学
iii	ゲノム工学・細胞工学
iv	発生工学・オルガノイド
v	光遺伝学・電気生理学
vi	システム生物学
vii	合成生物学
viii	ケミカルバイオロジー
ix	構造生物学（X線結晶構造解析・クライオEM）
x	機能予測・薬物設計
xi	バイオインフォマティクス
xii	オミクス解析

xiii	シングルセル解析
xiv	イメージング
xv	超解像・特殊イメージング法
xvi	画像解析・バイオイメージインフォマティクス
xvii	病因解析・診断
xviii	個体行動解析
xix	スクリーニング
xx	ロボット・ラボラトリーオートメーション
xxi	深層学習・機械学習
xxii	数理モデル・シミュレーション
xxiii	その他

【シンポジウム 日程表】

〈講演言語について〉 **E** 英語・ **J** 日本語

※ **公募**と記載のあるシンポジウム、ミニシンポジウムでは一般演題から演題を採択予定です。

指定企画は、年会の指定企画シンポジウムです。

建物	フロア	部屋	会場	12月3日(水)		
				9:00-11:00	11:15-12:35	14:20-16:20
会議センター	3F	メインホール	第1会場	1AS-01 公募 J 異分野融合が拓くマルチオミクス生命科学の新機軸：生命システム理解から分子デザインまで 島村 徹平 / 大澤 毅	1MS-01 J エボロジー～オルガネラヒモロジーから紐解く生物進化～ 安藝 翔 / 椎葉 一心	1PS-01 E 生命の萌芽の構築と理解 林 克彦 / 斎藤 通紀
		301	第2会場	1AS-02 公募 E トランスポゾンと宿主：共生、進化、そして今後の発展性 塩見 美喜子 / 岩崎 由香	1MS-02 J 心臓生物学の新展開 真鍋 一郎 / 尾池 雄一	1PS-02 E ヒトの脳発生と機能研究の最前線 鈴木 郁夫 / 岩田 亮平
		302	第3会場	1AS-03 公募 E 多細胞のロバストネスを再考察する 共催：学術変革領域研究 (A)「多細胞生命自律性」 石谷 太 / 井垣 達史	1MS-03 公募 J 分子修飾が生み出す生命の制御と疾患 今野 雅允 / 常陸 圭介	1PS-03 公募 J 細胞・分子から紐解く生老病死の統合理解 田中 知明 / 南野 徹
		303	第4会場	1AS-04 公募 J RNA エピコードの生理機能解明とその制御 齋藤 都暁 / 小川 亜希子	1MS-04 公募 J スキマの分子生物学 村井 純子 / 中田 聡	1PS-04 公募 J CRISPR-Cas9 から拡張していくノックイン技術の新潮流 共催：日本ゲノム編集学会 大塚 正人 / 水野 聖哉
		304	第5会場	1AS-05 公募 E 発生過程におけるゲノム継承 坪内 知美 / 大字 亜沙美	1MS-05 E 何が私たちを形作るのか？遺伝子、身体、文化による人類進化の多階層的理解 野村 真 / 松前 ひろみ	1PS-05 公募 E 高分解能蛍光顕微鏡技術は分子細胞生物学領域にどのようなインパクトを与えられるか？ 川辺 浩志 / 岡田 康志
		311+312	第6会場	1AS-06 公募 E 細胞間の物質輸送や細胞間接着を介した相互作用に依存した細胞集団の動態制御 末次 志郎 / 竹田 哲也	1MS-06 公募 J 次世代ハイボキシア研究者が巻き起こす生命科学の新潮流 共催：ハイボキシア研究会 鈴木 教郎 / 中山 恒	1PS-06 公募 E 生命の3ドメインから読み解く染色体ダイナミクスの普遍原理と多様性 竹俣 直道 / 尾崎 省吾
		313+314	第7会場	1AS-07 公募 J 生物の栄養適応システム 岡本 直樹 / 小幡 史明	1MS-07 J 地球と生命の共進化の理解から宇宙生命探査へ 協賛：学術変革 B 復元細胞機能学 松尾 太郎 / 渡辺 智	1PS-07 公募 E 細胞集団移動が織りなす時空間秩序 堤 弘次 / 稲木 美紀子
		315	第8会場	1AS-08 公募 J ゲノム機能データとデータベースが駆動するゲノム科学 川路 英哉	1MS-08 J 神経疾患の鍵を握るプロテオスタシス：ユビキチン化とタンパク質分解の新たな視点 松本 弦 / 若月 修二	1PS-08 公募 E 金属トランスポーターの最前線：構造、機能、疾患、そして創薬 深田 俊幸 / 神戸 大朋
	4F	411+412	第9会場	1AS-09 公募 J 「プログラムされたストレス」が駆動する真核生物の成長・発生戦略 大谷 美沙都 / 亀井 宏泰	1MS-09 E 数理解タ科学が拓く生命医科学研究の未来 石川 俊平 / 織田 遥向	1PS-09 公募 E ゲノム高次構造の謎に迫る：分子レベルで読み解く制御メカニズム Kristian Jeppsson / 坂田 豊典
		413	第10会場	1AS-10 公募 J 核の「かたち」が変わるとき 山中 総一郎 / 大杉 美穂	1MS-10 J 物理的微小環境による遺伝子発現制御と発生、疾患の理解 川合 智子 / 劉 孟佳	1PS-10 公募 J モデル生物 C. elegans を活用した疾患研究 首藤 剛 / 林 悠
		414+415	第11会場	1AS-11 公募 E 実装を目指す発生・分化・再生における細胞運命研究の新潮流 松本 征仁 / 岩槻 健	1MS-11 J 魚類糖生物学—魚類における糖鎖の生理機能に迫る— 本田 晃伸 / 田角 聡志	1PS-11 公募 E 系譜と多機能性から解く線維芽細胞分子生物学 仁科 隆史 / 倉島 洋介
		416+417	第12会場	1AS-12 公募 J 組織間相互作用を駆使した多彩な生存戦略 山川 智子 / 大澤 志津江	1MS-12 J 染色体核型解析と大規模ゲノム解析の融合科学 共催：一般財団法人 染色体学会 田辺 秀之 / 宇野 好宣	1PS-12 公募 J 細胞外環境の変化が駆動する生理機能と疾患形成のメカニズム 辰川 英樹 / 木岡 紀幸
		418	第13会場	1AS-13 公募 J ケミカルホメオスタシス：化学パラメーターで紐解く細胞内恒常性 潮田 亮 / 河野 恵子	1MS-13 公募 E ゲノムアラインメントで生命の樹全体の進化を解明 Charles Plessy / Martin Frith	1PS-13 公募 E RNA のトリセツ ～ RNA エクサプリーションによる分子装置の機能拡張 中川 真一 / 高橋 葉月
		419	第14会場	1AS-14 公募 J ストレス応答：分子～生命体の視点から 池田 史代 / 永田 理奈	1MS-14 J 生命の限定合理性を紐解く：細胞・組織・個体の知的適応 木村 暁 / 小坂田 文隆	1PS-14 公募 J 化学・生物学・工学・医学連携が可能にする「組織血管化」の統合的理解 水谷 健一 / 石井-嶋田 弘子
		501	第15会場	1AS-15 公募 E 遺伝子発現制御研究の最先端と新展開 笹井 紀明 / 薬師寺 那由他	1MS-15 J 加齢による生体変容の分子・細胞レベルでの理解 共催：JST さきがけ「加齢による生体変容の基盤的な理解」 渡部 聡朗 / 三好 知一郎	1PS-15 E 多細胞的に振る舞う単細胞生物の巧妙な戦略—細胞間コミュニケーションと生存のメカニズム 八代田 陽子 / 沖 昌也
	5F	502	第16会場	1AS-16 公募 J 血管周囲細胞の疑問に挑戦する—残されたフロンティアへの情熱— 山本 誠士 / 榎本 篤	1MS-16 J 自閉スペクトラム症の異分野横断的理解 協賛：日本医療研究開発機構 脳神経科学統合プログラム 岩見 真吾 / 小池 進介	1PS-16 E メカノバイオロジー劇場：力学的なシグナルの舞台裏 茂木 文夫 / 倉永 英里奈
		503	第17会場	1AS-17 公募 J 健康と疾患をつなぐシングルセル制御学 野村 征太郎 / 油谷 浩幸	1MS-17 J 脂質動態から探る核膜と核膜孔機能の最前線 松村 美紀 / Richard Wong	1PS-17 E 進化の限界と可能性 入江 直樹 / 土松 隆志
		511+512	第18会場	1AS-18 公募 J 「メソスケール構造体」：生物と無生物とを繋ぐ細胞内構造体のイメージング 共催：学術変革領域研究 (B)：STED 技術による生物と無生物をつなぐメソスケール現象の動的解明 米田 竜馬 / 黒澤 俊介	1MS-18 J 新規アプローチによる運動器理解の深化 吉本 由紀 / 乾 雅史	1PS-18 公募 J 性差を科学する：性差研究の今、そして未来 鈴木 堅太郎 / 溝上 顕子

【シンポジウム 日程表】

〈講演言語について〉 **E** 英語・ **J** 日本語

※ **公募**と記載のあるシンポジウム、ミニシンポジウムでは一般演題から演題を採択予定です。

□は、年会の指定企画シンポジウムです。

建物	フロア	部屋	会場	12月4日(木)		
				9:00-11:00	11:15-12:35	14:20-16:20
会議センター	1F	メインホール	第1会場	2AS-01 細胞老化研究が導く生命科学の理解 高橋 暁子 / 小林 武彦 E	2MS-01 ゲノム医療とゲノム代謝・応答・修復 中田 慎一郎 / 中沢 由華 J	2PS-01 幹細胞合成生物学 谷内江 望 / Alev Cantas 公募 E
	3F	301	第2会場	2AS-02 細胞運命決定を担うクロマチンのエピコードの解読 立花 誠 / 中山 潤一 E	2MS-02 細胞間相互作用が駆動する多細胞ダイナミクス 菊池 浩二 / 三井 優輔 J	2PS-02 真核生物における翻訳が制御する生命現象・疾患 藤原 俊伸 / 山下 暁朗 公募 J
		302	第3会場	2AS-03 神経変性疾患に対峙する基礎から応用研究の最前線 齋尾 智英 / 奥村 正樹 公募 J	2MS-03 学際融合で挑む代謝・栄養学の新機軸 宮本 崇史 / 高橋 伸一郎 J	2PS-03 染色体の多様性がもたらすインパクト 趙 民知 / 松本 知訓 公募 J
		303	第4会場	2AS-04 転移因子が司るゲノム制御 木下 善仁 / 中濱 泰祐 公募 J	2MS-04 細胞内ナノスケール空間が司る生命現象 岩間 亮 / 吉村 証彦 J	2PS-04 RNA 治療の可能性を拓く：基礎研究から臨床応用への展望 谷 英典 / 秋光 信佳 公募 E
		304	第5会場	2AS-05 多細胞組織の休眠研究と技術開発の最前線 高岡 勝吉 / 本田 瑞季 公募 J	2MS-05 Vasohibin/ 脱チロシン化研究の最前線 共催：Vasohibin 研究会 小林 美徳 / 古谷 裕 公募 J	2PS-05 ライフステージにおける組織恒常性の変化 一條 遼 / 佐田 亜衣子 公募 J
		311+312	第6会場	2AS-06 複製ストレスとロバストネス：細胞運命を司る巧妙なバランス 塩谷 文章 / 高橋 達郎 公募 J	2MS-06 加齢に伴う器官変容のメカニズム 共催：JST さきがけ「加齢による生体変容の基盤的な理解」 大東 いずみ / 堅田 明子 J	2PS-06 ストレスや薬物依存行動を司るエピジェネティック遺伝子発現メカニズム 谷口 誠 / 内田 周作 公募 E
		313+314	第7会場	2AS-07 RNA 制御の破綻がもたらす疾患メカニズムの最前線 Masahiro Morita / Lynne Postovit 公募 E	2MS-07 未来を創る遺伝子改変技術：発生工学の新たな地平線 山本 正道 / 畑田 出穂 J	2PS-07 サンゴ礁保全へ：環境遺伝子解析が開く環境動態研究の新境地 米澤 遼 / 安田 仁奈 公募 J
		315	第8会場	2AS-08 in vitro で表現し、計測して理解する 服部 一輝 / 新井 健太 公募 J	2MS-08 モビローム研究最前線：動く遺伝子の謎に迫る 後援：大隅基礎科学創成財団 鈴木 仁人 / 新谷 政己 J	2PS-08 DNA 複製とゲノム・染色体構造のダイナミクス 平谷 伊智朗 / 鐘巻 将人 公募 E
	4F	411+412	第9会場	2AS-09 新たな手法に基づくオミクスデータが拓く生命科学の最前線 共催：JST ライフサイエンスデータベース統合推進事業「統合化推進プログラム」 伊藤 隆司 公募 J	2MS-09 リボソームクラブ：リボソーム・翻訳研究の最前線 北村 大樹 公募 J	2PS-09 アカデミア創業会議 2025 池田 幸樹 / 井上 喜来々 公募 J
		413	第10会場	2AS-10 CAR-T から展望できるデザイナー細胞技術の新展開 石井 秀始 / 原 知明 公募 E	2MS-10 生命維持の要：多様な生物における膜輸送体の機能と進化 永島 鮎美 / 小林 彰子 J	2PS-10 代謝レギュレーションの老化変容とその修復機構 近藤 祥司 / 田久保 圭吾 公募 J
		414+415	第11会場	2AS-11 腸内デザイン学の社会実装化に向けた超学際研究 佐々木 伸雄 / 福田 真嗣 公募 E	2MS-11 タンパク質複合体の動的相互作用と機能解明 高橋 将晃 公募 E	2PS-11 構造生命科学の新展開—ダイナミクスから in situ まで— 西増 弘志 / 加藤 英明 公募 J
		416+417	第12会場	2AS-12 超世代的生物学 根本 崇宏 / 栃谷 史郎 公募 E	2MS-12 神経系の修復と保護への新たなアプローチ 鯉沼 真吾 / 村田 等 J	2PS-12 代謝が解き明かす体質の科学 本村 泰隆 / 柳川 享世 公募 J
		418	第13会場	2AS-13 GTP 生物学の進歩 竹内 恒 / 佐々木 敦朗 公募 J	2MS-13 雷！プラズマ駆動型科学にみる植物内分子応答 協賛：学術領域変革研究 (A)「プラズマ種子科学」 國枝 正 / 古閑 一憲 J	2PS-13 ヘルオキシソーム研究の最前線〜70年の歩みとこれからの展開〜 山下 俊一 / 杉浦 歩 公募 J
		419	第14会場	2AS-14 光生物学：可視光線と紫外線への生物学的応答 川澄 正興 / Yu-Ying He 公募 E	2MS-14 先端技術で拓く視覚・網膜研究の新時代 大津 航 / 高橋 慶 J	2PS-14 多細胞システムのための場の設計・制御 共催：学術変革 A マルチモデル ECM 萩原 将也 / 鳴瀧 彩絵 公募 E
	5F	501	第15会場	2AS-15 個体発生・疾患におけるエンハンサー研究の最前線 斉藤 典子 / 深谷 雄志 E	2MS-15 バイオグリーントランスフォーメーションで拓く CO ₂ 固定の新時代 小倉 淳 / 鈴木 道生 公募 J	2PS-15 「次のパンデミック」に備えるための実験ウイルス学の挑戦 協賛：国際先端研究 佐藤 佳 / 福原 崇介 公募 J
		502	第16会場	2AS-16 細胞分化の観点から探る神経系の進化 平田 たつみ / Yan Zhu E	2MS-16 病気とミトコンドリアのクロストーク 武田 啓佑 / 志村 大輔 J	2PS-16 不均一性制御の定量生物学 2025 中山 淳 / 宮田 憲一 公募 J
		503	第17会場	2AS-17 超階層生物学：新しいモデル生物を用いた新展開 重信 秀治 / 佐竹 暁子 E	2MS-17 脳サイズの生物学と小頭症の病理 大隅 典子 / 星野 幹雄 E	2PS-17 変遷する細胞外小胞研究とその未来 協賛：日本細胞外小胞学会 横井 暁 / 山本 雄介 公募 J
		511+512	第18会場	2AS-18 動物が示す多様な生得的社会性行動の分子神経基盤 佐藤 耕世 / 苅野 友美 公募 E	2MS-18 ライブイメージングにより解き明かす配偶子形成の仕組み 伊藤 将 / 今井 裕紀子 E	2PS-18 糖尿病の分子生物学：インスリン分泌と抵抗性のメカニズム 平池 勇雄 / 宮地 康高 公募 E

【シンポジウム 日程表】

〈講演言語について〉 **E** 英語・ **J** 日本語

※ **公募**と記載のあるシンポジウム、ミニシンポジウムでは一般演題から演題を採択予定です。

■は、年会の指定企画シンポジウムです。

建物	フロア	部屋	会場	12月5日(金)		
				9:00-11:00	11:15-12:35	14:20-16:20
会議センター	3F	メインホール	第1会場	3AS-01 光・化学操作により捉える細胞増殖メカニズム 川島 茂裕 / 知念 拓実 公募 J	3MS-01 がん三次元培養研究の新展開 岡本 康司 / 後藤 典子 J	3PS-01 新規モデル生物とバイオ DX 共催: JST COI-NEXT バイオ DX 産学共創拠点 中前 和恭 / 坊農 秀雅 公募 J
		301	第2会場	3AS-02 遺伝子発現・非遺伝子発現を司る non-canonical 転写制御 高橋 秀尚 / 二村 圭祐 公募 J	3MS-02 クロマチン動態から臨床応用まで広がる転写研究の新展開 伊藤 敬 / 井上 聡 E	3PS-02 オープンライフサイエンスの新時代 大浪 修一 / 粕川 雄也 公募 J
		302	第3会場	3AS-03 攪乱 RNA—生体を真に制御する RNA の生理とその適応機構 河原 行郎 / 小林 (石原) 美栄 公募 J	3MS-03 美しい脈管ネットワークで決まる臓器機能 坂上 倫久 / 吉松 康裕 J	3PS-03 膜・非膜オルガネラとコンタクト: 動態と機能の新視点 共催: 生命創成探究センター 椎名 伸之 / 中津 史 公募 J
		303	第4会場	3AS-04 オートファジーから広がる膜界面生物学 共催: 学術変革領域研究 (A)[オートファジーから広がる膜界面生物学] 野田 展生 / 池ノ内 順一 公募 J	3MS-04 生殖代謝学: 環境と代謝による生殖サイクルの制御 林 陽平 / 前澤 創 J	3PS-04 遺伝子発現と染色体制御の多様性 澁谷 大輝 / 深谷 雄志 公募 J
		304	第5会場	3AS-05 栄養・代謝から紐解く老化、加齢性疾患 近藤 嘉高 / 藤田 泰典 公募 J	3MS-05 エピゲノブリッジ: クロマチン記憶の来し方行く末 協賛: 学術変革 (B) エピゲノブリッジ 日詰 光治 / 寺川 剛 J	3PS-05 全能性細胞における細胞運命制御機構 石津 大嗣 / 原田 哲仁 公募 J
		311+312	第6会場	3AS-06 バクテリアとオルガネラでの核様体形成と代謝との共役機構の最前線 加生 和寿 / 大島 拓 公募 E	3MS-06 骨格筋を基軸とした運動栄養生物学の新展開 小野 悠介 / 伊藤 尚基 J	3PS-06 腎臓と血圧の多様な働きと病態を最先端の研究から理解する 共催: 日本腎臓学会 豊原 敬文 / 小豆島 健護 公募 E
		313+314	第7会場	3AS-07 染色体の構造と機能を支える超分子複合体 協賛: 学術変革領域研究 (A), クラスター細胞学 村山 泰斗 / 高橋 元子 公募 E	3MS-07 生体の恒常性維持における糖鎖修飾の重要性 藤平 陽彦 / 今江 理恵子 J	3PS-07 スプライシング: その精巧なメカニズムと破綻による疾患 片岡 直行 / 甲斐田 大輔 公募 J
		315	第8会場	3AS-08 超高齢社会の QOL 向上のための地球環境因子と全身と末梢を繋ぐ多細胞生命システム適応基盤 跡見 順子 / 清水 美穂 公募 J	3MS-08 TOR をとりまく栄養応答の最前線 中津海 洋一 / 谷川 美頼 公募 E	3PS-08 エピゲノム制御が司る生命現象とその破綻による疾患発生 竹島 秀幸 / 竹信 尚典 公募 J
	4F	411+412	第9会場	3AS-09 神経伝達物質受容体の多層的理解と機能制御: 原子から個体へ 清中 茂樹 / 山下 敦子 公募 J	3MS-09 食の多様性と普遍性: 生命をかたちづくる見えざる力 津久井 久美子 / 小山 隆太 J	3PS-09 アシル化の生物学 梅原 崇史 / 古園 さおり 公募 J
		413	第10会場	3AS-10 ばねばねロック〜さまざまな動物が奏でる多様な骨格形成〜 熱田 勇士 / 黒田 純平 公募 J	3MS-10 次世代ステロイドホルモン研究の最前線 馬場 崇 / 今井 祐記 公募 J	3PS-10 植物の運動: 目立たないが重要な運動のメカニズムを探る 森田 (寺尾) 美代 / 郷 達明 公募 J
		414+415	第11会場	3AS-11 多能性幹細胞を用いた研究の最前線 宮岡 佑一郎 / 林 洋平 公募 J	3MS-11 自然環境下における微生物の遺伝子発現の分子機構の理解 島田 友裕 / 小笠原 寛 公募 J	3PS-11 「延長された表現型」の分子メカニズム: 異種生物同士の相互作用を支えるエフェクター研究の最前線 共催: 学術変革領域研究 (A) 「共進化表現型創発: 延長された表現型の分子機構解明」 丹羽 隆介 / 春本 敏之 公募 J
		416+417	第12会場	3AS-12 小胞体の機能を支える多彩な分子メカニズム 蜷川 暁 / 堤 智香 公募 J	3MS-12 大規模バイオバンクを基盤とするヒト疾患研究の最前線 信國 宇洋 / 後藤 雄一 J	3PS-12 染色体配列解読の革新がもたらすゲノム科学の未来像 今 鉄男 / 濱田 麻友子 公募 E
		418	第13会場	3AS-13 ゲノムエポックが引き起こした大進化を探る 遠藤 俊徳 / 峯田 克彦 公募 J	3MS-13 温泉微生物がもつ耐熱細胞外殻の分子機構 共催: ThermusQ 研究会 別所 義隆 / 中根 大介 J	3PS-13 多面的アプローチから迫る心臓システムの理解 松花 (谷) 子織 / 福井 一 公募 J
		419	第14会場	3AS-14 メタボローム研究の最前線 平山 明由 / 和泉 自泰 公募 J	3MS-14 老化抑制に資する代謝・ビタミンシグナル 堀江 公仁子 / 東 浩太郎 E	3PS-14 ここまで来た腎臓オルガノイド研究〜腎臓再生への道〜 共催: 国際先導研究 (西中村代表) 「腎臓を創る」 高里 実 / 横川 隆司 公募 E
	5F	501	第15会場	3AS-15 転移因子コードが誘導する核内 3 次元構造形成メカニズムの理解 一柳 健司 / 藤 泰子 公募 J	3MS-15 シングルセル解析が拓く病態生理学: データ解析と機能解析のハーモニー 山崎 昌哉 / 浅田 礼光 J	3PS-15 ミトコンドリアで働く分子たち - その振る舞いを基礎から見つめ直す - 荒蔵 裕平 / 吉井 紗織 公募 J
		502	第16会場	3AS-16 次世代形質を左右する母胎連関ネットワーク 三原田 賢一 / 豊島 文子 公募 J	3MS-16 魅惑の骨格筋生物学: 健康長寿への新たな旅 共催: 日本筋学会 鈴木 直輝 / 青木 吉嗣 E	3PS-16 RNA と結合タンパク質が支配する超複雑系の作用原理の解析 黒川 理樹 / 片平 正人 公募 J
		503	第17会場	3AS-17 核酸と感染症の病態制御 高橋 朋子 / 南宮 湖 公募 J	3MS-17 進化における革新と生物多様性の源泉としてのデノボ遺伝子誕生 末永 雄介 / Li Zhao E	3PS-17 老化と神経機能における糖と脂質代謝制御の分子機構 稲田 利文 / 魏 范研 公募 J
		511+512	第18会場	3AS-18 植物細胞可塑性: 数瞬の応答から悠久の進化にまで通底する適応機構 福島 健児 / 松永 幸大 公募 J	3MS-18 自閉スペクトラム症が示す多様な世界の理解を目指して - 動物からヒト、分子から個体、分野横断的な研究の最前線 - 内野 茂夫 / 古田島 浩子 J	3PS-18 核膜関連研究の新展開: 多様な生物学的機能と疾患との関連 上野 勝 / 正井 久雄 公募 J

【シンポジウム テーマ一覧】

※ **公募企画** と記載のあるシンポジウムでは、一般演題から複数演題を採択予定です。
☐ は、年会の指定企画シンポジウムです。

※セッション番号について：

開催日 + 午前 / 午後 (A / P) + シンポジウム (S) +- (ハイフン) + 会場

(例) 1AS-01：第1日目・午前・第01会場

※時間について：(午前) 9：00-11：00、(午後) 14：20-16：20

※講演言語について：**E** 英語 ☐ **J** 日本語

1AS-01	12月3日(水) 9：00～11：00
--------	---------------------

異分野融合が拓くマルチオミクス生命科学の新機軸：生命システム理解から分子デザインまで **公募企画** **J**
 New Directions in Multiomics Life Sciences via Interdisciplinary Integration: From Molecular Design to Living Systems Understanding

オーガナイザー：島村 徹平（東京科学大学）、大澤 毅（東京大学）

生命科学は今、革新的な計測・解析技術の目覚ましい進展により、未踏の知見領域を切り開きつつある。一細胞レベルでのマルチオミクス解析による分子メカニズムの精密な解明から、空間トランスクリプトームによる生体組織の立体的構造理解、さらにはAIと進化工学を融合させた革新的な分子設計の確立まで、生命科学は歴史的な転換期を迎えている。本シンポジウムでは、一細胞解析・空間オミクス・マルチオミクス・合成生物学・AI技術という最先端技術の有機的な融合を通じて、生命システムの階層的な理解に挑戦する新進気鋭の研究者たちが一堂に会し、分子から個体に至るマルチスケールな生命現象の最新知見を紹介する。本シンポジウムを通じて、次世代を担う若手研究者たちの参画を促し、本分野の更なる発展への確かな礎を築くことを目指す。

1AS-02	12月3日(水) 9：00～11：00
--------	---------------------

トランスポゾンと宿主：共生、進化、そして今後の発展性 **公募企画** **E**
 Transposons and Hosts: Symbiosis, Evolution, and Prospects

オーガナイザー：塩見 美喜子（東京大学）、岩崎 由香（理化学研究所）

トランスポゾンは、ヒトゲノムの約40%を占めると見積もられていた。しかし、Telomere-to-Telomere (T2T) コンソーシアムの最近の成果により、その割合は53%に達することが明確になった。この成果は、数億年にわたるヒト(宿主生物)とトランスポゾンの「奇妙な」共生関係の実態をあらためて浮き彫りにし、トランスポゾン研究の新しい時代を切り開いた。トランスポゾンによるゲノム侵入の真の目的は何なのか？我々宿主は、どのようにトランスポゾンの利己的性質を受け入れ、制御し、さらには自らの利益としようとしているのか？また、創薬の新しいモダリティとしての可能性を秘めているのか？本シンポジウムでは、トランスポゾンを多角的に眺め研究する国内外の専門家が一堂に会し、最先端の知見を共有、議論する。

1AS-03	12月3日(水) 9：00～11：00
--------	---------------------

多細胞のロバストネスを再考察する **公募企画** **E**
 Multicellular Robustness revisited

共催：学術変革領域研究 (A)「多細胞生命自律性」

オーガナイザー：石谷 太（大阪大学）、井垣 達吏（京都大学）

多細胞システムは、多様な攪乱を乗り越えて同じ形と機能を備えた構造体を再現よく作り出す能力「ロバストネス」を備える。約80年前にワディントンにより提唱されたこの概念は、システム生物学的手法などによる細胞内レベルの研究が進められてきたが、個体発生や疾患・老化防御を理解する上で必須な多細胞レベルでの理解は遅れている。本シンポジウムでは、独自視点から多細胞ロバストネスの本態に挑む研究者が最新データを共有・議論することで、ロバストネスを再考察したい。

1AS-04	12月3日(水) 9:00~11:00
RNA エピコードの生理機能解明とその制御 Physiological functions of RNA Epicodes and their regulation	公募企画 J
オーガナイザー：齋藤 都暁（国立遺伝学研究所）、小川 亜希子（東北大学）	
mRNA、tRNA、rRNA など多様な RNA 種に見出される RNA 修飾は、核酸に新たな化学的性質を付加する。その多くはゲノムが規定する情報に新たな階層のエピジェネティックコードを付加し、その異常は神経障害、癌などの様々な疾患に繋がることが明らかとなっている。本シンポジウムではこれを RNA エピコードと呼称し関連研究者を集め、分子制御メカニズム、生理機能、検出技術、医薬品応用など多角的な視点で議論し、次世代研究の展望を探る場としたい。	
1AS-05	12月3日(水) 9:00~11:00
発生過程におけるゲノム継承 Shaping genome and embryo during development	公募企画 E
オーガナイザー：坪内 知美（自然科学研究機構）、大字 亜沙美（理化学研究所）	
発生過程では、盛んな細胞増殖と細胞運命決定が同時に進行することで個体形成が実現する。細胞の未分化性維持や運命決定に関わるシグナリング経路の分子基盤は解明が進む一方、そのプロセスがゲノム保持と継承に与える影響は未解明な点が多い。本シンポジウムでは、同じゲノム情報を持ちながら細胞の形質に応じて巧みに制御されるゲノム継承のメカニズムについて、発生やゲノム恒常性に携わる研究者が一堂に会し、議論を深めたい。	
1AS-06	12月3日(水) 9:00~11:00
細胞間の物質輸送や細胞間接着を介した相互作用に依存した細胞集団の動態制御 Regulation of Cellular Collective Dynamics Dependent on Intercellular Material Transport and Adhesion-mediated Interactions	公募企画 E
オーガナイザー：末次 志郎（奈良先端科学技術大学院大学）、竹田 哲也（岡山大学）	
細胞は集まり個体を形成する。同種の細胞は集合し、接着分子を介した細胞間接着がシグナル伝達を担う。さらに、細胞突起、トンネリングナノチューブ、細胞外小胞などの膜構造による物質伝達も重要である。これらの膜構造構築による細胞の集合には細胞の形態形成が不可欠である。本シンポジウムでは細胞間接着、形態形成、シグナル伝達の分子機構を議論し、細胞集団を構成する細胞の相互作用を探る。	
1AS-07	12月3日(水) 9:00~11:00
生物の栄養適応システム Nutritional adaptation systems in multicellular organisms	公募企画 J
オーガナイザー：岡本 直樹（筑波大学）、小幡 史明（理化学研究所）	
生物には栄養状態の変化に柔軟に適応できるシステムが備わっている。本シンポジウムでは、昆虫から哺乳類まで多様な生物を用いて研究している若手研究者が一同に会し、生命活動の根幹を支える栄養適応システムに関する最新の知見を持ち合うことで、生物が持つ栄養適応戦略の統合的な理解を目指す。	
1AS-08	12月3日(水) 9:00~11:00
ゲノム機能データとデータベースが駆動するゲノム科学 Advancing genome biology through functional genomics data and databases	公募企画 J
オーガナイザー：川路 英哉（東京都医学総合研究所）	
ゲノム多様性やエピゲノム、トランスクリプトームといったゲノム機能・構造に関する様々な側面の解明がハイペースで続いており、これらは先端的な測定・解析技術および基盤として用いられるデータベースによって支えられています。本セッションでは、この分野における最新の研究とそこから得られたゲノムに関する知見について議論します。	

1AS-09	12月3日(水) 9:00~11:00
「プログラムされたストレス」が駆動する真核生物の成長・発生戦略 Growth and developmental strategies driven by “programmed stress” in eukaryotes オーガナイザー：大谷 美沙都（東京大学）、亀井 宏泰（金沢大学） 真核生物は転写・転写後調節や代謝制御といった多層的な制御ステップを介して、環境に合わせて成長や発生を調整し、自らのフィットネスを向上させる。こうした成長戦略はときに種特異的である一方、系統的に大きく異なる生物種間で類似のメカニズムが見出されることもある。本シンポジウムでは、さまざまな生物種を研究材料とする研究者からの話題提供を元に、真核生物に深く根ざした発生・成長制御のコア要素としての「プログラムされたストレス」に注目し、真核生物の成長戦略の真髄を議論する。	
公募企画 J	
1AS-10	12月3日(水) 9:00~11:00
核の「かたち」が変わるとき The Changing shape of the cell nucleus オーガナイザー：山中 総一郎（東京大学）、大杉 美穂（東京大学） 本シンポジウムでは「細胞核の変形」に関連した研究結果を幅広く紹介する。Closed mitosis をする生物は細胞周期に伴ってその核の形がダイナミックに変形する。また、Open mitosis を行う生物においても細胞分裂異常が核の形成異常につながるということがわかってきた。上記の例に加えて、神経細胞・生殖細胞・受精卵の分化や、老化・がん化においても核が様々にその形を変えることが知られている。そこで本シンポジウムでは、「核の形」に関連した研究発表を通して、「どんなときに核の形が変わるのか」、「核の形が変わると何が起きるのか」に関する理解を深めることを目的とする。	
公募企画 J	
1AS-11	12月3日(水) 9:00~11:00
実装を目指す発生・分化・再生における細胞運命研究の新潮流 New Trends in Cell Fate Research in Development, Differentiation, and Regeneration toward Implementation オーガナイザー：松本 征仁（順天堂大学）、岩槻 健（東京農業大学） 「細胞運命変換」をキーワードに、発生、分化、再生医療、ゲノム編集技術など、生命現象における細胞運命のダイナミクスとその実用化の可能性を深掘りします。神経、消化管や膵内分泌細胞の分化や代謝細胞の運命決定、さらにはオルガノイド技術を用いた機能性臓器作成の進展、最新のゲノム編集技術を活用した in vivo 遺伝子治療法の開発や、バイオイメージング技術を駆使し、血管との相互作用の重要性など、どのように細胞運命のダイナミクスに焦点を当てて最新の知見を紹介します。再生医療や疾患治療へのダイレクトリプログラミング技術導入など革新的なアプローチについても議論し、次世代型の社会実装の可能性を提案します。細胞運命変換の理解が、新たな治療法の開発に繋がる未来の鍵であることを強調し、幅広い分野での応用に向けた視点で多角的に論議し、これまでの枠組みを超えた新たな境界領域の発展のきっかけとなれば幸いです。	
公募企画 E	
1AS-12	12月3日(水) 9:00~11:00
組織間相互作用を駆使した多彩な生存戦略 Diverse Survival Strategies Driven by Inter-Tissue Interactions オーガナイザー：山川 智子（茨城工業高等専門学校）、大澤 志津江（名古屋大学） 組織・個体レベルでの解析技術の進展により、従来の常識を覆す多細胞コミュニティの動作原理が明らかになりつつあり、組織間相互作用を通じた形態形成や恒常性維持の制御機構が大きく注目されている。本シンポジウムでは、独自開発の手法を駆使して組織間相互作用の解明に挑む研究者を招き、多細胞システムの制御メカニズムやその破綻による疾患発症メカニズムについて、最新の知見と今後の展開を議論する。	
公募企画 J	

1AS-13	12月3日(水) 9:00~11:00
ケミカルホメオスタシス：化学パラメーターで紐解く細胞内恒常性 Chemical Homeostasis: Unraveling Cellular Homeostasis through Chemical Parameters オーガナイザー：潮田 亮（京都産業大学）、河野 恵子（沖縄科学技術大学院大学） 細胞内恒常性は生命特有の驚異的な頑強性としなやかな柔軟性を併せ持ち、一見相反するような多面的特性を有している。この複雑な多面性こそが生命の理解をより困難なものにしていると言ってよいだろう。本シンポジウムでは、プロテオミクス解析、高解像電子顕微鏡、深層学習など最新技術を駆使し、化学パラメーターに基づいて、細胞内恒常性の持つ多面性をより明確化することに挑戦する。分子から個体まで多階層にわたる化学パラメーターを集約し、老化や疾患研究への応用まで議論したい。	
公募企画 J	
1AS-14	12月3日(水) 9:00~11:00
ストレス応答：分子～生命体の視点から Stress responses from molecules to organisms オーガナイザー：池田 史代（大阪大学）、永田 理奈（京都大学） 様々なストレス刺激への細胞内および生体反応について、分子メカニズム、細胞内シグナル、動物モデル、疾患といった広い視点から理解を深める。	
公募企画 J	
1AS-15	12月3日(水) 9:00~11:00
遺伝子発現制御研究の最先端と新展開 The Frontiers and New Advances in Gene Expression Regulation Research オーガナイザー：笹井 紀明（奈良先端科学技術大学院大学）、薬師寺 那由他（理化学研究所） 動物の遺伝子発現制御は、シグナル伝達経路や転写因子に加え、クロマチン制御、転移因子、3次元ゲノム構造など、多様な仕組みで成り立っている。この制御機構は、胚発生や老化、疾患発症の生物学的プロセスに関与するだけでなく、種固有の制御機構は生命進化にも寄与してきた。本シンポジウムでは、in vitro および in vivo のアプローチで、生物学的現象の解明や制御機構の破綻による病態の理解を目指している研究者らが集まり、遺伝子発現制御機構の多様性や今後の展望について議論したい。	
公募企画 E	
1AS-16	12月3日(水) 9:00~11:00
血管周囲細胞の疑問に挑戦する―残されたフロンティアへの情熱― Challenging to the questions in perivascular cells - Passion for the Remaining Frontiers- オーガナイザー：山本 誠士（富山大学）、榎本 篤（名古屋大学） 血管は、血管内皮細胞の外側にペリサイトや線維芽細胞などの血管周囲細胞が存在し微小環境を構成している。血管周囲細胞は、ECM 産生やシグナル分子を精妙に制御し、臓器特異性や物理的強靱性を発現すると考えられている。しかしながら、血管周囲細胞の発生様式や分子機構については未だ議論の渦中である。本シンポジウムでは、血管周囲細胞の情熱的研究を紹介し、シニアから若手研究者とともに広く知識を共有し、残されたフロンティアとされる血管周囲細胞研究について熱く議論する。	
公募企画 J	
1AS-17	12月3日(水) 9:00~11:00
健康と疾患をつなぐシングルセル制御学 Single-cell Regulome Linking Health and Disease オーガナイザー：野村 征太郎（東京大学）、油谷 浩幸（東京大学） 健康と疾患の境目はどこにあるのか？細胞の集合体である個体を維持するために、臓器において個々の細胞はどのように生まれ変わり、そしてどのように他の細胞と連携して機能を生み出しているのか？果たして疾患とは何なのか？何を持って疾患と呼ぶのか？シングルセル解析・空間オミックス解析・デジタル AI・イメージング・ゲノム編集・モデリング・・・近年の解析・制御技術の発展によって、生命科学研究は大きく様変わりした。これらの最先端技術を組み合わせることで「健康と疾患の境目」を見つけ、これを制御して疾患を治療できる可能性が出てきた。本シンポジウムでは、これらの技術を開発・駆使して「健康と疾患」を制御しようとする最先端研究者が一堂に会し、新しい生命科学研究の今後の方向性について皆で一緒に考えてみたい。	
公募企画 J	

1AS-18 12月3日(水) 9:00~11:00

「メゾスケール構造体」：生物と無生物とを繋ぐ細胞内構造体のイメージング

公募企画

J

“Meso-scale structure”: Imaging the border between living and non-living materials

共催：学術変革領域研究 (B)：STED 技術による生物と無生物をつなぐメゾスケール現象の動的解明

オーガナイザー：米田 竜馬 (埼玉医科大学)、黒澤 俊介 (東北大学)

顕微鏡を用いて、我々は様々な「小さきもの」を観察することが可能となった。電子顕微鏡を用いればタンパク質や核酸の立体構造を、光学顕微鏡は細胞内の様々な生命活動を観察することができる。では「タンパク質や核酸（無生物）」と「細胞（生物）」の間は？本シンポジウムでは、数十 nm スケールの細胞内構造体「メゾスケール構造体」をターゲットとして、その構造や形成過程の観察方法やイメージング方法について紹介する。

1PS-01 12月3日(水) 14:20~16:20

生命の萌芽の構築と理解

E

Build and See: Toward Understanding the Nascence of Life

オーガナイザー：林 克彦 (大阪大学)、斎藤 通紀 (京都大学)

Recent advances in technologies for in vitro culture systems, genome editing, and live imaging are leading us to new horizons in developmental biology and medicine. This symposium will highlight how these advances, particularly through approaches involving the reconstitution of biological processes followed by investigation, are deepening our understanding of germline formation and early embryogenesis.

1PS-02 12月3日(水) 14:20~16:20

ヒトの脳発生と機能研究の最前線

E

Frontier Research on mechanisms underlying the evolution of human brain

オーガナイザー：鈴木 郁夫 (東京大学)、岩田 亮平 (ルーヴェンカトリック大学)

Humans have evolved outstanding cognitive abilities by enlarging and complexifying their cerebral cortex. In this symposium, we will invite leading scientists who utilize state-of-the-art technologies in the field to approach human brain evolution. Through sharing recent findings and discussing with international experts, we aim to enhance our understanding of the molecular and cellular mechanisms that drive human brain evolution.

1PS-03 12月3日(水) 14:20~16:20

細胞・分子から紐解く生老病死の統合理解

公募企画

J

Integrated Understanding of Life, Aging, Disease, and Death Unraveled from the Cellular and Molecular Perspectives

オーガナイザー：田中 知明 (千葉大学)、南野 徹 (順天堂大学)

エイジングシグナルやメタボリックストレスが織り成す複雑なネットワークは、細胞老化を超えて臓器や個体レベルの老化を形作り、多様な疾患の発症や進展に深く関与する。シングルセル解析や空間トランスクリプトミクス、プロテオミクスといった先端技術の進展により、これらのネットワークを細胞間や臓器間で動的かつ多角的に捉える新しい視点が得られている。本シンポジウムでは、神経、代謝、免疫、遺伝子の視点から生老病死のメカニズムを紐解く研究者が集い、エイジングと疾患病態の交絡と恒常性制御基盤の理解に向けた挑戦的な研究を紹介しながら、皆様と一緒に議論したい。

1PS-04	12月3日(水) 14:20~16:20
CRISPR-Cas9 から拡張していくノックイン技術の新潮流 The new trend in knock-in technology that is expanding from CRISPR-Cas9 共催：日本ゲノム編集学会 オーガナイザー：大塚 正人（東海大学）、水野 聖哉（筑波大学） 目的の DNA 断片を標的遺伝子座位に正確に挿入する遺伝子ノックイン技術のニーズは極めて高く、それを簡便且つ効率的に行う手法の開発・改良が求められている。本シンポジウムでは、古典的な手法から最新技術まで、標的遺伝子座位に長鎖 DNA 断片を挿入する多様なアプローチやその関連技術について紹介する。各演者が技術の現状、利点や課題、応用例等を共有し、それぞれの手法がもたらす新たな可能性や今後の展望について議論する。	
公募企画 J	
1PS-05	12月3日(水) 14:20~16:20
高分解能蛍光顕微鏡技術は分子細胞生物学領域にどのようなインパクトを与えられるか？ What impact can high-resolution fluorescence microscopy technology have on the field of molecular cell biology? オーガナイザー：川辺 浩志（群馬大学）、岡田 康志（理化学研究所） 細胞に発現するタンパク質の動態と局在を正確に把握することは、細胞の機能を理解する上で重要である。そのための技術として、空間分解能と時間分解能が高いライブイメージング技術や複数タンパク質を観察できる超解像蛍光顕微鏡技術が必要である。本シンポジウムでは、このような最先端の蛍光顕微鏡技術の原理を説明したうえで分子細胞生物学領域でのこれらの蛍光顕微鏡技術の今後の応用の可能性について議論したい。	
公募企画 E	
1PS-06	12月3日(水) 14:20~16:20
生命の3ドメインから読み解く染色体ダイナミクスの普遍原理と多様性 Exploring the universal principles and diversity of chromosome dynamics across the three domains of life オーガナイザー：竹俣 直道（立命館大学）、尾崎 省吾（九州大学） 長大な染色体を折り畳み、複製し、そして次世代へ分配するプロセスはあらゆる生命に不可欠である。一方、共通の祖先から誕生したはずのバクテリア、アーキア、そして真核生物の間ではこのメカニズムに無視できないほどの多様性が存在する。本シンポジウムでは、各生命ドメインの染色体ダイナミクスに関する最新の研究成果を紹介するとともに、遺伝システムの多様性とその背後に隠された共通原理を議論する。	
公募企画 E	
1PS-07	12月3日(水) 14:20~16:20
細胞集団移動が織りなす時空間秩序 The Spatiotemporal Order of Collective Cell Migration オーガナイザー：堤 弘次（北里大学）、稲木 美紀子（兵庫県立大学） 細胞の集団移動は、細胞が協調して自己組織化する過程で生じ、多細胞生物の発生、再生、がんの浸潤などで観察される。集団移動では、シグナル伝達、接着、力学的相互作用の時空間制御により秩序が形成されるが、これらを協調させる仕組み全体を掴むのは依然として困難である。本シンポジウムでは、数理モデルや三次元イメージング技術による最新の解析結果を共有し、秩序形成のメカニズムを探ることで、今後の研究の方向性を議論する。	
公募企画 E	
1PS-08	12月3日(水) 14:20~16:20
金属トランスポーターの最前線：構造、機能、疾患、そして創薬 New insights into the metal transporters: structure, functions, disease, and drug development オーガナイザー：深田 俊幸（徳島文理大学）、神戸 大朋（京都大学） 金属は、タンパク質の構造維持や補酵素として機能するだけでなく、多様な生体分子の制御を介して生命維持に貢献する。亜鉛や鉄、銅、マンガンなどを輸送する金属トランスポーターの失調が疾患と関連することから、金属トランスポーターは治療標的分子としても注目されている。このシンポジウムでは、構造から機能、そして疾患の機序と創薬に至る金属トランスポーター研究の最新情報について議論する。	
公募企画 E	

1PS-09	12月3日(水) 14:20~16:20
ゲノム高次構造の謎に迫る：分子レベルで読み解く制御メカニズム Mechanistic insight into the three-dimensional organization of chromosomes オーガナイザー：Kristian Jeppsson（東京大学）、坂田 豊典（東京大学） 染色体では三次元的なゲノム構造を介して、遺伝子発現、DNA複製及び修復が緻密に制御されている。本シンポジウムでは最先端のゲノム解析、1分子解析などから得られた最新の知見について紹介し、新たなゲノム高次構造制御の機構やその発生疾患との関わりについて議論する。	
	公募企画 E
1PS-10	12月3日(水) 14:20~16:20
モデル生物 <i>C. elegans</i> を活用した疾患研究 <i>C. elegans</i> in disease research: A versatile model organism オーガナイザー：首藤 剛（熊本大学）、林 悠（東京大学） 本シンポジウムでは、 <i>C. elegans</i> を疾患研究のモデル生物として活用する最前線の研究を紹介する。 <i>C. elegans</i> は遺伝学、薬理学、分子生物学の強力なツールであり、寿命や健康寿命、疾患に関連する表現型解析において重要な知見を提供する。さらに、マウスやヒトを用いた研究との融合により、疾患メカニズムの解明や新規治療法の開発が加速される。本シンポジウムでは、 <i>C. elegans</i> 研究のメリットと今後の展望について議論する。	
	公募企画 J
1PS-11	12月3日(水) 14:20~16:20
系譜と多機能性から解く線維芽細胞分子生物学 Deciphering Fibroblast Molecular Biology: A Lineage and Multipotency Perspective オーガナイザー：仁科 隆史（東邦大学）、倉島 洋介（千葉大学） 構造支持細胞として考えられている線維芽細胞は、細胞の運命決定、組織修復、さらにはがん微小環境の形成や臓器線維症の進展など、多彩な生理的・病理的プロセスにおいて中心的な役割を果たすことが明らかになってきた。この線維芽細胞の多機能性を制御する分子メカニズムの解明は、生体恒常性の理解と新規治療戦略の開発において重要な課題である。本シンポジウムでは、様々な組織常在性の線維芽細胞に加えて、異なる細胞系譜に由来する線維芽細胞の最新の研究成果を共有し、未だ多くの謎に包まれた線維芽細胞の本質的な理解を深めることを目指す。	
	公募企画 E
1PS-12	12月3日(水) 14:20~16:20
細胞外環境の変化が駆動する生理機能と疾患形成のメカニズム Mechanisms of physiological and pathological functions driven by changes in the extracellular environment オーガナイザー：辰川 英樹（名古屋大学）、木岡 紀幸（京都大学） 細胞外環境は単に細胞の足場にとどまらず、細胞機能や挙動を規定し、組織恒常性の維持や修復に重要な役割を果たす。特にECM、分泌因子、物理的環境の変化は、細胞間相互作用やシグナル伝達を通じて組織リモデリングや生理機能の制御、炎症、線維化、腫瘍進展など病態形成にも深く関与する。本シンポジウムでは、細胞外環境の変化がもたらす細胞および組織レベルでの影響に焦点を当て、最新の研究成果を共有し議論を行う。	
	公募企画 J
1PS-13	12月3日(水) 14:20~16:20
RNAのトリセツ ～ RNAエクサプテーションによる分子装置の機能拡張 How to use RNA : Expanding Molecular Machineries Through RNA Exaptation オーガナイザー：中川 真一（北海道大学）、高橋 葉月（理化学研究所） 生物は進化の過程で一見ガラクタのようにも思われるRNAを拾い上げ、タンパク質単独ではなし得ない機能を持った新たな分子装置を作り上げてきた。本シンポジウムでは、大規模スクリーニングによる新規機能性lncRNAの探索や変異マウスを用いた生理機能解析、さらには構造を含めた詳細な分子機能解析を取り上げ、生物がRNAを外適応(exaptation) させることでいかにして革新的な分子装置を作り上げてきたのかについて議論していきたい。	
	公募企画 E

1PS-14 12月3日(水) 14:20~16:20

化学・生物学・工学・医学連携が可能にする「組織血管化」の統合的理解

公募企画

J

An integrated understanding of "tissue vascularization" by the collaboration of chemistry, biology, engineering and medicine

オーガナイザー：水谷 健一（神戸学院大学）、石井-嶋田 弘子（慶應義塾大学）

血管は、生体の恒常性維持や器官形成など、全ての組織を統合するためのネットワークとして機能し、組織再生にも決定的な役割を果たす。本シンポジウムでは、発生学（神経発生・脳オルガノイド）、材料化学（天然物・合成ペプチド）、工学（マイクロ流体デバイス）、病態（脳梗塞など）の観点から組織血管化に関する最新の知見を紹介し、各々の分野の概念を融合することで、血管化が司る多様な生命現象についての幅広い議論を展開する。

1PS-15 12月3日(水) 14:20~16:20

多細胞的に振る舞う単細胞生物の巧妙な戦略—細胞間コミュニケーションと生存のメカニズム

E

Multicellular behavior through intraspecies cell-cell communication in unicellular microorganisms

オーガナイザー：八代田 陽子（理化学研究所）、沖 昌也（福井大学）

Unicellular organisms have been conventionally thought to conduct their life activities independently within each cell. However, there have been many reports of their multicellular behavior due to cell-cell communication mediated by various substances. This symposium will explore collective behavior of the unicellular microorganism yeast, driven by intraspecies cell-cell communication, and present techniques for metabolite and single-cell analysis to uncover the underlying mechanisms. We will also discuss the survival strategies of unicellular organisms.

1PS-16 12月3日(水) 14:20~16:20

メカノバイオロジー劇場：力学的なシグナルの舞台裏

E

The Mechanobiology Theater: Behind the Scenes of Mechanical Signals

オーガナイザー：茂木 文夫（北海道大学）、倉永 英里奈（京都大学）

This symposium delves into the forefront of mechanobiology, examining how cells and tissues sense and respond to mechanical forces. The speakers will present diverse perspectives on topics such as cellular mechanosensing, tissue morphogenesis, and cell movement. Emphasis will be placed on the integration of mechanical signals into cellular processes, including cell fate decisions, polarity, and tissue development. Insights from plants, animals, and cutting-edge live imaging will be discussed, shedding light on the role of mechanical forces across different biological systems.

1PS-17 12月3日(水) 14:20~16:20

進化の限界と可能性

E

Limitation in Evolution and its Evolvability

オーガナイザー：入江 直樹（総合研究大学院大学）、土松 隆志（東京大学）

Evolution does not occur freely in any direction, but it is always biased and constrained. What explains these phenomena? These limitations arise not only from external factors such as natural selection, but also from intrinsic factors, such as the developmental system. In this symposium, we will be over-viewing potential factors and mechanisms behind the limited evolution in various organisms including plants and animals.

Understanding the mechanism of this limited evolution may pave the way to introducing a predictive aspect to modern evolutionary theory.

* This symposium is supported by Research Center for Integrative Evolutionary Science.

1PS-18	12月3日(水) 14:20~16:20
性差を科学する：性差研究の今、そして未来 The Science of Sex Differences-Present and Future オーガナイザー：鈴木 堅太郎（山梨大学）、溝上 顕子（九州大学） 「あなたは、性を意識して研究をしていますか？」器官の大きさや性質、疾患の罹患率など、私たちには様々な性差がある。最近の研究から個々の細胞では、トランスクリプトームやプロテオームレベルで差異があり、これらの集積が表現型としての性差を形成することが明らかになってきた。本シンポジウムではこのような性差形成メカニズムを分子・細胞レベルで紐解く最新の研究を紹介し、性差研究の面白さと必要性、今後の展望について論議する。	
公募企画 J	
2AS-01	12月4日(木) 9:00~11:00
細胞老化研究が導く生命科学の理解 Understanding Life Sciences Through Cellular Senescence Research オーガナイザー：高橋 暁子（がん研究会）、小林 武彦（東京大学） Organismal aging is an unavoidable fate that humanity has faced since ancient times, and it remains a mystery that continues to fascinate many researchers. In recent years, the importance of cellular senescence as a fundamental mechanism of organismal aging has been revealed, and its connection to age-related diseases and functional decline is gradually becoming clearer. In this symposium, we will discuss the latest topics in cellular senescence research with scientists who are striving to understand life sciences through the advancement of research in cellular senescence.	
E	
2AS-02	12月4日(木) 9:00~11:00
細胞運命決定を担うクロマチンのエピコードの解読 Deciphering the epicode of chromatin controlling cell fate decisions オーガナイザー：立花 誠（大阪大学）、中山 潤一（基礎生物学研究所） Chromatin plays a key role in the regulation of gene expression. However, it is unclear how gene expression during development and differentiation is regulated through chromatin structure to determine the cell fate. A higher-order chromatin structure organized by multiple regulatory layers in specific cell types can be an acquired code, or “epicode”. We are aiming to reveal how epicode is established and defines the cell fate.	
E	
2AS-03	12月4日(木) 9:00~11:00
神経変性疾患に対峙する基礎から応用研究の最前線 Multidisciplinary research on neurodegenerative disorders オーガナイザー：齋尾 智英（徳島大学）、奥村 正樹（東北大学） 神経変性疾患の発症要因は複合的である。神経変性疾患に至る核酸やタンパク質の異常が知られるが、未だ根本治療には至っていない。本シンポジウムでは、神経変性疾患に関わる核酸・タンパク質の異常化の基礎研究から本疾患を克服する応用研究の最前線研究を紹介することで、新たな発想を誘発したい。	
公募企画 J	
2AS-04	12月4日(木) 9:00~11:00
転移因子が司るゲノム制御 Genome regulation by transposable elements オーガナイザー：木下 善仁（近畿大学）、中濱 泰祐（大阪大学） 哺乳類の転移因子は、LINE、SINE、LTR レトロトランスポゾンや DNA トランスポゾンなどがある。転移因子は、遺伝的多様性を生み出し、進化的変化を促進する一方で、疾患の原因にもなりうる。転移因子がゲノム内で移動することによって、ゲノムの再編成を行うほか、遺伝子発現の調節やエピジェネティックな変化にも影響を与える。本シンポジウムでは転移因子が司るゲノム制御に関わる生命現象の最新知見を議論したい。	
公募企画 J	

2AS-05	12月4日(木) 9:00~11:00
多細胞組織の休眠研究と技術開発の最前線 Frontiers of multicellular tissue dormancy research and technology development オーガナイザー：高岡 勝吉（徳島大学）、本田 瑞季（広島大学） 哺乳類胚の発生休止、線虫の休眠、潜伏がん、組織幹細胞などに代表される多細胞組織の見かけ上の休止は、様々な生命現象に見られる。しかしながら、従来の研究は、“発生の Diapause” “組織幹細胞の Quiescence” “がんの Dormancy” など、これまで個々の分野で研究されてきた。そこで、本シンポジウムでは、多様な休眠研究者と技術開発者が一堂に会し、包括的な観点から、多細胞組織の休眠の共通性と多様性について議論する。	
	公募企画 J
2AS-06	12月4日(木) 9:00~11:00
複製ストレスとロバストネス：細胞運命を司る巧妙なバランス Replication Stress and Robustness: A Balancing Act in Genomes オーガナイザー：塩谷 文章（東京医科大学）、高橋 達郎（九州大学） DNA 複製は正確に行われる一方、「間違いを許容する」ことで進化を可能にする側面を持つ。本シンポジウムでは、細胞がクロマチン環境の変動に由来する DNA 複製ストレスに適応し、修復機構やオルタナティブな複製システムを制御することで複製の頑健性（ロバストネス）を発揮するメカニズムについて議論する。また、複製頑健性が複製ストレス下で複製完了を優先させ、細胞の生存とゲノム・エピゲノムの健全性の「トレードオフ」に寄与するメカニズムについても考察する。	
	公募企画 J
2AS-07	12月4日(木) 9:00~11:00
RNA 制御の破綻がもたらす疾患メカニズムの最前線 RNA Dysregulation and Disease Mechanisms オーガナイザー：Masahiro Morita (University of Texas Health Science Center)、Lynne Postovit (Queen's University) RNA の翻訳・分解などの転写後制御は、細胞の恒常性維持に不可欠なプロセスであると長らく考えられてきた。しかし、近年の技術革新により、従来の概念が覆され、新たな RNA 制御メカニズムが生命現象や疾患の発症に深く関与していることが明らかになりつつある。特に、特定の mRNA の選択的な翻訳や分解制御、さらには非コード RNA の機能的役割が、がんや神経疾患などの病態形成において重要であることが示されてきた。本シンポジウムでは、転写後制御の分子機構とその生理機能に関する最新の知見を紹介し、その破綻が疾患の発症や進行にどのように寄与するのかを議論する。	
	公募企画 E
2AS-08	12月4日(木) 9:00~11:00
in vitro で表現し、計測して理解する Exploring Biology Through In Vitro Modeling and Measurement オーガナイザー：服部 一輝（東京大学）、新井 健太（未来 ICT 研究所） 生体を理解するためには、その一部を in vitro で切り出して解析する手法が有効だ。その切り出し方や測り方を工夫することで、組織・細胞・分子レベルで多様な現象を詳らかにすることができる。本シンポジウムでは、生体の一部を巧く in vitro で再現・計測する工学・光学的なアプローチの一端に触れ、in vitro の解析手法の今後の展開を議論する。	
	公募企画 J

2AS-09	12月4日(木) 9:00~11:00
新たな手法に基づくオミクスデータが拓く生命科学の最前線 Omics Data Based on New Methods Opens the Frontiers of Life Science 共催：JST ライフサイエンスデータベース統合推進事業「統合化推進プログラム」 オーガナイザー：伊藤 隆司（九州大学）	
新たな実験手法の出現や解析技術の発展により、生命科学研究をとりまく環境は常に大きく変化してきた。その中で公共データベースが果たす役割は大きく、これまでもさまざまな研究ニーズに応えてきた。本シンポジウムでは空間トランスクリプトミクスとロングリードゲノミクスの新たなデータベースを紹介し、これらを活用した研究アプローチが切り拓く生命科学の最前線について議論したい。	
2AS-10	12月4日(木) 9:00~11:00
CAR-T から展望できるデザイナー細胞技術の新展開 Beyond CAR-T: Pioneering New Horizons in Designer Cell Technology オーガナイザー：石井 秀始（大阪大学）、原 知明（大阪大学）	
キメラ抗原受容体（CAR）T細胞療法は、細胞に新たな機能を付与し、さまざまな疾患の治療に応用する技術として、再生医療と遺伝子治療が融合する領域で注目されています。薬価収載された CAR-T 細胞療法は劇的な効果を示す一方で、依然としていくつかの課題が残されています。本シンポジウムでは、CAR-T 療法の成果を基盤とし、細胞の標的化技術や新たなシーズの開発に焦点を当て、これを超える新技術の臨床応用に向けた最新の知見を共有・議論し、分子生物学技術の医療応用を促進します。	
2AS-11	12月4日(木) 9:00~11:00
腸内デザイン学の社会実装化に向けた超学際研究 Transdisciplinary research for social implementation of the Gut Design study オーガナイザー：佐々木 伸雄（群馬大学）、福田 真嗣（慶應義塾大学）	
腸内環境の攪乱は様々な疾患発症の素因となるため、腸内細菌叢を制御する技術（腸内デザイン）の開発が期待されている。高次複雑系を構成している腸内細菌叢を自在に操作するためには学際融合研究が求められる。そこで本シンポジウムでは、腸内細菌叢学を基盤とし、バクテリオファージ生物学やそれらを活用した医療、さらにはシステム生物学や代謝学など、多様な分野で活躍する研究者の技術基盤を共有していただくことで、腸内デザイン学が挑むべき領域について議論したい。	
2AS-12	12月4日(木) 9:00~11:00
超世代的生物学 Transgenerational Biology: DOHaD theory revisited オーガナイザー：根本 崇宏（日本医科大学）、栃谷 史郎（鈴鹿医療科学大学）	
「発生初期の望ましくない環境が将来の疾患感受性に影響する」との DOHaD 学説が広く認知されるようになってきた。さらに、環境による疾患感受性の変化は子孫にまで影響を残すことが明らかとなりつつあるが、環境による疾患感受性の変化と世代間伝搬のメカニズムには不明な点が多い。そこで、「環境により疾患感受性の変化が生じる分子機序とその世代間伝搬」をテーマに、若手・中堅の研究者と議論する。	
2AS-13	12月4日(木) 9:00~11:00
GTP 生物学の進歩 Advances in GTP biology オーガナイザー：竹内 恒（東京大学）、佐々木 敦朗（University of Cincinnati College of Medicine）	
GTP は特定の細胞機能を駆動するエネルギー物質との理解を超え、セカンドメッセンジャーのように細胞内代謝とシグナル伝達を積極的に制御することがわかってきた。細胞内では現パラダイムでは説明できない濃度勾配を形成し時空間的制御を受ける。高等動物では GTP は細胞間さらには生体レベルでも外的環境に応じた代謝制御を担い、がんやウイルスの増殖にも影響する。そのため GTP 代謝は重要な創薬標的であり、その進化は生命の可能性を広げた。本シンポジウムでは GTP 生物学の進展を技術的進歩とともに議論する。	

2AS-14 12月4日(木) 9:00~11:00

光生物学：可視光線と紫外線への生物学的応答

公募企画

E

Photobiology: Biological Responses to Visible Light and UV Radiation

オーガナイザー：川澄 正興 (University of Washington)、Yu-Ying He (University of Chicago)

光生物学は、光と生命とのかかわりを探求する学問である。異なる波長の光が及ぼす生物学的影響は多岐にわたるが、紫外線による遺伝子変異が皮膚がんにつながることはよく知られている。近年の技術進歩により、可視光線と紫外線照射に対する細胞の様々な応答（DNA 損傷と修復、酸化ストレス、遺伝子発現、光受容、シグナル伝達、炎症、免疫、細胞周期への影響）が、分子レベルで解明されてきた。本シンポジウムでは、光生物学の最先端の研究を紹介する。

2AS-15 12月4日(木) 9:00~11:00

個体発生・疾患におけるエンハンサー研究の最前線

E

Enhancer function in development and disease

オーガナイザー：斉藤 典子 (がん研究会がん研究所)、深谷 雄志 (東京大学)

Enhancers are non-coding regulatory DNA elements that control the temporal and spatial specificity of gene transcription in development. Recent whole genome studies suggest that enhancer polymorphism is highly associated with phenotypic variations and disease risks among populations. Therefore, addressing the question of how enhancers function in development and disease has become increasingly important. In this symposium, we will discuss emerging models of transcriptional regulation by enhancers.

2AS-16 12月4日(木) 9:00~11:00

細胞分化の観点から探る神経系の進化

E

Evo-devo of the nervous system from a cellular perspective

オーガナイザー：平田 たつみ (国立遺伝学研究所)、Yan Zhu (国立遺伝学研究所)

Researchers have long studied nervous system cells, initially focusing on morphology and function, and later on molecular characteristics. Recent advancement in genomics, especially high-throughput single-cell genomics, open the door to addressing fundamental questions on the development and evolution of the nervous system, such as the origin of the first neuron, and the conservation and the diversification of cell types. At this symposium, experts will share their findings on these topics, combining insights from developmental and evolutionary biology, studying non-model organisms, and using single-cell technologies and comparative genomics with new computational methods.

2AS-17 12月4日(木) 9:00~11:00

超階層生物学：新しいモデル生物を用いた新展開

E

Trans-Scale Biology: Exploring New Frontiers with Novel Model Organisms

オーガナイザー：重信 秀治 (基礎生物学研究所)、佐竹 暁子 (九州大学)

Recent advances, such as genome editing, sequencing, omics, and imaging, have enabled biologists to explore life science at multiple scales—from molecules and cells to organs, individuals, and ecosystems— through an approach termed as “Trans-Scale Biology.” This approach now extends to the use of non-traditional model organisms. This symposium aims to promote the exchange of ideas and discoveries across species and research disciplines, highlighting the potential of Trans-Scale Biology.

2AS-18	12月4日(木) 9:00~11:00
動物が示す多様な生得的・社会性行動の分子神経基盤 Molecular neurobiology of innate social behaviors: environments talk with genes	
オーガナイザー：佐藤 耕世（情報通信研究機構）、苅郷 友美（ジョンスホプキンス大学）	
動物が示す性行動や攻撃行動、養育行動などの社会性行動は、生得的でありながら様々な内的・外的要因に応じ柔軟に変化し、個体の環境適応や世代交代に重要な役割を果たしている。本シンポジウムでは、環境や経験がどのように脳に作用し、行動や心理特性の変容をもたらすのかについて、様々な動物種を用いた最新の研究を紹介し、その分子・神経生物学的基盤の理解の深化を図る。	
2PS-01	12月4日(木) 14:20~16:20
幹細胞合成生物学 Synthetic Stem Cell Biology	
オーガナイザー：谷内江 望（The University of British Columbia）、Alev Cantas（京都大学）	
合成幹細胞生物学は、幹細胞生物学とバイオエンジニアリングにおけるアプローチを統合することで、動物体内における細胞や臓器の動的かつ多様なふるまいを捉えようとする、新しいエキサイティングな研究分野である。幹細胞由来の臓器モデルや発生モデルおよびそのエンジニアリングは、生物学における新たなリソースとなり、これらのモデルが多様な大規模データの計測を可能にしたことは、ゲノムプログラムを解釈するAIベースの生物学が近年登場したことでタイミングが合っている。本シンポジウムでは、国内外の第一線で活躍する科学者たちが、最新の研究成果を共有する。	
2PS-02	12月4日(木) 14:20~16:20
真核生物における翻訳が制御する生命現象・疾患 Eukaryotic translation regulates various biological processes and human diseases	
オーガナイザー：藤原 俊伸（近畿大学）、山下 暁朗（琉球大学）	
高等真核生物において mRNA 翻訳制御は様々な生命現象において重要な役割を果たしている。翻訳に関わる分子の遺伝子変異や異常がヒト遺伝性疾患や神経変性疾患などの原因となることも明らかになりつつある。本シンポジウムでは、ストレス応答やリボソーム衝突、tRNA 修飾などによる翻訳制御を、リボソーム高解像度 Cryo-EM 構造解析、トランスレートーム解析などの方法論を用いて解明した最新の研究成果を紹介する。	
2PS-03	12月4日(木) 14:20~16:20
染色体の多様性がもたらすインパクト Exploring Chromosomal Diversity: Impact and Significance	
オーガナイザー：趙 民知（がん研究会 がん研究所）、松本 知訓（大阪大学）	
細胞分裂の制御異常は、染色体の不分離や転座、欠損といった多様な構造的および数적変化を引き起こす。こうした染色体の多様性は、遺伝子発現や細胞周期を変動させ、細胞の新たな形質の獲得を促進し、細胞の多様化や老化、がん化に寄与することが知られている。本シンポジウムでは、細胞レベルから組織・個体レベルに至るまで、染色体の多様性が及ぼす影響を包括的に理解し、最新の研究成果を統合することで、その生物学的意義を多角的に議論したい。	
2PS-04	12月4日(木) 14:20~16:20
RNA 治療薬の可能性を拓く：基礎研究から臨床応用への展望 Unlocking the Potential of RNA Therapeutics: Perspectives from Bench to Bedside	
オーガナイザー：谷 英典（横浜薬科大学）、秋光 信佳（東京大学）	
RNA 治療薬は、従来の医薬品では治療困難だった疾患に対する革新的なアプローチとして注目を集めている。本シンポジウムでは、RNA 生物学の最先端研究から、実用化に向けた課題、そして臨床応用の最新成果まで、第一線の研究者が一堂に会し議論する。RNA 医薬の設計・デリバリー技術の進展、新規標的疾患の開拓など、この急速に発展する分野の全貌に迫り、RNA 医薬が拓く未来の医療を、共に探求する。	

2PS-05	12月4日(木) 14:20~16:20
ライフステージにおける組織恒常性の変化 Changes in tissue homeostasis across the lifespan オーガナイザー：一條 遼（京都大学）、佐田 亜衣子（九州大学） 組織の恒常性は生涯にわたってさまざまに変化する。我々の組織はその変化に柔軟に対応するが、組織恒常性の破綻によりがん、線維化、老化が誘導される。本シンポジウムではライフステージにおける変化に対し、組織、細胞がいかに応答するかについて、さまざまな視点から議論したい。	
	公募企画 J
2PS-06	12月4日(木) 14:20~16:20
ストレスや薬物依存行動を司るエピジェネティック遺伝子発現メカニズム Epigenetic and transcriptional mechanisms of Stress and Substance Use-induced behavioral adaptations オーガナイザー：谷口 誠（Medical University of South Carolina）、内田 周作（名古屋市立大学） ストレスやコカイン、ヘロインなどの薬物使用の経験は、神経可塑性を引き起こし、気分障害や薬物依存症に関連する病的な行動変化を誘発する。近年の研究では、これらの病的行動変化における遺伝子発現やそのエピジェネティック遺伝子発現調節の役割が注目されている。本シンポジウムでは、細胞種および回路特異的な遺伝子発現の変化、クロマチン構造、エピジェネティック調節因子、さらに長鎖ノンコーディング RNA を介した機構について、薬物依存症やストレスによる気分障害における役割を議論します。	
	公募企画 E
2PS-07	12月4日(木) 14:20~16:20
サンゴ礁保全へ：環境遺伝子解析が開く環境動態研究の新境地 Toward coral reef conservation: Environmental gene analysis opens new frontiers in environmental dynamics research オーガナイザー：米澤 遼（東京大学）、安田 仁奈（東京大学） サンゴ礁生態系はサンゴと多彩な微生物の共生で維持されるが、分子レベルの相互作用や未解明な点が多い。本シンポジウムでは、環境エクソソーム解析や環境 RNA、環境 RNA 分子ロボットなどの新手法を用い、海洋生物由来の RNA-seq を可視化し、生物間相互作用の解明とともに非侵襲的なストレス検出手法を開発する。得られた知見をもとにサンゴ礁保全への予測と対策を議論する。	
	公募企画 J
2PS-08	12月4日(木) 14:20~16:20
DNA 複製とゲノム・染色体構造のダイナミクス Dynamic regulation of DNA replication and genome/chromosome organization オーガナイザー：平谷 伊智朗（理化学研究所）、鐘巻 将人（国立遺伝学研究所） DNA の二重らせん構造が即座に半保存的 DNA 複製を予見したように、DNA 複製とゲノム・染色体構造は切っても切れない関係にある。近年、この関係性が、メガベース単位のクロマチンドメインレベルに至るまで成り立っており、多様な染色体機能と関連していることが明らかになってきた。本シンポジウムでは、様々な角度やスケールでこの課題に取り組んでいる気鋭の演者をお招きし、研究の現在地を俯瞰する。	
	公募企画 E
2PS-09	12月4日(木) 14:20~16:20
アカデミア創薬会議 2025 Academic Drug Development Conference 2025 オーガナイザー：池田 幸樹（京都大学）、井上 喜来々（大阪公立大学） アカデミア創薬が浸透してきた昨今、アカデミア初のシーズが数多く発信されている。しかし、シーズ件数に対して 1% 程度の共同研究しか生まれていないのも事実である。このギャップは両者の創薬に対する意識によるもの大きい。この溝を埋めるために注目されているのが、ニーズ = 患者の声、である。ニーズに寄り添い、お互いをリスペクトし手を取り合って開発を進める体制を構築しなくては困難な病気に打ち勝つことは難しい。本会議では医療ニーズに立脚した医薬品や技術の開発などに注目して議論を深め、アカデミアと企業が共創できる創薬の道を探る。	
	公募企画 J

2PS-10	12月4日(木) 14:20~16:20
代謝レジリエンスの老化変容とその修復機構 Aberrant metabolic resilience as aging mechanisms	公募企画 J
オーガナイザー：近藤 祥司（京都大学）、田久保 圭誉（東北大学）	
高齢やフレイルでは「レジリエンス（回復力・予備能）」が低下し、日常生活の段階的な衰えや複数疾患罹患の原因となる。老化個体で蓄積する老化細胞由来の炎症因子放出 SASP はレジリエンス低下を誘導する。レジリエンスの修復を目的として、老化治療が提唱される。代謝レジリエンスもその一つであり、その最新の知見を発表・議論する。	
2PS-11	12月4日(木) 14:20~16:20
構造生命科学の新展開—ダイナミクスから in situ まで— Advances in Structural Life Science: From Dynamics to In Situ	公募企画 J
オーガナイザー：西増 弘志（東京大学）、加藤 英明（東京大学）	
クライオ電子顕微鏡（cryo-EM）における様々な技術革新により、我々は様々な生命現象を原子レベルから理解するのみならず自然界に存在しないタンパク質のデザインまでも可能になりつつある。本ワークショップでは cryo-EM を用いたタンパク質や核酸のダイナミクス解析や in situ 解析、そうした技術を活用した新規タンパク質の開発など、最新の研究成果を中心に発表・議論を行いたい。	
2PS-12	12月4日(木) 14:20~16:20
代謝が解き明かす体質の科学 The Science of Constitution Revealed by Metabolism	公募企画 J
オーガナイザー：本村 泰隆（東京理科大学）、柳川 享世（東海大学）	
アレルギーの発症しやすさや太りやすさといった「体質」は、曖昧な概念であり、その本質は依然として十分に解明されていない。しかしながら、体質は疾患の根幹に関与し、発症要因の一つと考えられることから、その解明は喫緊の課題となっている。近年、代謝の観点から体質の実態が徐々に明らかになりつつある。本シンポジウムでは、各分野の専門家を招き、最新の研究成果を紹介するとともに、多角的な視点から体質の理解を深める。	
2PS-13	12月4日(木) 14:20~16:20
ペルオキシソーム研究の最前線～70年の歩みとこれからの展開～ The frontier of peroxisome research ~70 years of progress and future developments ~	公募企画 J
オーガナイザー：山下 俊一（九州大学）、杉浦 歩（順天堂大学）	
ペルオキシソームは真核生物のほぼ全ての細胞に存在するオルガネラであり、極長鎖脂肪酸の β 酸化やエーテルリン脂質の生合成など重要な代謝を担っている。1954年に初めてペルオキシソーム構造が発見されて以来、その生合成、代謝、分解機構の分子基盤が次々と報告され、生体内における重要性が明らかにされてきた。本シンポジウムではペルオキシソーム研究を世界的に牽引する研究者が一堂に会し、最新の知見を紹介するとともに、今後の更なる展開を議論する。	
2PS-14	12月4日(木) 14:20~16:20
多細胞システムのための場の設計・制御 Design and control of biomimetic system for multicellular organization	公募企画 E
共催：学術変革 A マルチモダル ECM	
オーガナイザー：萩原 将也（理化学研究所）、鳴瀧 彩絵（東京科学大学）	
細胞は周囲環境から様々な力学・化学的シグナルの空間情報を受け取り、多細胞システムを構築している。このシステムのメカニズム解明や再構築を行う上で、人為的に場を操作する技術は非常に有用である。一方、これら技術を有効的に多細胞システムに活用するためには、システムを理解した上での場の設計・制御が必要不可欠となる。本シンポジウムでは、材料やデバイスなど場の操作技術を分子生物の研究者と議論することで、新たな実験系を模索することを目指す。	

2PS-15	12月4日(木) 14:20~16:20
--------	----------------------

「次のパンデミック」に備えるための実験ウイルス学の挑戦
Challenges of Experimental Virology to Prepare for the “Next Pandemic”
協賛：国際先導研究

公募企画

J

オーガナイザー：佐藤 佳（東京大学）、福原 崇介（九州大学）

新型コロナウイルスの世界的大流行（パンデミック）から、5年の月日が経った。新型コロナパンデミックは、ウイルス感染症の脅威を白日のもとに晒した。しかし、WHO や CDC が勧告するように、COVID-19 は人類史における最後のパンデミックではない。「次のパンデミック」という新たな感染症リスクに備えるためには、分子生物学や細胞生物学を駆使した「実験ウイルス学」は必須である。本シンポジウムでは、「次のパンデミック」に備えるために必要な、分子生物学に基づいたウイルス研究について議論したい。

2PS-16	12月4日(木) 14:20~16:20
--------	----------------------

不均一性制御の定量生物学 2025
Quantitative Biology of Heterogeneity Regulation 2025

公募企画

J

オーガナイザー：中山 淳（大阪国際がんセンター）、宮田 憲一（がん研究会 がん研究所）

近年のオミクス解析や1細胞解析の飛躍的な発展により、組織発生・加齢・がんなど、様々な細胞・遺伝子発現の時空間的な不均一性が明らかになりつつある。本シンポジウムでは、生体内のあらゆる不均一性は単なるばらつきではなく、生命が多様性を維持するための基盤と捉え、これを「定量的」に評価することで、新たな生物学の地平を切り開くことを目指す。不均一性の定量解析、1細胞解析、ライブイメージング、など、幅広い知見から生体内不均一性の制御と動態について議論する。

2PS-17	12月4日(木) 14:20~16:20
--------	----------------------

変遷する細胞外小胞研究とその未来
Perspective of diverse EV research
協賛：日本細胞外小胞学会

公募企画

J

オーガナイザー：横井 暁（名古屋大学）、山本 雄介（国立がん研究センター研究所）

あらゆる生命現象の中でエクソソームを中心とする細胞外小胞は重要な役割を果たすことが明らかになっており、その驚くべき可能性は今現在もアップデートされ続けている。細胞外小胞・エクソソームを取り巻くマーケットが世界的に拡大の一途をたどる今、その基礎的理解を緻密に進めることの重要性がより高まっている。本セッションでは、多様な学術領域における最先端の知見を集結することで、細胞外小胞研究の魅力と未来を議論する。

2PS-18	12月4日(木) 14:20~16:20
--------	----------------------

糖尿病の分子生物学：インスリン分泌と抵抗性のメカニズム
Diabetes: Novel insights into mechanisms of impaired insulin secretion and insulin resistance

公募企画

E

オーガナイザー：平池 勇雄（東京大学）、宮地 康高（九州大学）

糖尿病は膵β細胞からのインスリン分泌の低下と主に肥満が惹起する骨格筋、肝臓、脂肪組織などインスリン標的臓器におけるインスリン抵抗性の双方によって発症する。本シンポジウムでは国内外から気鋭の若手研究者が集まり、分子生物学的なメカニズム解析と大規模データの網羅的解析や機械学習の活用を両輪として明らかになりつつある糖尿病の新たな分子病態と創薬標的、先制医療の実現へ向けた展望について議論する。

3AS-01	12月5日(金) 9:00~11:00
光・化学操作により捉える細胞増殖メカニズム Illuminating Cell Proliferation Mechanisms with Light or Chemical Manipulation オーガナイザー：川島 茂裕（東京大学）、知念 拓実（東京大学）	
細胞周期の進行過程では、染色体や微小管、細胞膜の機能や構造、さらにはタンパク質や核酸の修飾状態が迅速かつ動的に変化します。これらのプロセスを人為的に操作することは、細胞の増殖メカニズムの理解を深めるだけでなく、新たな創薬の可能性を開拓する上でも重要です。本セッションでは、「光」や「化学（化合物）」を活用した新しい操作手法を用いて、細胞増殖プロセスを解明する最先端の研究に焦点を当てます。参加者同士で当該分野における革新的なアプローチを共有し、分野を超えた協力を促進するための新たなプラットフォーム形成を目指します。	
3AS-02	12月5日(金) 9:00~11:00
遺伝子発現・非遺伝子発現を司る non-canonical 転写制御 Non-canonical transcription regulation of gene expression and non-gene expression オーガナイザー：高橋 秀尚（横浜市立大学）、二村 圭祐（群馬大学）	
遺伝子発現制御においては転写はセントラルドグマの最初のステップとして非常に重要な役割を果たしている。ところが、最近の研究によって、転写は遺伝子発現に加えて、遺伝子発現以外の細胞機能も司ることが明らかとなってきた。本シンポジウムでは、このような non canonical な転写機構を介した新たな細胞機能制御について最新の知見を交えて議論したい。	
3AS-03	12月5日(金) 9:00~11:00
攪乱 RNA—生体を負に制御する RNA の生理とその適応機構 Perturbing RNAs: Physiology and co-option mechanisms of RNAs disrupting organismal homeostasis オーガナイザー：河原 行郎（大阪大学）、小林（石原）美栄（慶應義塾大学）	
ウイルス由来の外來性 RNA、自己由来にも関わらず免疫を惹起する内因性 RNA など、RNA そのものが生体の恒常性を負に制御する例が明らかになってきた。ではそれら RNA は具体的にどのように生体に悪影響を及ぼすのか？また、生体はそれらをどう認識し対抗し、時に生存に有利になるよう利用しているのか？本シンポジウムでは生命システムを「攪乱する」RNA の知見を情報科学・進化学・免疫学・神経科学など、分野横断的にまとめ、その生理的影響と適応機構について議論する。	
3AS-04	12月5日(金) 9:00~11:00
オートファジーから広がる膜界面生物学 Autophagy expanded: decoding membrane interface biology 共催：学術変革領域研究 (A)「オートファジーから広がる膜界面生物学」 オーガナイザー：野田 展生（北海道大学）、池ノ内 順一（九州大学）	
細胞は水以外では主にタンパク質と脂質でできている。タンパク質集団の機能は相分離研究で注目されてきたが、脂質分子集団との連携は見過ごされてきた。オートファジーでは、タンパク質集団が膜界面で脂質集団とダイナミックに相互作用し、複雑な膜動態を生む。本シンポジウムでは、この“膜界面分子協奏”がオートファジーや一細胞に収まらない多様な生命現象に果たす役割について、最新の知見を紹介するとともに、その普遍的役割を議論したい。	
3AS-05	12月5日(金) 9:00~11:00
栄養・代謝から紐解く老化、加齢性疾患 Nutrition and metabolism in aging and age-related diseases オーガナイザー：近藤 嘉高（東京都健康長寿医療センター）、藤田 泰典（東京都健康長寿医療センター）	
健康寿命の延伸における食事の重要性は、これまでに広く認識されてきた。近年の解析技術の進歩により、老化や加齢性疾患に関連する栄養素や代謝物質の新たな役割、意義が明らかにされつつある。本シンポジウムでは、食事の三大栄養素バランス、脂肪酸、アミノ酸、代謝変容、老化促進分子などの観点から、健康増進および老化や加齢性疾患の分子機序解明にアプローチする最新の研究を紹介したい。	

3AS-06 12月5日(金) 9:00~11:00

バクテリアとオルガネラでの核様体形成と代謝との共役機構の最前線

公募企画

E

Coordination between nucleoid structure and metabolism in bacteria and organelles

オーガナイザー：加生 和寿（九州大学）、大島 拓（富山県立大学）

ミトコンドリアや葉緑体は細胞の糖代謝やエネルギー産生に重要なオルガネラである。オルガネラ独自の環状ゲノムは原核生物と同様の非クロマチン型の核様体構造を形成する。近年、この核様体構造が原核生物、オルガネラいずれにおいても DNA 複製、機能発現、恒常性維持などと密接に関連することが分かりつつある。本シンポジウムでは幅広い生物種の核様体研究を結集し、新たな共通原理の解明に挑む。

3AS-07 12月5日(金) 9:00~11:00

染色体の構造と機能を支える超分子複合体

公募企画

E

Chromosome structure and function driven by supramolecular complexes

協賛：学術変革領域研究 (A), クラスター細胞学

オーガナイザー：村山 泰斗（国立遺伝学研究所）、高橋 元子（がん研究会 がん研究所）

長大なゲノム DNA は、様々なタンパク質複合体によって複雑な立体構造を形成し、転写、複製、染色体分配など多様な生命活動が制御される。個々の因子の構造や生理活性が深く研究されてきた一方、これらのタンパク質複合体は、より高次の相互作用を介して超分子複合体を形成することで生理的な機能を発揮することが明らかになってきた。本シンポジウムでは、転写から染色体分配までの幅広い分野で活躍する国内外の研究者を招き、超分子複合体が駆動する染色体機能の発現と制御機構について議論する。

3AS-08 12月5日(金) 9:00~11:00

超高齢社会の QOL 向上のための地球環境因子と全身と末梢を繋ぐ多細胞生命システム適応基盤

公募企画

J

Multicellular Life System Adaptation Platform Linking Global Environmental Factors and the Whole Body and Peripheral Organs for Improving Quality of Life in a Super-Aged Society

オーガナイザー：跡見 順子（帝京大学先端総合研究機構）、清水 美穂（帝京大学先端総合研究機構）

人間も、地球に創発し構成する環境因子（重力・光・酸素等）に対してホメオスタシスを維持するべく適応進化してきた生命体（自然物）であるが、唯一納得する知識で随意的に行動を変えられることができる存在である。細胞一身体システムが機能しているホメオスタシス範囲を逸脱する刺激（ストレス）は、炎症を誘導する。本シンポジウムでは、ロコモ・メタボ・癌等の疾病への予防対策として、トータルに免疫系やストレス応答系を適切に作動させ、健康度を向上させる方向性を環境因子を考慮して時空間統合的に探る。

3AS-09 12月5日(金) 9:00~11:00

神経伝達物質受容体の多層的理解と機能制御：原子から個体へ

公募企画

J

Multi-level understanding and functional regulation of neurotransmitter receptors: From atoms to living organisms

オーガナイザー：清中 茂樹（名古屋大学）、山下 敦子（大阪大学）

クライオ電顕や AI ベースの構造予測の進展により、神経伝達物質受容体分子の原子レベルでの理解は飛躍的に深まった。また、それらの静的な構造情報を動的に理解するための高速 AFM など、ダイナミクス解析手法も大きく進展した。一方で、これら原子レベルの理解に基づき、受容体の機能制御手法、特にケミカルバイオロジーの手法も急速に発展した。本シンポジウムでは受容体の原子レベルの理解が個体レベルの機能制御に結びつく現状と展望を議論する。

3AS-10	12月5日(金) 9:00~11:00
ほねほねロック ～さまざまな動物が奏でる多様な骨格形成～ Hone-Hone rock: The diverse skeletogenesis orchestrated by various animals オーガナイザー：熱田 勇士（九州大学）、黒田 純平（大阪大学） 偏に「骨」といっても、その形状は動物種間で実に多様である。そして、この多様性こそ、動物のかたちや行動様式のバリエーションを生み出す基盤となる。しかしながら、骨格系がどのように形成され、多様性が生み出されるのかについては未だ不明な点が多い。本シンポジウムでは、哺乳類から無脊椎動物に至るまで、さまざまな生物が奏でる“骨格形成のメロディー”に耳を傾け、多彩な骨格系の成り立ちについて、その理解を深めることを目指す。	
	公募企画 J
3AS-11	12月5日(金) 9:00~11:00
多能性幹細胞を用いた研究の最前線 Frontiers in pluripotent stem cell research and applications オーガナイザー：宮岡 佑一郎（東京都医学総合研究所）、林 洋平（京都大学 iPS 細胞研究財団） ヒト多能性幹細胞は、in vivo 実験が不可能なヒトの生命現象に対して、分子・細胞・発生生物学的研究を行うためのプラットフォームとなり、またその応用としての再生医療や創薬に貢献している。本シンポジウムは、ヒト多能性幹細胞を用いて、リプログラミング、ゲノム編集、パイオニア因子、トランスクリプトーム、プロテオーム、病態モデル、治療法開発といった分野の最前線の研究を紹介するとともに、多能性幹細胞研究のさらなる発展を考える契機とする。	
	公募企画 J
3AS-12	12月5日(金) 9:00~11:00
小胞体の機能を支える多彩な分子メカニズム Diverse molecular mechanisms supporting functions of the endoplasmic reticulum オーガナイザー：蜷川 暁（神戸大学）、堤 智香（京都産業大学） 全タンパク質の約 1/3 を生合成する小胞体は、作られたばかりの「未成熟のタンパク質」から、壊すべき「不要なタンパク質」までを扱う。そのため、極めて精密で多彩な分子機構を有しており、世界の研究者が現在も様々なアプローチを試み、新たな発見がなされ続けている。本セッションでは海外演者を含む最先端で研究を行う若手研究者を招集し、小胞体の機能を支える分子機構について多角的な視点から、最新の知見を交えて深く議論する場としたい。	
	公募企画 J
3AS-13	12月5日(金) 9:00~11:00
ゲノムエポックが引き起こした大進化を探る Genomic epoch exploration causing macroevolution オーガナイザー：遠藤 俊徳（北海道大学）、峯田 克彦（早稲田大学・静岡理科大学） 生物の大進化はどのようにして起きるのだろうか。このダーウィン以来の大問題は、多くの生物ゲノムが解読された今も未解明のまま取り残されている。ゲノム倍加が見られる生物でもみかけがほとんど変わらない例は多い。むしろ、小規模であっても重大な質的変化こそが、生物の大進化を生み出したのだろう。例えば眼の誕生に関わった遺伝子は多細胞生物の劇的な多様化を導いたとされる。こうした質的変化、ゲノムエポックについて考えたい。	
	公募企画 J
3AS-14	12月5日(金) 9:00~11:00
メタボローム研究の最前線 The Frontiers of Metabolome Research オーガナイザー：平山 明由（慶應義塾大学）、和泉 自泰（九州大学） “メタボローム”という言葉が広く知られるようになってから 20 年以上の月日が経過した。その間に、質量分析装置の高感度化をはじめ、測定技術の多様化や高速化など、分析化学を中心とした技術革新が継続的に行われてきた。本セッションでは、最新のメタボローム解析技術と分子生物学領域における応用例を中心に紹介し、今後のメタボローム研究の目指す道について議論する。	
	公募企画 J

3AS-15	12月5日(金) 9:00~11:00
転移因子コードが誘導する核内3次元構造形成メカニズムの理解 Higher order genome regulation and function mediated by the transposable element code オーガナイザー：一柳 健司（名古屋大学）、藤 泰子（東京科学大学） SINE や LINE などの転移因子はゲノムの多くの部分を占める。SINE と LINE はゲノム内に不均一に、しかも相互排他的に分布する。近年、SINE が CTCF など核内3次元構造を制御する因子をリクルートすることや特定のヒストン修飾を持つヌクレオソームを持つこと、また、LINE RNA が核内での液-液相分離を介してヘテロクロマチンを構築することが示された。本シンポジウムでは、転移因子が結合タンパク質と協奏することで核内3次元構造を制御するという分子コード（転移因子コード：TEC）の概念を提唱し、転移因子や核内3次元構造に関連する幅広い最新の研究から議論したい。	
公募企画	J
3AS-16	12月5日(金) 9:00~11:00
次世代形質を左右する母胎連関ネットワーク Bidirectional molecular network in fetal-maternal crosstalk regulating fetal development オーガナイザー：三原田 賢一（熊本大学）、豊島 文子（東京科学大学） 哺乳類の発生は、胎児自律的な機構に加え、母体-胎児間の分子的なやり取りに大きく依存している。近年、母胎連関の実態が遺伝子、分子、細胞レベルで解析され、発生の早期における母体環境がエピゲノム制御を通じて出生後の子の健康状態にも深く関わっていることが明らかとなりつつある。本シンポジウムでは、母胎連関に関わる双方向ネットワークの分子生物学的メカニズムについて議論する。	
公募企画	J
3AS-17	12月5日(金) 9:00~11:00
核酸と感染症の病態制御 Nucleic Acids and Pathogenesis of Infectious Diseases オーガナイザー：高橋 朋子（埼玉大学）、南宮 湖（慶應義塾大学） 人類はパンデミックをはじめとして感染症の脅威にさらされており、その制御は喫緊の課題である。近年の研究により核酸を用いた新たな診断技術や治療法が急速に発展しており、感染症分野への応用が強く期待される。核酸は病原体由来の遺伝情報としての役割にとどまらず、宿主の免疫応答を制御する因子としても重要な機能を担う。本シンポジウムでは、感染症における核酸の役割に焦点をあて、核酸と感染症研究の新たな可能性を議論する場としたい。	
公募企画	J
3AS-18	12月5日(金) 9:00~11:00
植物細胞可塑性：数瞬の応答から悠久の進化にまで通底する適応機構 Plant cell plasticity from ephemeral to millennial timescales オーガナイザー：福島 健児（国立遺伝学研究所）、松永 幸大（東京大学） 植物は動物とは異なり、過酷な環境からの逃避行動をとらないため、直面するストレスには各細胞が自らの性質を変化させながら対応しなければならない。この可塑的な性質は、応答・発生・進化といった多角的な側面で、植物という生き方を特徴づける。本シンポジウムでは、この仕組みを分子レベルで解明する研究者が集い、「植物細胞可塑性」について議論を深める。	
公募企画	J
3PS-01	12月5日(金) 14:20~16:20
新規モデル生物とバイオ DX BioDX for new model organisms 共催：JST COI-NEXT バイオ DX 産学共創拠点 オーガナイザー：中前 和恭（広島大学）、坊農 秀雅（広島大学） 非モデル生物とも呼ばれる新規モデル生物のゲノム解析は、生命科学における Digital Transformation（バイオ DX）の普及、特にビッグデータの利活用によって急速に進みつつある。一方で、バイオ DX のノウハウは各分野で十分に共有されているとはいえない。本シンポジウムでは、新規モデル生物解析を行う研究者同士が情報交換し、既存のモデル生物にとどまらない多彩な分子生物学の発展を目指す。	
公募企画	J

3PS-02	12月5日(金) 14:20~16:20
オープンライフサイエンスの新時代 New Era of Open Life Science	公募企画 J

オーガナイザー：大浪 修一（理化学研究所）、粕川 雄也（理化学研究所）

オープンライフサイエンスは、研究データや技術、知識の共有を促進し、研究の透明性を向上させるとともに、科学的発見や社会課題の解決を加速します。近年、生命科学データの大規模化・多様化、知識の精緻化、AIや情報通信技術の進展により、オープンライフサイエンスは新たな時代を迎えています。本シンポジウムでは、日本のオープンライフサイエンスを牽引する各機関の最新戦略を共有し、科学的・社会的成果の創出に向けた戦略を成功例を示しながら議論します。

3PS-03	12月5日(金) 14:20~16:20
膜・非膜オルガネラとコンタクト：動態と機能の新視点 Membrane and Membraneless Organelles and Their Contacts: New Perspectives on Dynamics and Function	公募企画 J

共催：生命創成探究センター

オーガナイザー：椎名 伸之（自然科学研究機構）、中津 史（新潟大学）

近年、液-液相分離による非膜オルガネラの形成や、異種オルガネラ間のコンタクト構造が細胞機能の制御に果たす重要な役割が明らかになりつつある。これらの構造は環境変化に応じて動的に変化し、オルガネラや細胞機能を精緻に調整する仕組みを備えている。本シンポジウムでは、これらの構造の動態や分子メカニズムに関する最前線の研究成果を紹介し、それらが細胞機能にどのように寄与するのかを議論する。さらに、先端技術を駆使した研究が、新たな細胞機能制御メカニズムの解明に与えるインパクトについても展望する。

3PS-04	12月5日(金) 14:20~16:20
遺伝子発現と染色体制御の多様性 Gene Expression and Chromosomal Regulation Diversity across Model Organisms, and in Tissue- and Developmental Stage-Specific Contexts	公募企画 J

オーガナイザー：澁谷 大輝（理化学研究所）、深谷 雄志（東京大学）

生命現象の本質を理解するためには、特定の生物種や均一な細胞集団を用いたシンプルなモデル研究だけでは不十分である。動物から植物に至る多様なモデル生物（さらには非モデル生物）を解析し、同一のモデル生物においても異なる発生段階や臓器種における比較を行うことによって、生物種・発生段階・臓器種に特異的な制御や、あるいは逆に機能的収斂や強固に保存された制御が見えてくる。本シンポジウムでは、遺伝子発現や染色体制御の観点から、動物と植物、体細胞と生殖細胞など、さまざまなモデル研究を紹介し、今後の生物学研究の展望について議論を深める。

3PS-05	12月5日(金) 14:20~16:20
全能性細胞における細胞運命制御機構 Mechanisms of Cell Fate Control in Totipotent Cells	公募企画 J

オーガナイザー：石津 大嗣（慶應義塾大学）、原田 哲仁（九州大学）

受精卵が配偶子の受精を通じて全能性を確立し、その後の運命制御によって多様な発生過程へ進む仕組みには多くの未解明な点が残されている。その鍵を握るのは、全能性や多能性の獲得に関わる遺伝子機能とエピジェネティクス制御である。本シンポジウムでは、これら分子基盤の最新知見を共有し、さらに合成生物学的アプローチによる試験管内発生再現など、新技術がもたらす全能性運命制御の新展開を紹介する。

3PS-06	12月5日(金) 14:20~16:20
腎臓と血圧の多様な働きと病態を最先端の研究から理解する Understanding the Diverse Functions and Pathophysiology of the Kidney and Blood Pressure Through Cutting-Edge Research 共催：日本腎臓学会 オーガナイザー：豊原 敬文（東北大学）、小豆島 健護（横浜市立大学） 腎臓は150g程度の臓器だが、重量当たりの血流量は体内で最も豊富であり、老廃物の排泄のみならず液性調節による血圧制御や内分泌機能など多様な働きを有する。また腎疾患の病態も流体刺激、高血圧、炎症などが関わり複雑であるが、一細胞オミクスや患者由来iPS細胞などによって腎臓再生・移植、またメカノバイオロジーや液性制御研究によって高血圧の基礎的理解が進んでいる。本シンポジウムでは腎臓と血圧の多様な働きや病態の最新知見について共有する。	
公募企画 E	
3PS-07	12月5日(金) 14:20~16:20
スプライシング：その精巧なメカニズムと破綻による疾患 RNA splicing: its sophisticated mechanism and diseases caused by disruption オーガナイザー：片岡 直行（東京大学）、甲斐田 大輔（富山大学） 高等真核生物の核ゲノムにコードされる遺伝子のほとんどは、イントロンと呼ばれる介在配列によって分断化されている。そこでmRNA前駆体からイントロンを除き、エクソンを連結するスプライシングは遺伝子発現過程の中心となっている。スプライシングは精巧な過程であり、その機構解明が進んでいる一方、その制御に破綻をきたした場合、疾患として現れる場合も多く報告されている。本シンポジウムでは、スプライシングの機構とその破綻による疾患に焦点を当て、最新の知見を紹介する。	
公募企画 J	
3PS-08	12月5日(金) 14:20~16:20
エピゲノム制御が司る生命現象とその破綻による疾患発生 Epigenetic regulation controls development and disease onset オーガナイザー：竹島 秀幸（星薬科大学）、竹信 尚典（埼玉県立がんセンター） エピゲノムによる制御は我々の体の形成に必要な不可欠であり、様々な生命現象に重要な役割を果たす。一方で、我々のエピゲノムは様々な外部要因によって異常に書き換えられ、その異常が蓄積することで、がんなどの疾患の発症につながる。本シンポジウムでは、エピゲノムとその制御因子に焦点をあて、それらがどのような分子メカニズムで組織の発生から疾患発症につながるのかを紹介する。	
公募企画 J	
3PS-09	12月5日(金) 14:20~16:20
アシル化の生物学 Biology of Acylation オーガナイザー：梅原 崇史（理化学研究所）、古園 さおり（東京大学） 近年、高感度な質量分析により、タンパク質のリジンやシステイン残基に代謝産物由来の長鎖・短鎖の様々なアシル化修飾が発見されつつある。これらのアシル化修飾は環境応答や細胞機能の制御に関連していることが示唆されつつあるが、生化学的にも細胞生物学的にも未開拓な分野である。そこで、タンパク質のアシル化修飾に関する最新の話題を様々な観点から紹介し、今、アシル化研究の何が面白くて何がボトルネックかを議論する。	
公募企画 J	
3PS-10	12月5日(金) 14:20~16:20
植物の運動：目立たないが重要な運動のメカニズムを探る Plants in Motion: Exploring the mechanisms behind their subtle yet vital movements オーガナイザー：森田（寺尾）美代（基礎生物学研究所）、郷 達明（奈良先端科学技術大学院大学） 植物は、人間の目には捉えにくいものの、成長や環境応答の過程で絶えず動き続けている。植物の運動は、タイムスケール、駆動機構、直面する力のダイナミックレンジにおいて、動物とは本質的に異なる。本シンポジウムでは、植物の普遍的な運動の基盤メカニズムを、生理学、分子遺伝学、細胞生物学、物理・工学、進化の各視点から最前線の研究者が紹介する。分野横断的な議論を通じ、新たな展望を切り開く。	
公募企画 J	

3PS-11	12月5日(金) 14:20~16:20
「延長された表現型」の分子メカニズム：異種生物同士の相互作用を支えるエフェクター研究の最前線 公募企画 J	
The Molecular Mechanisms of the Extended Phenotype: The Cutting Edge of Effector Research Supporting Interactions Between Heterospecific Organisms	
共催：学術変革領域研究 (A)「共進化表現型創発：延長された表現型の分子機構解明」	
オーガナイザー：丹羽 隆介（筑波大学）、春本 敏之（産業技術総合研究所）	
自然界では、ある生物の遺伝情報が、他種の生物の表現型として発現していると解釈される現象が、特に寄生や内部共生といった近接的な生物間相互作用において普遍的にみられる。このような現象は、Dawkins (1982) によって提唱された「延長された表現型」の典型例である。しかし、その具体的な分子メカニズムについてはほとんど理解が進んでいない。本シンポジウムは、「延長された表現型」の分子機構に関する様々な生物を用いた研究の最前線を紹介することを目的とする。	
3PS-12	12月5日(金) 14:20~16:20
染色体配列解読の革新がもたらすゲノム科学の未来像 公募企画 E	
Chromosome-level genome assemblies: Transforming the future of genomics	
オーガナイザー：今 鉄男（University of Vienna）、濱田 麻友子（岡山大学）	
近年、ロングリードと Hi-C 解析から染色体配列を構築する手法が確立し、研究室単位で研究対象種の染色体配列が解読可能となった。以前は染色体レベルの解析はモデル生物に限られていたが、ここ数年で幅広い生物種の染色体配列が解明され、遺伝子機能と染色体スケールの情報を統合した“グローバル (glocal)”な視点で、生命科学が展開されている。本シンポジウムでは、哺乳類から無脊椎動物、植物までユニークな特徴を持つ生物種を用い、染色体配列解読を駆使して新たな生物学を切り拓く国内外の若手研究者を招き、研究事例をもとに、ビッグサイエンスから個別研究へと転換しつつあるゲノム科学の現状と未来像について議論を深める。	
3PS-13	12月5日(金) 14:20~16:20
多元的アプローチから迫る心臓システムの理解 公募企画 J	
Exploring the fundamental mechanisms of the cardiac system through multidisciplinary research	
オーガナイザー：松花（谷）沙織（神戸大学）、福井 一（徳島大学）	
私たちの生命を支える心臓はどのように形づくられるのか？これまでの心臓研究から、多様な細胞による発生のしくみが見えてきた。心臓の成り立ちの全容を理解するためには、細胞や組織情報の包括的な解析や、細胞による自律的・他律的原理の探求など、多元的な研究が欠かせない。本シンポジウムでは、空間トランスクリプトーム、生体イメージングや数理モデル解析などを駆使した最新の知見を紹介し、心臓・循環器システムの発生と機能のさらなる理解にむけて、分野横断的に議論する場としたい。	
3PS-14	12月5日(金) 14:20~16:20
ここまで来た腎臓オルガノイド研究 ～腎臓再生への道～ 公募企画 E	
State of the Art Kidney Organoid Research to Rebuild a Transplantable Kidney	
共催：国際先導研究（西中村代表）「腎臓を創る」	
オーガナイザー：高里 実（理化学研究所）、横川 隆司（京都大学）	
世界人口の約 10% が慢性腎臓病を患っているとされており、200 万人以上が人工透析や腎移植を受けている。その一方で、根治的治療法は存在せず腎移植のドナーも圧倒的に不足している。複雑な構造と機能を有する腎臓を人工的に作るということは夢物語とされていたが、2014 年に腎臓オルガノイド作製が成功したことで、流れが一変した。この 10 年で腎臓オルガノイドは遺伝性腎疾患の病態再現に用いられつつある。しかし現行のヒトオルガノイドは腎臓という臓器に特有の全体構造をまだ有しておらず、機能的にも未熟である。本シンポジウムでは、将来の移植医療のために、高次な構造と機能、成熟度を持つ次世代腎臓オルガノイドの作製を目指した最先端研究を紹介する。	

3PS-15	12月5日(金) 14:20~16:20
--------	----------------------

ミトコンドリアで働く分子たち—その振る舞いを基礎から見つめ直す—
Molecules in Mitochondria—Rethinking of their functions from basics—

公募企画

J

オーガナイザー：荒磯 裕平（金沢大学）、吉井 紗織（東京大学）

近年、ミトコンドリアに関する新規機能が次々と解明され、細胞の恒常性維持機構の根幹を担うミトコンドリア研究は目覚ましい進歩を遂げている。本シンポジウムでは、これらの機能を支えるタンパク質やRNA、低分子化合物に着目し、ユニークな研究を展開する若手研究者を中心に最新の知見をご紹介いただく。ミトコンドリアで働く分子たちの機能、構造、制御技術を、様々な視点から議論することで、ミトコンドリア生物学の根幹に迫り、新しいミトコンドリア像を見出す。

3PS-16	12月5日(金) 14:20~16:20
--------	----------------------

RNA と結合タンパク質が支配する超複雑系の作用原理の解析

公募企画

J

Analysis of working principle of a super complex system governed by RNA and its binding proteins

オーガナイザー：黒川 理樹（埼玉医科大学）、片平 正人（京都大学）

相分離に関与するRNA結合タンパク質(RBP) FUS/TLSは、数千種類のRNAと結合する。TLSは、さらに、複数のRBPと複合体を形成することから莫大な数のRNA分子とタンパク質複合体が形成される。RNAとRBPの結合には、非特異性と特異性が混在しており、偶然と必然により精緻に制御されている。この複雑系を支配する分子原理の解明に果敢に挑戦する研究者の会を企画する。ここでの個性的な論議を期待する。

3PS-17	12月5日(金) 14:20~16:20
--------	----------------------

老化と神経機能における糖と脂質代謝制御の分子機構

公募企画

J

Molecular mechanisms regulating carbon and lipid metabolism in aging and neuronal function.

オーガナイザー：稲田 利文（東京大学）、魏 范研（東北大学）

遺伝と代謝は生命の基盤であり、分子レベルでの相互寛解の理解が急速に進んでいる。遺伝子発現の正確性は生命現象の基盤であり、その恒常性の破綻は疾患の原因となる。多様な品質管理機構による遺伝子発現の正確性を保証する分子機構の理解が急速に進んでおり、代謝機能も解析が進んでいる。本シンポジウムでは老化と神経機能における糖と脂質代謝制御の分子機構に関する最近の進展について紹介する。

3PS-18	12月5日(金) 14:20~16:20
--------	----------------------

核膜関連研究の新展開：多様な生物学的機能と疾患との関連

公募企画

J

New frontier in nuclear envelop: cellular and pathological functions

オーガナイザー：上野 勝（広島大学）、正井 久雄（東京都医学総合研究所）

核膜は、遺伝情報の複製と安定な維持、損傷修復、発現制御やこれらを担う染色体高次構造形成などにおいて重要な役割を果たす。特に、核膜の異常は早老症などの遺伝病やがんと密接に関係する。最近、機械的ストレスによって損傷した核膜が、修復機構によって修復されることがわかってきた。本シンポジウムでは、複数の若手研究者の演題を公募し、タンパク質・脂質の相互作用を介した核膜形成・修復制御と、その異常が細胞・染色体機能や疾患発生に及ぼす影響に関する最新の研究成果と今後の展開について幅広く議論する。

【ミニシンポジウム テーマ一覧】

※ **公募企画** と記載のあるシンポジウムでは、一般演題から演題を採択予定です。

※セッション番号について：

開催日 + ミニ (M) + シンポジウム (S) + - (ハイフン) + 会場

(例) 3MS-05：第3日目・ミニ・第05会場

※時間について：各日 11：15～12：35

※講演言語について：**E** 英語 **J** 日本語

1MS-01	12月3日(水) 11：15～12：35
--------	----------------------

エボロジ～オルガネラヒモロジ～から紐解く生物進化～

J

Evolution + Organelle superstring theory = Evology

オーガナイザー：安藝 翔（東京大学）、椎葉 一心（学習院大学）

真核細胞のオルガネラは、動的な形態変化や物質輸送を通じてネットワークを形成し、生体恒常性やシグナル伝達を制御する。このネットワーク、「オルガネラヒモロジ」は、生物進化で普遍性と多様性を獲得し、細胞機能の高度化に寄与してきた。本シンポジウムでは、超解像度顕微鏡やオミクス解析を活用した最新研究や多様なモデル生物で得られた知見を共有し、新たな研究分野の創生と共同研究の促進を目指す。

1MS-02	12月3日(水) 11：15～12：35
--------	----------------------

心臓生物学の新展開

J

Emerging cardiac biology

オーガナイザー：真鍋 一郎（千葉大学）、尾池 雄一（熊本大学）

現在の心臓研究は、従来の心臓・心筋細胞セントリックな視点を超え、心臓を構成する多様な細胞社会や、代謝、免疫、神経系等との緊密な相互作用ネットワークの解明へと大きく展開している。この最先端の研究アプローチがもたらす発見は、心臓研究の枠を超えて生命科学全体に新たな視座を提供している。本シンポジウムでは、心臓研究に馴染みのない会員にも最新の研究潮流を広く紹介し、異分野の研究者との対話を通じて次世代の生命科学研究の創出を目指したい。

1MS-03	12月3日(水) 11：15～12：35
--------	----------------------

分子修飾が生み出す生命の制御と疾患

公募企画

J

Molecular Modification Produces Regulation of Biological Functions and Diseases

オーガナイザー：今野 雅允（産業技術総合研究所）、常陸 圭介（藤田医科大学）

DNA、RNA、タンパク質など、さまざまな生体分子は修飾を受けることでその機能が制御され、複雑な生命現象、さらには疾患の発症、悪性化に寄与する。本シンポジウムでは、若手研究者による分子修飾に関連した最先端の研究成果を紹介することで、生命における分子修飾の重要性の理解を深め、この分野への新規参入のきっかけを提供する。

1MS-04	12月3日(水) 11：15～12：35
--------	----------------------

スキマの分子生物学

公募企画

J

Molecular Biology of The Gap

オーガナイザー：村井 純子（愛媛大学）、中田 聡（群馬大学）

生物は様々な場面においてスキマ（ギャップ）を認識し、それを秩序に基づいて修復・充填する能力を備えている。例えば、DNA複製時のギャップや、除去された細胞間のスキマを埋める組織リモデリングである。一方で認識されないスキマもある。本シンポジウムでは、分子・細胞・組織の各階層に共通して保存されているスキマ認識や補填にフォーカスした「スキマ生物学」を立ち上げて、生物学的意義について議論を深めたい。

1MS-05	12月3日(水) 11:15~12:35	
何が私たちを形作るのか？遺伝子、身体、文化による人類進化の多階層的理解 What shapes us human? Understanding human evolution through genes, bodies, and culture		
オーガナイザー：野村 真（京都工芸繊維大学）、松前 ひろみ（東海大学）		
ホモ・サピエンスが備える独自の遺伝的、解剖学的、文化的特徴はどのように進化してきたのか？世界規模でヒトゲノム解読が進み、人類進化の理解は転換期を迎えている。そこで本シンポジウムでは、遺伝子、身体の発生や機能、身体から創出される文化（言語）など、さまざまな階層からヒトの進化を検証する。国内外のゲノム生物学者、解剖学者、発生学者らによる講演から「ヒトとは何か？」という普遍的な問いへの議論を深める。		
1MS-06	12月3日(水) 11:15~12:35	
次世代ハイポキシア研究者が巻き起こす生命科学の新潮流 Current Research Trends in the Brand-New Forum for Hypoxia Biology	公募企画	J
共催：ハイポキシア研究会		
オーガナイザー：鈴木 教郎（東北大学）、中山 恒（旭川医科大学）		
2025 年、「がんとハイポキシア研究会」と「低酸素研究会」が融合し、「ハイポキシア研究会」が発足した。2つの旧研究会では、低酸素応答のセントラルドグマ“PHD-HIF 経路”を中心とした研究の議論が展開され、国内の研究フォーラムとして一定の成果を得た。一方、PHD-HIF 経路が関与しない低酸素応答機構の発見や低酸素状態をストレスではなく細胞運命決定に必要なシグナルとして捉える視点が生まれた。そこで、次世代のハイポキシア研究者が取り組んでいる研究の最前線を紹介する。		
1MS-07	12月3日(水) 11:15~12:35	
地球と生命の共進化の理解から宇宙生命探査へ From the Coevolution of Life and Earth to the Search for Life in the Universe		J
協賛：学術変革 B 復元細胞機能学		
オーガナイザー：松尾 太郎（名古屋大学）、渡辺 智（東京農業大学）		
地球上の生命は約 40 億年前の誕生以来、地球表層環境との相互作用を通じて進化を遂げてきた。特に、光合成生物の出現によって地球表層が酸化され、酸素を利用する真核生物や多細胞生物の誕生が促進された。こうした地球での生命進化を理解することは、宇宙における生命探査の可能性を広げる上でも大きな手がかりとなり得る。本シンポジウムでは、進化生物学や地球惑星科学の分野で活躍する研究者を招き、地球と生命の共進化に関する最先端の知見と、それを踏まえた地球外生命探査の展望について議論を深める。		
1MS-08	12月3日(水) 11:15~12:35	
神経疾患の鍵を握るプロテオスタシス：ユビキチン化とタンパク質分解の新たな視点 Proteostasis as a Key to Neurological disorders: A New Perspective on Ubiquitination and Protein Degradation		J
オーガナイザー：松本 弦（大阪公立大学）、若月 修二（国立精神・神経医療研究センター）		
多くの神経変性疾患や精神疾患では、神経細胞のプロテオスタシス異常が原因として重要視される。プロテオスタシス維持にはユビキチン鎖を介したタンパク質分解系が大きな役割を果たし、異常タンパク質の排除やシグナル伝達調節を担う。そのため、この系の乱れは細胞機能の変容と疾患発症を引き起こす。本シンポジウムでは、神経細胞のプロテオスタシス異常に焦点を当て、ユビキチン化とタンパク質分解によるシグナル伝達変容や凝集体形成の観点から議論する。		

1MS-09 12月3日(水) 11:15~12:35

数理データ科学が拓く生命医科学研究の未来

E

Future of mathematical data science driven biomedical research

オーガナイザー：石川 俊平（東京大学）、織田 遥向（東京大学）

高次元ゲノミクスや多彩なイメージングなど、バイオインフォマティクス技術の進歩によりデータは急速に多様化している。この複雑なデータを有効活用するためには数理データ科学が不可欠である。そこで本国際シンポジウムでは、AI、機械学習、トポロジカルデータ解析、高次元統計など、生命医科学研究に有効な最先端の技術を実例と共に紹介する。ツールを軸に広い視点で、参加者一人一人が自身のデータ解析に有意義な技術に巡り合うことのできるセッションを目指す。

1MS-10 12月3日(水) 11:15~12:35

物理的微小環境による遺伝子発現制御と発生、疾患の理解

J

Understanding gene expression regulation, development, and disease by the physical microenvironment

オーガナイザー：川合 智子（岡山大学）、劉 孟佳（熊本大学）

従来、遺伝子発現制御はシグナル伝達と転写因子により説明されてきた。しかし、近年、ゲノムの物理的な切断や構造変化、細胞が受ける圧力などの「力」による遺伝子発現制御が器官の形成や機能に必須であること、またその破綻が老化やがんなどの病気を引き起こすことが明らかになりつつある。本シンポジウムでは、ゲノム、細胞、臓器レベルで「力」の専門家をお招きし、力の種類や程度、頻度を遺伝子制御情報として理解することで、体の形成メカニズムや疾患、医療展開を議論する。

1MS-11 12月3日(水) 11:15~12:35

魚類糖鎖生物学—魚類における糖鎖の生理機能に迫る—

J

Fish Glycobiology-Exploring the Physiological Functions of Glycans in Fish-

オーガナイザー：本田 晃伸（理化学研究所）、田角 聡志（鹿児島大学）

糖鎖の基本的な生合成および代謝機構、さらにはその生理機能については、主に哺乳類動物で解析が進んでいるものの、それ以外の生物、特に生物種特異的な機構についてはほとんど解明されていない。本シンポジウムでは、魚類の糖鎖研究に取り組む研究者が、魚類に特徴的な糖鎖構造や代謝機構、生理機能について発表する。これを通じて、魚類糖鎖生物学の発展可能性について活発な議論を行いたい。

1MS-12 12月3日(水) 11:15~12:35

染色体核型解析と大規模ゲノム解析の融合科学

J

Integrated chromosome biology from karyotypes to whole genome analysis

共催：一般財団法人 染色体学会

オーガナイザー：田辺 秀之（総合研究大学院大学）、宇野 好宣（東京大学）

染色体の数や形態、すなわち核型は生物種ごとにユニークなゲノムの鳥瞰図であり、核型解析から FISH 法、クロマチン解析法、Hi-C 法などへ展開を遂げてきた。一方、大規模ゲノム研究は NGS 技術の進展に伴い、ロングリード手法に基づいたほぼ完全な DNA 配列解読が可能となり、セントロメアやテロメアの詳細な構造も明らかにされてきた。本ミニシンポジウムでは、様々な動物および植物における染色体レベルから大規模ゲノム解析を手掛ける研究を紹介いただき、核型解析の重要性を再認識するとともにゲノム解析と合わせた融合科学としての未来へ向けた発展可能性を論じる機会としたい。

1MS-13	12月3日(水) 11:15~12:35
--------	----------------------

ゲノムアラインメントで生命の樹全体の進化を解明

公募企画

E

Genome Alignments: Are We Ready to Unravel Evolution Across the Tree of Life?

オーガナイザー：Charles Plessy（沖縄科学技術大学院大学）、Martin Frith（東京大学）

染色体スケールの完全なゲノムアセンブリが、生命の樹全体にわたる生物に対して利用可能になりつつあります。ゲノムアライメントは、数千年から数十億年にわたる進化的スケールを対象とした研究を可能にします。本シンポジウムでは、ゲノムアライメントから得られた最新の生物学的洞察に加え、新しい手法、ソフトウェア、パイプラインについて発表します。

1MS-14	12月3日(水) 11:15~12:35
--------	----------------------

生命の限定合理性を紐解く：細胞・組織・個体の知的適応

J

Unraveling the Bounded Rationality of Life: Intelligent Adaptation at Cellular, Tissue, and Individual Levels

オーガナイザー：木村 暁（国立遺伝学研究所）、小坂田 文隆（名古屋大学）

生命体は、時々刻々と変化するあいまいな環境を一部しか観測できないにも関わらず柔軟に適応する能力を備えている。このような「限定合理性」は、AIにはない生命特有の知性と言える。本シンポジウムは、生命の「環境を認識・推論する能力」と「柔軟な振る舞い」に注目することで、「限定合理性」を明らかにする試みを紹介する。細胞・組織・個体レベルでの「限定合理性」を実験的アプローチと理論的アプローチから探求することで、生命の知性に迫る議論を展開したい。

1MS-15	12月3日(水) 11:15~12:35
--------	----------------------

加齢による生体変容の分子・細胞レベルでの理解

J

The molecular and cellular mechanisms of aging

共催：JST さきがけ「加齢による生体変容の基盤的な理解」

オーガナイザー：渡部 聡朗（国立成育医療研究センター研究所）、三好 知一郎（理化学研究所）

老化を引き起こす根本的なメカニズムはどのようなものだろうか？ DNAの変異、遺伝子発現変化、ミトコンドリア代謝、細胞・タンパク質の変性などがその根底にあると考えられるが、その全容は不明である。また、エピジェネティック・クロックやSASP因子等も老化制御に関わることが示唆されている。本シンポジウムでは、老化の本質に迫るためのメカニズム研究や技術開発を進める研究者が最新の研究成果を発表し討論を行う。

1MS-16	12月3日(水) 11:15~12:35
--------	----------------------

自閉スペクトラム症の異分野横断的理解

J

Interdisciplinary Understanding of Autism Spectrum Disorders

協賛：日本医療研究開発機構 脳神経科学統合プログラム

オーガナイザー：岩見 真吾（名古屋大学）、小池 進介（東京大学）

自閉スペクトラム症をはじめとした多くの精神疾患は、そのスペクトラム性や疾患間の境界の曖昧さ、診断の難しさ、さらに「精神」を直接観察できないという特性から、理解と治療に多くの課題を抱えています。本シンポジウムでは、精神疾患研究における異分野融合の重要性に焦点を当て、最新技術やデータ解析を活用した新しいアプローチを模索します。免疫学、細胞生物学、データ科学、ヒトーマーモセット脳画像解析など、幅広い分野の専門家が集い、スペクトラム性や精神疾患横断という概念そのものの理解を共有し、各分野での自閉スペクトラム症研究成果についてお互いの理解を深め、診断精度の向上と治療・支援法の開発を目指す議論を展開します。異分野連携による精神疾患研究の未来をともに展望します。

1MS-17	12月3日(水) 11:15~12:35
脂質動態から探る核膜と核膜孔機能の最前線	
Advances in Nuclear Membrane and Pore Functions: Exploring Lipid Dynamics	
オーガナイザー：松村 美紀（愛媛県立医療技術大学）、Richard Wong（金沢大学）	
核膜の脂質動態は、核膜の柔軟性や構造・機能の維持に重要な要素である。本シンポジウムでは、脂質動態と核膜機能に関する最先端の研究を紹介し、学際的な連携を促進するとともに、新たな研究の方向性を探る。また、筋ジストロフィーやリポジストロフィーなど、核膜異常に関連する疾患の理解を深め、脂質代謝研究における核膜の重要性を再認識し、新たな視点や革新的なアプローチを提供する。	
1MS-18	12月3日(水) 11:15~12:35
新規アプローチによる運動器理解の深化	
High resolution understanding of musculoskeletal system through new approaches	
オーガナイザー：吉本 由紀（東京科学大学）、乾 雅史（明治大学）	
運動器は精緻な複合器官であり、その理解には骨格筋・腱・骨軟骨の個々のユニットに加え、組織間の相互作用の考慮も重要である。近年 scRNAseq 解析、組織透明化、オルガノイド等の新規手法から運動器研究に新たな視点が提供されている。本シンポジウムでは新しいアプローチで運動器の形態形成・機能維持・疾病に取り組む研究を取り上げ、その理解の深化を目指す。	
2MS-01	12月4日(木) 11:15~12:35
ゲノム医療とゲノム代謝・応答・修復	
Genome Medicine and Genome Metabolism, Response, and Repair	
オーガナイザー：中田 慎一郎（京都府立医科大学）、中沢 由華（名古屋大学）	
多くの遺伝性疾患は予後が極めて不良であり、診断から治療開始までの猶予期間が限られている。近年、ゲノム診断技術の進展に加え、遺伝子治療や核酸医療などの新たな治療法が、希少難治性疾患に対する革新的な治療戦略として期待されている。また、基礎医学や生物学における新たな発見が、こうした発展をさらに加速させている。本シンポジウムでは、難治性遺伝性疾患の診断・治療に資する最新の研究成果を、多角的な視点からご紹介する。	
2MS-02	12月4日(木) 11:15~12:35
細胞間相互作用が駆動する多細胞ダイナミクス	
Multicellular Dynamics Driven by Cell-Cell Interactions	
オーガナイザー：菊池 浩二（熊本大学）、三井 優輔（京都大学）	
多様な組織構造は、組織ごとに異なる発生プログラムに従った細胞の形態変化や運動、機能分化などの多細胞のダイナミクスにより生み出される。こうした多細胞ダイナミクスは、細胞同士が生化学的 / 力学的シグナルによって影響し合うことで駆動する。しかし、その分子メカニズムやその破綻により生じる病態の詳細は不明な点が多い。本シンポジウムでは、多細胞ダイナミクスの分子基盤やその破綻による病態などについて、最新の研究成果を紹介する。	
2MS-03	12月4日(木) 11:15~12:35
学際融合で挑む代謝・栄養学の新機軸	
A New Paradigm in Metabolism and Nutrition through Interdisciplinary Integration	
オーガナイザー：宮本 崇史（筑波大学）、高橋 伸一郎（東京大学）	
生命科学の深化により、栄養素の多面的な機能とその生理的意義が次々と明らかになってきた。しかし、代謝・栄養学が対象とする栄養素は、生体内で極めて複雑なネットワークを形成しており、その情報伝達システムについては未だ完全には解明されていない。本シンポジウムでは、代謝・栄養学を軸に、分子生物学、システムバイオロジー、数理科学など異分野の研究者が一堂に会し、生命システムにおける栄養素の統合的理解に向けた議論を行う。	

2MS-04	12月4日(木) 11:15~12:35
細胞内ナノスケール空間が司る生命現象 Intracellular Nanoscale Spaces as Regulators of Cellular Processes オーガナイザー：岩間 亮（東京大学）、吉村 柁彦（京都大学）	
様々な生体分子が密集する細胞内において、ナノスケールレベルの局所空間は至るところに存在する。これらナノスケール空間での生体分子はマクロ・マイクロスケールとは異なる動態を示すと考えられ、様々な局所空間での生体分子の特異的なふるまいが生命現象の根幹を支えている。本シンポジウムでは、ナノスケール空間における生体分子の挙動および機能の解明や細胞内のナノスケールレベルでの制御を目指す若手研究者の講演を中心に、ナノスケール空間から見た細胞像を議論する。	
2MS-05	12月4日(木) 11:15~12:35
Vasohibin/ 脱チロシン化研究の最前線 Advances in Vasohibin and Detyrosination Research 共催：Vasohibin 研究会 オーガナイザー：小林 美穂（東京科学大学）、古谷 裕（東京慈恵会医科大学）	公募企画 J
Vasohibin (VASH) ファミリーは α -チューブリンの翻訳後修飾である脱チロシン化を誘導する酵素 (TCP) であり、別の TCP である MATCAP1 と併せて世界中で盛んに研究が進められている。これら TCP はそれぞれ発現細胞や機能が異なるが、その生理的役割を十分に考慮していない研究も少なくない。このセッションでは VASH の本質的役割の解明を目指す研究者が集まり、日本で始まった VASH 研究の最新の知見を紹介しつつ議論する。	
2MS-06	12月4日(木) 11:15~12:35
加齢に伴う器官変容のメカニズム Mechanisms of age-related organ alteration 共催：JST さきがけ「加齢による生体変容の基盤的な理解」 オーガナイザー：大東 いずみ（徳島大学）、堅田 明子（九州大学）	J
世界的に高齢化が深刻な社会問題となる中、近年、我が国においても老化研究が精力的に推進されている。個体老化においては、組織間の相互作用は重要な視点であり、多様な組織・器官における加齢変容の基礎的な知見を蓄積し、活用することが肝要である。本シンポジウムでは、JST さきがけ「加齢による生体変容の基盤的な理解」2022 年度採択者の中から、心臓、皮膚、筋肉、胸腺、脳脈絡叢、睡眠における加齢変容の研究者が集まり、最新の研究成果を紹介する。	
2MS-07	12月4日(木) 11:15~12:35
未来を創る遺伝子改変技術：発生工学の新たな地平線 Shaping the Future with Gene Editing Technologies: New Horizons in Developmental Engineering オーガナイザー：山本 正道（国立循環器病研究センター）、畑田 出穂（群馬大学）	J
モデルマウスは生命現象の解明や病態研究に欠かせないツールであり、近年、遺伝子編集技術、ヒト人工染色体をはじめ様々な革新技術が導入され、飛躍的な進展を遂げている。本シンポジウムでは、時空間的遺伝子操作、染色体レベルでのヒト化、レポーターを用いた 1 細胞レベルでのリアルタイム観察など、最先端の技術を駆使して見えてきた新たな知見を提供し、参加者とともに最前線の研究成果を深く議論する。	

2MS-08 12月4日(木) 11:15~12:35

モビローム研究最前線：動く遺伝子の謎に迫る

J

Frontiers of Mobilome Research: The Secrets of Mobile Genetic Elements

後援：大隅基礎科学創成財団

オーガナイザー：鈴木 仁人（国立感染症研究所）、新谷 政己（静岡大学）

塩基配列解読・解析技術の革新により、メタゲノムから個々の微生物の染色体ゲノムを高精度に再構築可能になった。一方で、進化や適応の鍵を握る可動性遺伝因子（モビローム）は、多様性の高さや解析の難しさから研究が遅れていた。近年のバイオインフォマティクスや構造生物学の進展により、新奇モビロームの検出や、その動態に重要な因子の発見が可能になりつつある。本シンポジウムでは、最新の研究成果を共有し、その意義と今後の課題を議論する。

2MS-09 12月4日(木) 11:15~12:35

リボソームクラブ：リボソーム・翻訳研究の最前線

公募企画

J

Ribosome Club: Frontiers in the study of ribosomes and translation

オーガナイザー：北村 大樹（大阪大学）

細胞内でのタンパク質合成を担うリボソームは、すべての細胞で構成が同じである受動的な翻訳装置でしかないと長らく考えられてきた。しかし近年の研究によって、リボソーム不均一性や数多の extra-ribosomal function が発見され、個体の発生や恒常性維持におけるその重要性が注目を集めている。本シンポジウムでは、これらを含む、リボソームや翻訳に焦点を当てた研究を行っている気鋭の若手研究者を招き、今後のさらなる研究展開について議論したい。

2MS-10 12月4日(木) 11:15~12:35

生命維持の要：多様な生物における膜輸送体の機能と進化

J

Essentials of Life: function and evolution of transporters across diverse organisms

オーガナイザー：永嶌 鮎美（東京科学大学）、小林 彰子（東京大学）

生物は環境認識と適切な応答により生存を維持し、その過程で膜輸送体は、情報受容と恒常性維持の両面で多様な機能を発揮する。膜輸送体はオーソログ間でその輸送特性が必ずしも同一ではなく、その作用機序を理解するには、分野横断的に多角的な視点の研究が求められる。本シンポジウムでは、多岐にわたる生物の膜輸送体における、イオン・水・食品成分といった多様な基質の輸送特性や進化的変化について、様々な手法を用いた膜輸送体研究の最先端を独自の視点から議論したい。

2MS-11 12月4日(木) 11:15~12:35

タンパク質複合体の動的相互作用と機能解明

公募企画

E

Dynamic Interactions and Functional Analysis of Protein Complexes

オーガナイザー：高橋 将晃（アブドラ王立科学技術大学）

本シンポジウムでは、タンパク質複合体の動的相互作用が生体内での機能発現にどのように寄与しているかを、多角的な手法を用いて解明する最新の研究を紹介します。特に、一分子蛍光イメージング、質量分析、NMR、クライオ電子顕微鏡（cryo-EM）などの先進的な技術を活用した研究に焦点を当て、DNA複製、転写、シグナル伝達など、さまざまな生物学的プロセスにおけるタンパク質複合体の機能とその制御メカニズムについて議論します。さらに、深層学習技術を用いたデータ解析や分子動力学シミュレーションなど、最新の計算科学的手法を組み合わせたアプローチも取り上げます。

2MS-12 12月4日(木) 11:15~12:35

神経系の修復と保護への新たなアプローチ

J

New approaches to nervous system repair and protection

オーガナイザー：鯉沼 真吾（東京理科大学）、村田 等（岡山大学学術研究院医歯薬学域）

発生期の神経ネットワーク形成の解明は、20世紀最後の20年間における生物学の金字塔の一つである。そして神経系の始めから終わりまでを、多様な面を持つ「1つのロジック」として語れるかどうか、現在の課題として現れている。このロジックは、ヒト成体神経系の修復と保護を目指す指導原理になると期待される。本企画は、代謝、グリアとニューロン、細胞骨格と膜の制御、エピジェネティクスなど多様な分野の知見を持ち寄り、そのロジックを議論する場を目指す。

2MS-13 12月4日(木) 11:15~12:35

雷！プラズマ駆動型科学にみる植物内分子応答

J

Inazuma! Molecular Responses in Plants Mediated by Plasma-Driven Sciences

協賛：学術領域変革研究（A）「プラズマ種子科学」

オーガナイザー：國枝 正（奈良先端科学技術大学院大学）、古閑 一憲（九州大学）

人工的雷である「プラズマ」を生物に応用する研究が進んでいる。プラズマで発生した活性酸素による生体応答が分子メカニズムのひとつとして認識される中、自然現象ではありえないような短寿命な分子や機能性分子、電場を与えて対する応答を起こすことができる。一方で、その背景にある分子メカニズムは不明な点が多い。本シンポジウムでは、分子生物学者には馴染みが薄いプラズマのいろはから、植物特に種子を対象としたプラズマに対する植物の応答メカニズムを紹介し、分野融合的に議論したい。

2MS-14 12月4日(木) 11:15~12:35

先端技術で拓く視覚・網膜研究の新時代

J

Frontiers in visual and retinal science: Advances in Molecular Biology and Cutting-Edge Technologies

オーガナイザー：大津 航（岐阜薬科大学）、高橋 慶（ペンシルバニア大学）

ヒトは外界情報の8割を視覚から得ており、傷害や疾患による視覚障害は人々のQOLを著しく低下させる。光を受容する視細胞は高度に分化・発達した感覚繊毛である。近年、分子生物学的手法や超解像顕微鏡技術の飛躍的な進展に伴い、視細胞の緻密な制御機構の分子基盤が明らかされつつある。本シンポジウムでは、視細胞を主軸とする網膜研究の最新知見に加え、低分子からオプトジェネティクスまで、多岐にわたる視覚障害治療の創薬展開について紹介する。

2MS-15 12月4日(木) 11:15~12:35

バイオグリーン・トランスフォーメーションで拓くCO₂固定の新時代

公募企画

J

A new era of CO₂ fixation made possible by bio-green transformation

オーガナイザー：小倉 淳（長浜バイオ大学）、鈴木 道生（東京大学）

バイオミネラリゼーションによって生成される炭酸カルシウムは、二酸化炭素を長期固定しうる手段です。新たな学術的エビデンスを活用し、炭酸カルシウムベースのCO₂固定制度を普及させるために、分子生物学的知見と両面から検討する必要があります。カーボンニュートラルへの貢献を目指し、微細藻類によるCO₂吸収の相乗効果を探りながら、カーボンニュートラル実現に向けた課題と戦略を議論します。産業界との連携、環境分野への応用も議論し、社会実装の具体的道筋を探ります。

2MS-16 12月4日(木) 11:15~12:35

病気とミトコンドリアのクロストーク

J

Crossroads of Health: Mitochondria and Disease Communication

オーガナイザー：武田 啓佑（大阪大学）、志村 大輔（ユタ大学）

細胞内代謝と分子経路が複雑にクロストークするスクランブル交差点「ミトコンドリア」。そこは細胞内共生を起源とするエネルギー合成中枢としての役割を超えた多機能性と応答性を有している。本シンポジウムでは、生理・病態の観点からシグナル変換装置としてのミトコンドリアの働きと波及効果について、最新の分子生物学的知見を交えて紹介する。夢にときめく学生と、明日にきらめく若手研究者による積極的な発表・議論・交流の場を設けるとともに、ミトコンドリア研究領域への新規参入のきっかけを提供したい。

2MS-17 12月4日(木) 11:15~12:35

脳サイズの生物学と小頭症の病理

E

The Biology of Brain Size Determination and the Pathology of Microcephaly

オーガナイザー：大隅 典子（東北大学）、星野 幹雄（国立精神神経医療研究センター）

脳のサイズは種によって大きく異なり、その制御機構の解明は発生生物学的にも進化生物学的にも重要な課題であるとともに、その制御不全により小頭症が生じる。本シンポジウムでは、脳サイズを決定する分子メカニズムについて、マウス、フェレット、マーモセット、ヒトなどの脳サイズの異なる哺乳類動物をモデルとした最新の研究成果を紹介する。さらに、その機構の異常によってもたらされる小頭症の病理についても議論する。

2MS-18 12月4日(木) 11:15~12:35

ライブイメージングにより解き明かす配偶子形成の仕組み

E

Revealing mechanisms of gametogenesis by live imaging

オーガナイザー：伊藤 将（大阪大学）、今井 裕紀子（埼玉大学）

配偶子形成は、有性生殖を行う生物が次世代に多様な遺伝情報を安定的に継承する上で必須のプロセスである。近年、ライブイメージングを中心としたイメージング技術により細胞や染色体の動態を可視化することで、配偶子形成の時空間的制御機構が詳細に明らかになりつつある。本シンポジウムでは、幅広いモデル生物種を対象とし、配偶子形成の仕組みについて議論する。

3MS-01 12月5日(金) 11:15~12:35

がん三次元培養研究の新展開

J

A new horizon of cancer 3D research

オーガナイザー：岡本 康司（帝京大学）、後藤 典子（金沢大学）

がん組織のもつ多様性や可塑性などの特性は、抗がん剤の抵抗性や転移能などのがん難治性と深くかかわっており、その理解はがん克服をめざす上で重要である。オルガノイドやスフェロイド等の三次元培養系は、がんの持つこのような特性を *in vitro* で再現でき、がん研究を行う上で重要なツールとなってきた。本シンポジウムでは、三次元培養を応用した臨床がんの本態に迫る研究についてご紹介する。

3MS-02 12月5日(金) 11:15~12:35

クロマチン動態から臨床応用まで広がる転写研究の新展開

E

Transcriptional Research from Chromatin Dynamics to Translational Insights

オーガナイザー：伊藤 敬（長崎大学）、井上 聡（東京都健康長寿医療センター）

基礎的なクロマチン研究から高度な *in vivo* アプローチまで、転写調節の最前線について議論します。本セッションでは、クロマチン動態、転写因子、RNAポリメラーゼ II の研究における第一人者が、クロマチン研究の基礎から最新の知見に至るまでを紹介しします。また、がんとの関連において、異常なホルモン受容体活性やクロマチン構造が前立腺がんや乳がんの進行をどのように促進するかを取り上げます。特に、老化、加齢性疾患、がん治療におけるクロマチン構造と遺伝子転写の分子メカニズムを掘り下げ、これらの知見が臨床応用に発展する可能性についても議論します。

3MS-03	12月5日(金) 11:15~12:35
美しい脈管ネットワークで決まる臓器機能 Organ function defined by an exquisite vascular network オーガナイザー：坂上 倫久（愛媛大学）、吉松 康裕（新潟大学） 近年の組織透明化技術と生体イメージングの進歩は、各臓器が織りなす血管ネットワークの全容を明らかにしつつある。それぞれの臓器は、まるで異なる設計図に基づくかのように独自の血管構築を示し、従来知られていた酸素・栄養供給の役割を超えて、臓器特異的な新たな機能の存在を示唆している。本シンポジウムでは、組織固有の美しい脈管ネットワークを紹介し、その構造が紐解く新しい生物学的知見について議論を深める。	
3MS-04	12月5日(金) 11:15~12:35
生殖代謝学：環境と代謝による生殖サイクルの制御 Reprometabolism: Environmental and metabolic control of the reproductive cycle オーガナイザー：林 陽平（東北大学）、前澤 創（東京理科大学） 生殖細胞系列は胚発生期に始原生殖細胞として出現し、成体の長い期間に亘って保持され、次世代個体を生み出す機能を維持し続ける。胚発生から新生児期には母体由来の環境、成体では自身の置かれる環境やライフ時間の経過が生殖細胞や支持細胞の代謝状態に影響し、エピゲノム状態や生殖機能の制御に関わるが、その仕組みを明らかにする研究は端緒についたばかりである。本企画ではこのような研究を生殖代謝学と位置づけ、その現状と展望について議論を深めたい。	
3MS-05	12月5日(金) 11:15~12:35
エピゲノブリッジ：クロマチン記憶の来し方行く末 Epigenobridge: where chromatin memory comes from and goes to 協賛：学術変革（B）エピゲノブリッジ オーガナイザー：日詰 光治（埼玉医科大学）、寺川 剛（京都大学） 「クロマチンに残された記憶」。この現象については、その継承原理が不明であるのみならず、その継承が細胞にもたらす影響の範囲についても理解の途上である。本シンポジウムでは、クロマチン記憶に関する多彩な切り口の研究発表を通じて、エピジェネティクスを「分子」から「細胞・個体」レベルまで横断的に理解する“橋渡し”となる議論を期待したい。	
3MS-06	12月5日(金) 11:15~12:35
骨格筋を基軸とした運動栄養生物学の新展開 New landscape of exercise and nutrition biology: molecular regulation of skeletal muscle オーガナイザー：小野 悠介（熊本大学発生医学研究所）、伊藤 尚基（国立長寿医療研究センター） 超高齢社会を迎えた我が国では、加齢に伴う筋量・筋力の低下（サルコペニア）は喫緊の医学的・経済的課題となっている。サルコペニアに立ち向かう手段として運動や栄養が有効であることを示すエビデンスは枚挙にいとまがないが、それらの分子基盤の包括的・統合的な理解は依然として進んでいない。本シンポジウムでは、骨格筋の代謝シグナルやエピゲノム制御、骨格筋の多臓器連関を含む幅広い視点から、サルコペニア克服に資する運動栄養生物学の最新の研究成果を議論する。	
3MS-07	12月5日(金) 11:15~12:35
生体の恒常性維持における糖鎖修飾の重要性 Importance of glycosylation on organism homeostasis オーガナイザー：藤平 陽彦（理化学研究所）、今江 理恵子（東京都健康長寿医療センター研究所） 糖鎖修飾は最も主要な翻訳後修飾であり、修飾分子の正常な構造および機能獲得、細胞間・細胞内でのシグナル伝達、ウイルス感染、免疫応答、がん、老化など、生体の恒常性維持、生体防御、疾患に関連する多くの生命現象において重要な役割を果たしている。本シンポジウムでは、“糖鎖修飾”の変化や異常がどのように“生体の恒常性維持”に影響するのかに関して、気鋭の研究者から最新の知見について発表していただき、その重要性について議論を交わりたい。	

3MS-08 12月5日(金) 11:15~12:35

TOR をトリまく栄養応答の最前線

公募企画

E

TOR's Open Door: The Key to Nutrient Responses

オーガナイザー：中津海 洋一（名古屋市立大学）、谷川 美頼（浜松医科大学）

TOR (Target of Rapamycin) は、細胞が富栄養状態や飢餓状態を認識し、応答する過程の中核を担う分子である。本シンポジウムでは TOR シグナルを基盤に、細胞がどのように栄養環境を感知するのか、また細胞を環境にいかに対応させるのかのメカニズムに焦点を当てる。酵母からヒトまで幅広い生物種における栄養応答の最新知見を紹介し、研究の最前線を探る。

3MS-09 12月5日(金) 11:15~12:35

食食の多様性と普遍性：生命をかたちづくる見えざる力

J

Diversity and Universality of Phagocytosis: The Invisible Force Shaping Life

オーガナイザー：津久井 久美子（国立感染症研究所）、小山 隆太（国立精神・神経医療研究センター）

食食は多様な生物種や細胞に見られる基本的な生物現象であるが、未解明の部分も多い。免疫制御における重要性は良く知られるが、神経制御、個体発生、癌、感染現象、さらには環境中での捕食や共生関係の構築にも深く関わっている。本ミニシンポジウムでは、従来は食食と関連があるとは考えられてこなかった現象にも焦点を当て、多様な研究領域における食食の関与を示す。異分野の知見から、生命のダイナミクスを読み解く新たな視点を提供したい。

3MS-10 12月5日(金) 11:15~12:35

次世代ステロイドホルモン研究の最前線

公募企画

J

The Frontiers of Next-Generation Steroid Hormone Research

オーガナイザー：馬場 崇（九州大学）、今井 祐記（愛媛大学）

1960 年代から 90 年代にかけて黄金期を築いたステロイドホルモンとその受容体研究は、基礎研究と応用研究の両面で現在もなお目覚ましい発展を遂げています。本シンポジウムでは、ステロイドホルモンが身体の恒常性を制御する仕組みを解明する基礎研究や、関節リウマチ、ガン、高血圧、心血管疾患などの治療戦略に繋がる応用研究の最新成果を紹介します。新たな内分泌制御機構、転写共役因子、リガンドの発見から、臨床応用に向けた展望まで、多岐にわたるテーマを議論します。

3MS-11 12月5日(金) 11:15~12:35

自然環境下における微生物の遺伝子発現の分子機構の理解

公募企画

J

Understanding the molecular mechanisms of microbial gene expression in natural environments

オーガナイザー：島田 友裕（明治大学）、小笠原 寛（信州大学）

古くから、微生物はモデル生物として、細胞の仕組みを理解するために、実験室内で研究されてきた。今では、様々な微生物が多様な自然環境下で生育していることが知られ、その分子機構を理解することは、現代科学の課題である。本シンポジウムでは、土壌や河川などの自然環境下、また、異種細菌間や動植物との共生や感染における微生物の生存戦略について、遺伝子発現を中心に分子機構の理解を目指している研究を取り上げ、議論したい。

3MS-12 12月5日(金) 11:15~12:35

大規模バイオバンクを基盤とするヒト疾患研究の最前線

J

Cutting-edge human disease research based on large-scale biobanks in Japan

オーガナイザー：信國 宇洋（東北大学）、後藤 雄一（国立精神・神経医療研究センター）

モデル動物などを使って得られた知見を社会に還元するためには、ヒトの試料・情報を用いた疾患研究が必須である。近年、ヒト試料やゲノム・オミックス情報を保管・管理する複数の大規模バイオバンクが国内で整備されている。本シンポジウムでは、これらの貴重なリソースを利活用した多様なヒト疾患の最先端の研究を紹介し、分子生物学の社会実装、医学への応用を促進する糸口となることを期待している。

3MS-13 12月5日(金) 11:15~12:35

温泉微生物がもつ耐熱細胞外殻の分子機構

J

Thermostable cell surface mechanics in *Thermus thermophilus*

共催: ThermusQ 研究会

オーガナイザー: 別所 義隆 (理化学研究所)、中根 大介 (電気通信大学)

高度好熱菌 (*Thermus thermophilus*) は、85℃という高温環境下で生存可能なグラム陰性菌であり、遺伝子操作が可能な好熱菌のモデル生物として、基本生命現象の解明や生化学の発展に多大な貢献を果たしてきた。この微生物では、タンパク質や核酸など、細胞機能に必須の生体高分子が耐熱化しており、構造ゲノムプロジェクトによる網羅的な解析から、分子の耐熱の仕組みが一般化されつつある。しかしながら、細胞が高温環境で生きるということは、分子だけでなく、生命を包む細胞自体が耐熱化している必要がある。ここで、細胞の外殻にあたる細胞膜や細胞壁、さらに細胞の表層に位置する線毛や好熱ファージに注目し、耐熱性に関する最新の知見を議論する。

3MS-14 12月5日(金) 11:15~12:35

老化抑制に資する代謝・ビタミンシグナル

E

Can metabolic and vitamin signaling prevent aging?

オーガナイザー: 堀江 公仁子 (埼玉医科大学)、東 浩太郎 (東京大学)

現代社会では、偏った食事や化学物質によって代謝作用が変容し、老化が加速してメタボリック症候群やがんなどの疾患が惹起されやすくなっている。本シンポジウムでは、代謝シグナルの調節とビタミン作用が老化の抑制に資することができ、健康寿命の延伸に貢献できるかについて論じたい。

3MS-15 12月5日(金) 11:15~12:35

シングルセル解析が拓く病態生理学: データ解析と機能解析のハーモニー

公募企画

J

Pathophysiology driven by single-cell analysis: harmonizing computational and experimental approaches

オーガナイザー: 山崎 昌哉 (がん研究会)、浅田 礼光 (ハンブルク・エッペンドルフ大学病院)

近年のシングルセル解析技術革新により、組織発生や恒常性維持、さらに疾患に関与する細胞の多様性が明らかになってきた。Human Cell Atlas のような網羅的なデータは蓄積されたが、特定の現象における亜細胞集団の機能解析や重要性の確認は、実験系構築の難しさなどのために依然容易ではない。本シンポジウムでは、新進気鋭の若手研究者を招き、データ解析と機能解析を融合した研究例を紹介する。特に、解析のコツや注意点、さらにどのように介入試験に落とし込むかに焦点を当て、議論する。

3MS-16 12月5日(金) 11:15~12:35

魅惑の骨格筋生物学: 健康長寿への新たな旅

E

Fascinating Skeletal Muscle Biology: A New Journey Towards Healthy Longevity

共催: 日本筋学会

オーガナイザー: 鈴木 直輝 (東北大学)、青木 吉嗣 (国立精神・神経医療研究センター)

骨格筋は人体最大の臓器であり、日常の運動や健康を維持する上で中心的な役割を果たし、また筋疾患のみならず生活習慣病や加齢性筋萎縮においても骨格筋の機能異常が深く関わる。超高齢化社会における健康寿命の延伸のためにも骨格筋の理解は欠かせない。筋疾患やサルコペニアにおける異常タンパク質凝集や組織恒常性維持機構の破綻を分子レベルで多角的に理解し、骨格筋生物学の新たな地平を切り開く。

3MS-17 12月5日(金) 11:15~12:35

進化における革新と生物多様性の源泉としてのデノボ遺伝子誕生

E

De novo gene birth as a molecular origin of evolutionary innovation and biodiversity

オーガナイザー: 末永 雄介 (千葉県がんセンター研究所)、Li Zhao (The Rockefeller University)

生物進化において noncoding ゲノム領域から全く新規に誕生する遺伝子をデノボ遺伝子と呼ぶ。デノボ遺伝子は酵母からヒトに至るまで広範な生物種で同定され、種としての特徴を創造する。またデノボ遺伝子の寿命は短く、デノボ遺伝子の誕生と喪失が系統内における遺伝的多様性を生み出す。本ミニシンポジウムではデノボ遺伝子を研究する進化学、構造生物学、医学の研究者が一堂に会し、最新の知見を発表する。

自閉スペクトラム症が示す多様な世界の理解を目指して

—動物からヒト、分子から個体、分野横断的な研究の最前線—

J

Aiming to understand the diversity of autism spectrum disorder

—From animals to humans, from molecules to individuals, at the forefront of cross-disciplinary research—

オーガナイザー：内野 茂夫（帝京大学）、古田島 浩子（東京都医学総合研究所）

自閉スペクトラム症（ASD）は、社会的コミュニケーションの障害や興味・行動の限局化、感覚異常など多様な症状を示す先天的な発達障害である。本ミニシンポジウムでは、ASD 者の臨床知見に基づいたヒト型 ASD モデルマウスや ASD 者の iPS 細胞とモデルマウスの種をこえた病態検証、ASD を高頻度に伴う結節性硬化症など他疾患からのアプローチなど、分野横断的な研究から ASD の最前線の研究トピックスを紹介します。

【フォーラム テーマ一覧】

※セッション番号について：

開催日 + フォーラム (F) +- (ハイフン) + 会場

(例) 1F-01：第1日目・第01会場

※時間について：19：15-20：30

※講演言語：フォーラムは1F-10をのぞきすべて日本語での開催となります。

1F-10のみ日本語 / 英語混交での開催を予定しております。

1F-04	12月3日(水)
-------	----------

大気粒子・化学物質の生体影響最前線：分子生物学が紐解く新たな知見

Cutting-Edge Insights into the Biological Impacts of Atmospheric Particles and Chemical Substances:

Unveiling New Findings through Molecular Biology

オーガナイザー：三村 達哉（帝京大学）、吉田 安宏（産業医科大学）

本フォーラムでは、「大気粒子・化学物質の生体影響最前線」と銘打ち、大気中の有害物質が引き起こす健康リスクに関する最新の研究成果を紹介する。肉眼では確認できないマイクロ・ナノ微粒子は細胞レベルでは免疫攪乱・毒性を発揮し、この細胞毒性は呼吸器、アレルギー・免疫疾患、循環器、生殖、加齢、感覚器などへの全身への生体影響を及ぼす。学会キャッチフレーズの「この指とまれ！」を掲げ、分子生物学、環境科学、医学、工学のより広い分野の専門家が一堂に会し、微粒子の脅威に立ち向かうための議論を展開する。専門家たちが語る、微粒子の脅威とその解決策への挑戦を、ぜひお聞きください。

1F-09	12月3日(水)
-------	----------

攪乱に対する生物応答の多様性はどのように生まれるのだろうか？

How does the diversity of biological responses to perturbations emerge?

オーガナイザー：坂井 貴臣（東京都立大学）

生物は常に、遺伝子変異や環境変化など、個体の内外からの様々な攪乱に晒されている。興味深いことに、こうした攪乱に対する応答は、複数の生物種に共通して現れる場合もあれば、種ごとに固有のものも存在する。このような応答性の差を決定する要因の候補として、遺伝子や細胞型、これらの集合体である組織や器官、そしてそれらの間のネットワークが重要と推察されるが、その全貌は明らかになっていない。本フォーラムでは、こういった多様性の例を眺めつつ、どうすれば多様性の成立機序を明らかにしていけるか議論したい。

1F-10 学会企画	12月3日(水)
------------	----------

著者からエディターへ：日本の科学を世界へ発信する橋渡しになろう

From Author to Editor: Bridging Japanese Science to the World

オーガナイザー：岡田 由紀（東京大学）、斉藤 典子（公益財団法人がん研究会がん研究所）

日本人研究者の多くは「著者」として学術誌に関わっていますが、国際誌の「エディター」としての関与は極めて少なく、日本のサイエンスの国際的可視性が高まらない一因ともなっています。一方、中国などではエディターの積極的な登用や出版戦略が進んでおり、国際発信力の差は拡大しています。本企画では、国際的に著名な学術誌のエディターを招き、日本人研究者、特に若手層に対し、エディターというキャリアパスを紹介します。サイエンスの送り手としての新たな役割に目を向け、日本からの情報発信の強化に繋がることを期待します。

※本フォーラムは英語での講演を含め、日本語 / 英語混交での開催を予定しております。

なぜ細胞まるごとシミュレーションが必要なのか？

Why is whole-cell simulation necessary?

協賛：自然科学研究機構 生命創成探究センター 先端共創プラットフォーム 生命体のシミュレーション

オーガナイザー：青木 一洋（京都大学）、守屋 央朗（岡山大学）

細胞で起きるあらゆる現象を計算機上で再現することを謳う「細胞まるごとシミュレーション」は、分子／細胞生物学の究極のゴールである。それが達成した時、私たちは細胞の生命活動を本質的に理解できたと言えるだろう。一方、何がどこまでできたらそれは達成したと言えるのか？あるいは、完成した細胞まるごとシミュレーションは何を私たちにもたらししてくれるのか？この間に対する答えは明確ではない。本フォーラムでは、研究者による話題提供と会場の参加者を加えたパネルディスカッションを通じて、今、「なぜ細胞まるごとシミュレーションが必要なのか？」（あるいはやはりそれは必要ないのか？）を改めて考える機会としたい。

「おもしろい微生物学」を語ろう：好奇心が駆動するサイエンスの最前線へ

Let's Talk "Interesting Microbiology": Curiosity Drives Us to the Forefront of Science

オーガナイザー：片岡 正和（信州大学）、高木 博史（奈良先端科学技術大学院大学）

急速に進化するデジタル技術が、私たちの科学のかたちを大きく変えつつあります。微生物学の世界でも、ゲノム合成やマルチオミクスといった革新的なツールが登場し、新たなイノベーションの種が芽吹いています。本フォーラムでは、発酵や醸造のような民族の食文化に根ざした微生物機能の応用から、金属腐食のような産業課題への挑戦、さらには合成生物学による微生物の“進化”まで、幅広く「今、おもしろい」話題を取り上げます。加えて、網羅的なリソースを駆使して「細胞が生きているとはどういうことか？」という根源的な問いに挑む研究もご紹介します。登壇者たちは、科学者であると同時に多彩な人生背景を持つ、まさに“選りすぐり”のメンバー。分野の垣根を越え、企業の方々も交えて、「好奇心こそが科学のエンジンだ」と思う皆さんと、一緒に語り合いたいと考えています。

UJA 留学のすゝめ 2025～日本の科学技術を推進するネットワーク構築～

UJA Studying Abroad 2025—Building a network to promote science and technology in Japan—

協賛：海外日本人研究者ネットワーク

オーガナイザー：千住 洋介（岡山大学）、渡邊 友浩（北海道大学）

海外日本人研究者ネットワーク（UJA）は、「留学のすゝめ」と題し、さまざまな学会でフォーラムやシンポジウムを企画している。本フォーラムでは、留学経験者を講演者としてお招きし、留學生活のリアルな体験談や海外で成功するための秘訣、世界のサイエンスの現状について共有する。パネルディスカッションでは、日本人研究者が世界で活躍するための効果的なネットワーク構築について、会場からの質問に答えながら議論を深める。UJA アンケート（2019年）では、新しい時代に対応した研究への向き合い方や研究者のあり方が見えてきている。本フォーラムでは、多様なキャリアステージの留学経験者の体験談を紹介しながら、これからの時代に研究留学の効用を最大化するための議論を行う。大学院生、留学を目指す研究者、人材育成に携わる指導者の方々に向けて、ネットワーク構築やキャリアパスに関する具体的なアドバイスをいただき、日本の研究力強化と科学技術の推進を目指す。

分子生物学は陰謀論を超えられるか：「異端の生命科学者」この指とまれ！

Beyond 'conspiracy theories'

オーガナイザー：新田 剛（東京理科大学）、掛谷 英紀（筑波大学）

COVID-19の流行による世界的な混乱期には、いわゆる「陰謀論」や「異端の説」として専門家から顧みられなかった言説が多くあった。分子生物学の分野も例外ではない。新型コロナウイルスは遺伝子操作によって作られ、研究所から流出した可能性は？ mRNA ワクチンは COVID-19 に対する集団免疫を実現できないのでは？ 科学の本質は従前の知識や常識を疑い、論理的または実験的に検証し、間違いがあれば修正してゆくことにある。2025 年現在、海外では「コロナ禍」の科学・医療政策や専門家の言説に対する検証や反省が進められている。米国では 2020 年から主流の見解に異を唱え、当時の NIH 所長コリンズから「異端の疫学者」と呼ばれたバタチャリア博士が NIH 所長に就任した。博士は 2024 年にコリンズと直接面会したとき、彼から謝罪の言葉を受けたと語っている。日本の生命科学者も腰を据え腹を割って議論すべきではないか。それこそが真の意味で公衆衛生や安全保障や健全な科学の未来のために重要であるはずだ。本フォーラムでは昨年に引き続き、COVID-19 対策を生命科学の観点から検証・総括することをめざす。

科学者×コミュニケーター、ただいま接続中。—生物学研究と社会をつなぐ多様なカタチ

Scientists × Communicators: Now Connecting—Diverse Ways to Link Biological Research and Society

オーガナイザー：小島 響子（名古屋大学）、岩見 真吾（名古屋大学）

本企画では、「サイエンスコミュニケーションにおける多様な媒体を用いたアプローチや、生物学研究と社会をつなぐ取り組みの課題・展望」にフォーカスします。研究者と科学コミュニケーターがどのように協働し、社会と生物学研究のあいだに橋を架けていくかを、聴講者とともにオープンコミュニケーションを通じて多角的に探ります。テレビ・新聞・教育・ビジュアライゼーションなどの多様なアプローチ、立場において、科学発信の最前線に立つ登壇者をお招きし、現場で直面するリアルな課題や実践知、そしてその向こうにある可能性を共有します。科学コミュニケーションとは何なのか、またその専門性はどのように定義され得るのかという根本的な問いに立ち返り、いま求められる「伝える力」や「つながる工夫」について掘り下げながら、生物学研究と社会を結ぶ連携のこれからについて考えていきます。

虫の会—まじめ版—12 分子生物学と昆虫学の“この指とまれ”

12th Insect meeting “Unions of Molecular Biologists and Entomologist”

オーガナイザー：横井 翔（農研機構）、仲里 猛留（製品評価技術基盤機構）

昆虫は地球上で最も多様な種である。そのため、昆虫特有、それぞれの昆虫種特有の興味深い現象が多数確認されている。このような昆虫の現象は長年研究されてきたが、分子生物学的手法やシーケンサーの発達によって、これらの現象について、遺伝子、分子レベルで解明することが可能になってきた。本セッションでは、昆虫の面白い現象を研究している若手研究者に発表してもらい、分子生物学会員と一緒に議論することで、新しい研究展開ができることを期待したい。

真核生物のユニークな分子たち ～ Beyond CRISPR-Cas ～

Eukaryotic Unique Molecules “Beyond CRISPR-Cas”

オーガナイザー：齋藤 諒（理化学研究所）

原核生物の獲得免疫機構 CRISPR-Cas を用いたゲノム編集技術は社会に大きな変革をもたらした。2013 年に Cas9 のヒトゲノム編集への応用が示されてからここ 13 年の間に、次々と新しい CRISPR システムが報告され、さらには進化的に異なる RNA 誘導性システムさえも原核生物より同定されてきた。一方で、真核生物ではそのゲノムの複雑性ゆえに系統的な生物システムの探索はほとんど行われていない。本フォーラムでは真核生物のユニークな分子と生命現象に焦点を当てる。ゲノム編集・RNA 編集・転写調節ツールへの応用を“匂わせる”ものについて第一人者の先生からご紹介いただき、カビや寄生虫、さらには昆虫の持つユニークな分子と生命現象を参加者皆が賞味できる場となることを期待する。将来、真核生物から CRISPR-Cas ゲノム編集を超える技術に改変できるようなシステムは見つかるだろうか？

若手生物学者による異分野研究交流

Interdisciplinary summit for young biology researchers

オーガナイザー：明果瑠—安岡 いるま（大阪国際がんセンター研究所）、青木 遼太（東京大学）

本フォーラムは、分野横断的な学術研究に焦点を当てる。具体的には、異分野から着想を得て打ち出された研究について議論し、最新の知見や技術を共有することで、研究分野の更なる発展と新学術領域の創出を目指す。研究アプローチが多様化する昨今、興味対象や目的が本質的に同じであっても、材料や手法が異なるだけで異分野として隔てられ、閉鎖的な議論を余儀なくされる場合がある。次代を担う若手研究者には、独創的で意義のある研究課題を創出・遂行する能力が必須であり、一元的な知識体系や分野だけでは十分に研究を展開できない可能性がある。このような諦観的な現状に一石を投じるべく、国内有数の大会規模と研究分野の多様性を誇る日本分子生物学会年会を通じて、学際的な研究課題について横断的に議論し、新学術領域を独創する端緒を開きたい。

クライオ電顕ネットワーク・ユーザーグループミーティング

Cryo-electron microscopy network user group meeting

協賛：AMED-BINDS

オーガナイザー：阿部 一啓（北海道大学）、寿野 良二（関西医科大学）

クライオ電子顕微鏡解析技術の目覚ましい進歩によって、構造生物学は大きな発展を遂げた。今やクライオ電子顕微鏡装置は世界中に導入され、日々新しいタンパク質の立体構造が解き明かされている。さらに細胞や組織内のタンパク質をそのまま構造解析する in situ 構造解析の発展も期待されている。日本国内では、クライオ電子顕微鏡解析を支援するため、AMED 生命科学・創薬研究支援基盤事業（BINDS）の支援システム“クライオ電顕ネットワーク”が存在し、国内に整備されたクライオ電子顕微鏡装置を利用できる環境が整っている。これによって、これまでタンパク質の構造解析を行ったことのない研究者であっても、クライオ電子顕微鏡を用いた構造解析に取り組むことができる。本フォーラムでは、既存ユーザーや今後利用を考えている研究者へ最先端の取り組みを紹介するだけでなく、アンケートを通して、また会場においても、ユーザーグループ、クライオ電顕施設側への要望や幅白い意見を取り入れる場を設け、日本のクライオ電子顕微鏡を取り巻く現状について多角的な議論を行う。

化学視点からのアミロイド研究の新戦略

New Strategies for Amyloid Research from a Chemical Perspective

オーガナイザー：末武 勲（神戸女子大学）、北條 裕信（大阪大学）

アミロイド病はアルツハイマー病をはじめとする神経変性疾患と深く関わっており、その発症機構の解明は重要な課題である。本フォーラムでは、アミロイド線維形成における分子レベルでの病態理解に向けた最新の研究成果を紹介する。具体的には、天然物による線維化抑制作用の評価（末武）、化学合成を用いた翻訳後修飾がタンパク質凝集に及ぼす影響に関する検討をおこなった結果（北條）、さらに *de novo* ペプチドによる標的特異的相分離制御（池之上）について紹介する。また、量子ビームを用いたアミロイド線維の毒性の強さと原子・分子レベルにおける構造動態の相関解析（松尾）、疾患の病態生理を作り出す最新の *in vivo* 研究（松本）についても紹介する。これらの研究は、アミロイド病の根本的理解および治療戦略の確立に資することが期待され、多くの研究者と活発な議論ができることが期待される。

いま臨むゲノムの景色：「和」の心と匠の技

Approaching the Genomic Horizon: The Heart of Wa and the Skill of Takumi

オーガナイザー：工樂 樹洋（国立遺伝学研究所）、白澤 健太（かずさ DNA 研究所）

高精度ロングリードシーケンズの普及は、ヒトや実験生物だけでなく、日本を象徴する野外の多様な生物種の全ゲノム情報解読をも可能にしつつある。しかし、それを達成するためには単なる DNA の扱いだけではなく、タンパク質との複合体としてのクロマチンやそれを納める核や細胞についての理解や技術、そして配列情報を正しく解釈するスキルが欠かせない。本フォーラムでは、世界で加速する生物多様性ゲノミクスの流れを汲んで、それに資する分子生物学・細胞生物学に基づく技術や解析手法について、とくに「どこにも書かれていないノウハウ」に光を当てて議論する。

ゲノム合成と倫理—基礎研究における社会との対話の可能性を探る—

Genome Synthesis and Ethics: Exploring the Possibility of Dialogue with Society in Basic Research

協賛：JST-RISTEX「ゲノム倫理」研究会

オーガナイザー：田川 陽一（東京科学大学）、見上 公一（慶應義塾大学）

科学が社会との対話を進め、良好な関係を築くことが求められるようになって久しい。生命科学でもゲノム科学や幹細胞研究などを中心として、そのような対話の活動が積極的に進められてきた。しかし、医療や食品などの形で人々の生活に直接影響を与えることを目指した応用研究に比べると、基礎研究の場合はその意義を社会に理解してもらうことのハードルは高い。それでも、そのような活動を行なう必要性は年々高まっている状況がある。そこで、本フォーラムでは、JST CREST「ゲノム合成」領域と JST RISTEX「ゲノム倫理」研究会が連携して行ってきた、研究の倫理的・法的・社会的側面（ELSI）の論点の抽出および社会との対話の取り組みについて、その中心にいた研究者の視点から振り返る。実際の経験を通じた気づきだけでなく、その過程で抱いた楽しさや不安、不満なども併せて共有することで、今後より多くの研究者が社会との対話に一步踏みだすための後押しをしたい。

第 48 回日本分子生物学会年会 宿泊申込のご案内

このたび「第 48 回日本分子生物学会年会」開催にあたり、ご参加される皆様方の便宜をおはかりするため、宿泊のお手伝いをさせていただくこととなりました。厚く御礼申し上げます。

つきましては、下記ご参照の上 **宿泊受付ホームページ** からお申込みをお願いいたします。

学会専用宿泊受付ホームページアドレス
<https://amarys-jtb.jp/mbsj2025/>

1. 宿泊期間 : 令和 7 年 1 2 月 2 日 (火) チェックイン ～ 1 2 月 6 日 (土) チェックアウト

2. 宿泊料金 : 1 泊朝食付税金サービス料込 のお一人様料金です。

3. お申込み方法 : 上記ホームページよりお申込みください。

※個人情報保護の観点、授受の抜け漏れを防ぐため、

F A X でのお申し込みはお受けしておりません。

ご理解のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

4. お支払い方法 : 上記ホームページをご参照ください。

5. 申込み締切日 : **令和 7 年 1 1 月 1 7 日 (月)**

6. 宿泊取消料 : 宿泊日・人員の変更の際にも発生します。**詳しくはホームページをご確認ください。**

取消日		取消料
旅行開始日の 前日から起算して さかのぼって	① 21 日目にあたる日以前の解除	無料
	② 20 日目にあたる日以降の解除 (3～6 を除く)	旅行代金の 2 0 %
	③ 7 日目にあたる日以降の解除 (4～6 を除く)	旅行代金の 3 0 %
	④ 旅行開始日前日の解除 (5～6 を除く)	旅行代金の 4 0 %
	⑤ 当日の解除 (6 を除く)	旅行代金の 5 0 %
	⑥ 旅行開始後の解除または無連絡不参加	旅行代金の 1 0 0 %

※お申し込みの際は学会専用宿泊受付ホームページのご旅行条件を必ずご確認くださいませようをお願いいたします。

7. お問い合わせ : 株式会社 J T B 西日本 M I C E 事業部

「第 48 回日本分子生物学会年会」宿泊受付デスク 担当 : 菊池・松本

〒541-0056 大阪中央区久太郎町 2-1-25 JT B ビル 6 階

MAIL : westec_op3@jtb.com

TEL : 06-6210-5405

営業時間 : 09:30～17:30 (土・日・祝日は休業)

【宿泊ホテルリスト】

	宿泊施設名	タイプ	お一人あたり宿泊代金 1泊朝食付税金サービス料込		備考・アクセス
			12/2,3,4	12/5	
①	ヨコハマ グランド インターコンチネンタル ホテル	禁煙プレミアムルーム ツイン2名1室利用	17,600	18,700	全室禁煙となります。 みなとみらい線 みなとみらい駅→徒歩約5分
		禁煙プレミアムルーム ツイン1名利用	29,700	31,900	
②	アパホテル<横浜ベイタワー>	禁煙シングル	12,100		全室禁煙となります。 みなとみらい線 馬車道駅4番国橋出口→徒歩約3分
③	ナビオス横浜	禁煙シングル	13,200	-	みなとみらい線 馬車道駅4番出口→徒歩約3分
④	横浜ベイホテル東急	禁煙ツイン2名1室利用	17,600	19,800	みなとみらい駅Queenモール出口→徒歩 約1分
		禁煙ツイン1名利用	29,700	33,000	
⑤	横浜東急 R E I ホテル	禁煙ツイン1名利用	19,800	24,200	全室禁煙となります。 みなとみらい線 みなとみらい駅→徒歩約10分
⑥	ニューオータニ 横浜プレミアム		12/2	12/3	全室禁煙となります。 JR 桜木町駅下車→徒歩約1分
		禁煙ツイン1名利用	15,950	18,700	
		禁煙ダブル1名利用	14,850	17,600	

空室状況は学会専用ホームページ（ <https://amarys-jtb.jp/mbsj2025/> ）にてご確認ください。

■ その他のホテルにつきましては、下記 Q R コードなどからもお申込みいただけます。

J T B 宿泊サイトの個人旅行プラン

こちらのリンクでは、横浜市内中心部にあるホテルの

- ・2025 年 12 月 2 日チェックイン～12 月 5 日チェックアウトの3泊分
- ・朝食付1名1室利用

の合計金額が表示されています。

『条件を変更して再検索する』の枠内を変更いただくと日程変更が可能です。



JTB 予約確認 ② よくある質問・お問い合わせ ③ 電話予約 ④ リモート相談・予約 ⑤ 店舗検索・来店予約 ⑥ 会員サービス

海外旅行 国内旅行 高級旅館・ホテル 遊び・レジャー テーマから探す旅行 旅行関連サービス

「JTBホーム」> ホテル・旅館・宿 > 関東圏 > 神奈川県 > 横浜・川崎 > 横浜・中華街・みなとみらいのホテル・旅館・宿

基本条件を変更して、再検索する

宿泊地・キーワード 横浜・中華街・みなとみらい 宿泊日・日数 2025/12/02～3泊 部屋数・人数 1部屋 / おとな1名、こども0名

Q 検索する

別のエリアを追加する

レンタカーもあわせて検索する

横浜・中華街・みなとみらいのホテル・旅館・宿（神奈川県） 宿泊予約

詳細エリアに絞り込む

横浜駅周辺(4) | 山下公園～中華街(5) | 桜木町(11) | 伊勢佐木町・関内(4) | みなとみらい(8) | 元町～山手(神奈川)(9)

地図を表示する 32件のうち、1～20件を表示 表示件数 20件 料金カレンダー

【特定非営利活動法人 日本分子生物学会 倫理要綱】

日本分子生物学会は、分子生物学に関する研究・教育を推進するための学術研究及び普及啓発活動を行い、我が国におけるライフサイエンスの進歩に寄与することを目的としている。会員は、「真理の探究」を常に誠実に行うとともに、研究活動が社会からの信頼と負託を前提としていること、また科学者自身が自律的に行動して初めて自由な研究と科学の独立性を保つことが可能になるということを深く認識し、研究活動に関して守るべき「研究モラルとルール」（研究倫理と規範）について習熟することが強く求められる。ここで言う「研究モラルとルール」とは、真実に少しでも近づくために人類が編み出してきた科学的方法論を運用する上でのきまりごとである。このきまりごとを遵守してはじめて、科学者は研究結果の妥当性について論じることが可能となる。以下に指針を示す。

1. 社会的責任

会員は自らの専門知識・能力の維持向上に努め、自らが携わる研究の意義と役割を社会に向けて誠実に説明し、科学的に正確な知識の普及に努める。

2. 公正な研究活動

会員は自らの研究の立案・計画・申請・実施・報告などのすべての過程において誠実に行動する。科学者は研究成果を論文などで公表することで、各自が果たした役割に応じて功績の認知を得るとともに責任を負う。研究・調査データの記録保存や厳正な取扱いを徹底し、ねつ造、改ざん、盗用などの不正行為に加担しないことはもちろん、これらの行為の呼び水となるようなずさんな研究行為も排除する。

また、責任ある研究の実施と不正行為の防止を可能にする公正な環境の確立・維持も自らの重要な責務であることを自覚し、科学者コミュニティ及び自らの所属組織の研究環境の質的向上、ならびに不正行為抑止の教育啓発に真摯かつ継続的に取り組む。また、これを達成するために社会の理解と協力が得られるよう努める。

研究の実施、研究費の使用等にあたっては、法令や関係規則を遵守する。

3. 差別とハラスメントの禁止

会員は、性別、年齢、人種、国籍、所属などの属性、あるいは障害、宗教、個人情報に基づく差別を含む一切の不適切な行為を容認せず、それらの行為に断固として反対する。また、すべての研究・教育・学会活動におけるハラスメントを禁止し、責任ある行動を通じてハラスメントが発生しない環境づくりに努める。

4. 科学的公平性

会員は、研究・教育・学会活動において科学的方法に基づき公平な対応をする。他者の知的成果などの業績を正に評価し、名誉や知的財産権を尊重する。

5. 利益相反

会員は、自らの研究、審査、評価、判断、科学的助言などにおいて、個人と組織、あるいは異なる組織間の利益の衝突に十分に注意を払い、公共性に配慮しつつ適切に対応する。

2016年12月6日から2017年1月6日において実施した、第19期・第20期の持回り理事会にて、上記を日本分子生物学会倫理要綱と定める。

附則

この要綱は、2017年1月10日から施行する。

付記1. 2024年3月14日から4月4日において実施した第23期の持回り理事会にて項目3.を追加

会員専用ページのご利用について

個人会員（正会員・学生会員・次世代教育会員・シニア会員）各位は、学会ホームページ上に設けている「会員専用ページ」をご利用いただけます。こちらの「会員専用ページ」では、登録情報の確認・変更のほか、第38回（2015年）年会以降の要旨閲覧や年度会費のクレジット決済、会員検索などが可能です。登録情報が最新でない場合、学会からの郵送物がお手元に届かなくなるなど、ご不便をお掛けする可能性があります。長期間アクセスされていない方は、「会員専用ページ」へアクセスしていただき、現在の登録情報をご確認くださいようお願いいたします。

ログインIDは数字6桁の会員番号です。ログインパスワードがご不明の場合は、ログイン画面よりオンラインで再設定いただけます。個人情報の保護を考慮し、現在登録されているパスワードはお答えできませんのでご了承ください。

また、年会の企画公募や演題投稿など学会からの重要なお知らせは、「会員専用ページ」にご登録いただい

ているメールアドレス宛に随時メール配信させていただいております。メールアドレスを登録されていない方は、「会員専用ページ」よりご登録いただくか、学会ホームページより登録情報変更届をダウンロードいただき、メールアドレスをご記入の上、学会事務局までご送付くださいますようお願いいたします。

※パスワードの再設定には、「会員番号」と「会員専用ページに登録されているメールアドレス」が必要となります。登録されているメールアドレスが不明または受信不可の場合は、オフラインでの手続きとなります。学会ホームページより所定の再発行申請書をダウンロードし、必要事項をご記入の上、学会事務局へご提出ください。新パスワードは数日中に郵送いたします。

※「会員番号」は、年度会費請求書に印字されております。お手元に学会からの郵送物がなくご確認いただけない場合は、学会事務局までお問合せください。

【会員専用ページの機能】

登録情報確認・変更	学会に登録されている本人情報を確認・変更できます。
公開情報設定	会員検索で公開する本人情報の項目を設定できます。 ※名前・会員番号・会員種別は、非公開の設定ができません。
会費納入状況の確認 クレジット決済	会費納入状況を確認できます。また、未納会費のクレジット決済・領収証の発行が可能です。 ※学会よりお送りする年度会費請求書（払込取扱票）によるお支払いは、オンライン領収証発行の対象ではありません。お支払いの際に発行される受領証が正式な領収証となりますので、大切に保管してください。
パスワード変更	会員専用ページにアクセスするためのパスワードを変更できます。
会員検索・閲覧	学会に所属している会員の検索ができます。 ※会員が「非公開」設定にしている項目は、検索・閲覧できません。
年会アーカイブ	第38回～第47回（2015～2024年）年会の要旨検索・閲覧ができます。 ※現在、年会アーカイブサイト（アトラス社）のリニューアル作業が行われています。完了後には第47回年会の演題検索と「第39回年会以降の演題検索」との間で横断検索ができるようになる見込みです。

会員種別の変更について

本学会では個人会員として4つの会員種別を設けております。

会員種別	入会金	年会費	備考
正会員	1,000 円	6,500 円	
学生会員	1,000 円	3,000 円	学生の方
次世代教育会員	1,000 円	6,500 円	小・中・高等学校の教員またはこれに準ずる方。 所属機関の登録必須
シニア会員	—	3,000 円	65 歳以上の常勤職に就いていない会員歴通算 20 年以上の方

会員種別の変更は、学生会員から正会員への変更のみ「会員専用ページ」より随時お手続きが可能です。

正会員から学生会員への変更および、次世代教育会員・シニア会員への変更については、オフラインでの手続きとなります。学会ホームページより各書式（登録情報変更届またはシニア会員申請）をダウンロードし、必要事項をご記入の上、学会事務局へご提出ください。

	オンライン手続き (会員専用ページ)	オフライン手続き
学生会員 → 正会員	○	○：登録情報変更届
正会員 → 学生会員	×	○：登録情報変更届 (学生証のコピーもしくは在学証明書を添付)
学生会員 / 正会員 → 次世代教育会員	×	○：登録情報変更届
正会員 → シニア会員	×	○：シニア会員申請書

◆次世代教育会員

次世代教育会員は、小・中・高等学校の教員またはこれに準ずる方を対象としています。高等専門学校の教員の方も対象に含まれます。

- 1) 新規入会の際には入会金 1,000 円を申し受けます。
- 2) 年会費は正会員と同額です。
- 3) 年会に無料で参加できます。
- 4) 年会で一般演題の発表ができます。
- 5) 学会誌「Genes to Cells」を無料で閲覧できます。
- 6) 総会での議決権があります。
- 7) 理事選挙の選挙権と被選挙権があります。

※正会員／学生会員として年会事前登録を完了した後に
次世代教育会員／シニア会員へ変更した場合、年会参加費の返金はありません。

◆シニア会員

以下の条件に該当する正会員は、ご本人による申請が受理された次年度よりシニア会員となります。

◎シニア会員の条件

- 1) 申請の時点で 65 歳以上かつ会員歴通算 20 年以上の正会員であること
- 2) 常勤職に就いていないこと
- 3) 申請する年度までの会費が完納されていること

◎シニア会員になると

- 1) 年会費が 3,000 円となります。
- 2) 年会に無料で参加できます（発表はできません）。
- 3) 学会誌「Genes to Cells」を引き続き無料で閲覧できます。
- 4) 総会での議決権は継続されます。
- 5) 理事選挙の選挙権も継続されます。

休会制度のご案内

海外留学（ポスドクを含む）や出産・育児等を理由に学会活動を一定のあいだ休止される正会員・学生会員を対象として休会制度を設置しております。休会期間中は、年度会費が免除となります。

休会をご希望の場合は、学会ホームページより所定の休会届をダウンロードし、必要事項をご記入の上、学会事務局へご提出ください。

◎休会期間

学会の会計年度に合わせ、休会期間は年度単位（10月1日～翌年9月30日）とし、申請した次年度から最長で3年度まで適用することが可能です。

◎休会の条件

- 1) 正会員あるいは学生会員であること
- 2) 申請する年度までの会費が完納されていること

◎休会中は、以下の会員資格が停止されます。

- 1) 会報・年会プログラム集、会員メールの受取
- 2) ・正会員の場合は、総会での議決権、ならびに理事選挙の選挙権と被選挙権
・学生会員の場合は、理事選挙の選挙権
- 3) 会員区分での年会参加
- 4) 年会における一般演題の発表

休会を解消して復会する場合は、学会事務局にその旨を連絡の上、復会を希望する当該年度の会費を納入いただくこととなります。年会事前参加登録・一般演題投稿を行う場合には、手続きを行う時点で復会手続きが完了されていることが必要です。

学会誌『Genes to Cells』編集室よりお知らせ

日本分子生物学会学会誌『Genes to Cells』編集室より、以下の通りお知らせいたします。

① オンライン査読サイト（査読者・編集者用）の更新について

2025年4月22日に、当誌のオンライン査読サイトが、モダンでシンプルなデザインのものに移行しました。操作マニュアルや注意事項を集約した特設ページをご用意しておりますので、ぜひご覧ください（https://www.mbsj.jp/gtc/new_submission_system.html）。こちらのQRコードからもアクセスしていただけます。



システムの不具合や予期せぬ不備によりご不便をおかけする可能性がございますが、問題の解消に向け迅速に対応してまいりますので、何卒ご理解を賜りますようお願い申し上げます。ご不明点やお気づきの点がございましたら、編集室 office@genestocells.jp までご遠慮なくお知らせください。

なお、著者の皆様がアクセスするサイトにつきましては、すでに2024年8月に新システムへ移行済みであり、今回の査読システムの更新による影響はございません。ご投稿の際は、同特設ページ内の「オンライン投稿サイト」および「操作マニュアル」へのリンクをご利用ください。

② 2025年第1号から年6回発行の continuous publication に移行しました

昨年まで Genes to Cells は、紙媒体廃止後も従来と同じワークフローでの制作を続けておりました。すなわち、各号は、その掲載論文のラインナップが確定した後に正式に出版される形を採っておりました。校了し、出版準備が整った論文は、まず「Early View」としてオンライン先行出版されておりましたが、正式な出版（収載号の出版）まではしばらくお待ちいただく必要がありました。

2025年第1号より、当誌は年6号発行の新しい出版方式「Continuous publication」へと移行しました（下図）。各号はラインナップが未確定の状態「オープン」となり、校了した論文はオープン中の号に順次収載され、即座に正式出版される仕組みとなっています。この変更により、ゲラ校正が円滑に進んだ場合には、アクセプトから1～2週間での正式出版が可能となりました。

スピード感を一層高めた Genes to Cells の発行体制に、どうぞご期待ください。

③ その他のお知らせ

当誌 Genes to Cells での通常の出版は無料です（正式出版後半年間のアクセスは有料）が、別途掲載料（APC）をお支払いいただくことで、即時オープンアクセスとすることが可能です。そして APC には各種割引がございます。『Genes to Cells でおトクに出版』をぜひご参照ください。

今後とも Genes to Cells をよろしくお願い申し上げます。

Genes to Cells 編集室
マネージングエディター
湯浅 達朗
office@genestocells.jp





Genes to Cellsで おトクに出版



費用をかけずに
論文を出したい

Genes to Cellsでの論文出版は
原則として**無料**です！

このとき、最初の6ヶ月間は有償アクセス※1
ですが、その後は無償公開されます！

※1：論文が掲載された号の出版日から起算し6ヶ月間。
なお、分子生物学会員は無償アクセス可能です。
手続方法は右の二次元コードからご確認ください。



即時オープンアクセス
(OA) で出版する必要
がある

Hybrid Journalなので、**即時のOAも選択可能**です。
この場合、**APC（掲載料）**※2 をお支払いいただく
必要がありますが、各種割引があります。
下のフローチャートを参照してください。

※2：3,800米ドル（2025年5月現在）

APC（掲載料）割引 フローチャート

お気軽にお問い合わせください
Genes to Cells編集室
office@genestocells.jp

責任著者の所属機関が
Wiley社と転換契約を
結んでいる ※3

Yes

大幅な割引が適用されます。

手続き方法の詳細・自己負担額は、
所属機関にご確認ください。

No

著者のうち1人以上が
分子生物学会の会員

Yes

会員割引 ※4 が利用可能です。
アクセプト後に、会員氏名と
会員番号を編集室へお知らせ
ください。
折り返し、クーポンコードを
お知らせします。

未入会の方は、通常の出版手続きを
優先して行い、入会手続き完了後に
OAの申し込みをしてください。

No

この機会に
分子生物学会への入会を
ご検討ください

入会后

※3：最新のリストは、右の二次元コードからご確認
いただけます。

※4：3,800米ドル→3,000米ドルへ割引されます。
（2025年5月現在）



割引の併用はできません。

学術賞、研究助成の本学会推薦について

本学会に推薦依頼あるいは案内のある学術賞、研究助成は、本号に一覧として掲載しております。そのうち、応募にあたり学会等の推薦が必要なものについての本学会からの推薦は、賞推薦委員会または研究助成選考委員会の審査に従って行います。応募希望の方は、直接助成先に問い合わせ、申請書類を各自お取寄せのうえ、ふるってご応募下さい。

本学会への推薦依頼の手続きは次の通りです。

1. 提出物

- 1) 本申請に必要な書類（オリジナルおよび募集要項に記載されている部数のコピー）
- 2) 本学会の選考委員会審査用に、上記申請書類のコピー 1 部
- 3) 論文（別刷は各種財団等応募先の必要部数をご用意下さい。委員会用の論文は不要です）
- 4) 上記 1) 2) 3) の送付とは別に、学会用控として申請書の電子データ（論文は不要）を学会事務局〈info@mbsj.jp〉まで送信して下さい。
電子データは Word、PDF ファイルのいずれでも結構です。
*必ず学会の締切日までに郵送資料と電子データの両方が到着するようにご手配下さい。

2. 提出先

※賞推薦についての送付先

日本分子生物学会・賞推薦委員長 高橋 淑子
〒102-0072 千代田区飯田橋 2-11-5
人材開発ビル 4 階
日本分子生物学会事務局気付

※研究助成についての送付先

日本分子生物学会・研究助成選考委員長 塩見美喜子
〒102-0072 千代田区飯田橋 2-11-5
人材開発ビル 4 階
日本分子生物学会事務局気付

3. 提出期限

財団等の締切りの 1 カ月前まで。提出期限後に受取った場合や、提出書類が不備な場合は、選考の対象にならないことがあります。推薦手続きのことでご不明な点がございましたら、学会事務局までお問い合わせ下さい。

※研究助成（学会推薦）に関する留意事項

学会推薦した会員が財団等の研究助成対象者となった場合には、その研究成果を将来、学会誌「Genes to Cells」に論文あるいは総説として発表して頂くように要請いたします。

応募に際しては、その旨をご了解くださるようお願いいたします。

※各種学術賞（学会推薦）に関する留意事項

- 委員会の内規により、外部財団等の各種学術賞への推薦は、原則として一人につき年度あたり 1 件となっておりますので、ご了解ください。
（本学会の事業年度は 10 月 1 日から翌年 9 月 30 日までです）
- 重複申請があった場合、すでにある賞等の推薦が決定されている候補者は、それ以降審査する他の賞等の推薦候補者として原則的に考慮いたしません。応募に際し、ご留意くださるようお願いいたします。

学術賞、研究助成一覧

名 称	連 絡 先	件 数	締 切	助成内容等	概 要
第 56 回三菱財団 自然科学研究助成	(公財)三菱財団 〒 100-0005 千代田区丸の内 2-3-1 三菱商事ビルディング 21F TEL：(03) 3214-5754	総額 4 億 2,000 万円	2025 年 2 月 3 日	1 件当たり 2,000 万円まで 1 件一律 400 万円 (若手)	自然科学のすべての分野にかかわる独創的かつ先駆的研究を支援。「一般助成」に加え、若手研究者を対象とした「若手助成」も実施。
山田科学振興財団 2025 年度研究援助	(公財)山田科学振興財団 〒 544-8666 大阪市生野区巽西 1-8-1 TEL：(06) 6758-3745	18 件程度、女性研究者 3 名以上を採択予定 (本学会の推薦枠は 6 件)	2025 年 2 月 28 日	1 件当たり 150～300 万円、 総額 4,000 万円	自然科学の基礎的研究に対する研究費援助。 研究援助趣旨： 1) 萌芽的・独創的研究 2) 新規研究グループで実施される研究 3) 学際性、国際性の観点からみて優れた研究
山田科学振興財団 国際学術集会（山田コンファレンス・山田シンポジウム）開催援助 (2027 年開催)		1 件	2024 年 4 月 1 日～ 2025 年 2 月 28 日 (募集期間)	最大 800 万円	以下の要件を満たす学術集会を山田コンファレンスもしくは山田シンポジウムと称し、これらの開催を援助する。 ①基礎科学の適切なテーマについて、国際的視野で最高レベルの研究の現状を総括する。 ②基礎科学研究者の世代間の対話によって、若い世代の研究発展の基礎を構築する。
第 41 回国際生物学賞	国際生物学賞委員会事務局 〒 102-0083 千代田区麹町 5-3-1 麹町ビジネスセンター 日本学術振興会内 TEL：(03) 3263-1872/1869	1 件 (1 件)	2025 年 3 月 14 日	賞状、賞牌、 1,000 万円	生物学の研究において世界的に優れた業績を挙げ、世界の学術進歩に大きな貢献をした研究者。授賞分野は、国際生物学賞委員会が毎年決定する。第 41 回の授賞分野は「神経生物学 (Neurobiology)」。
2025 年度 持田記念学術賞	(公財)持田記念医学薬学振興財団 〒 160-0003 新宿区四谷本塩町 3-1 四谷ワイズビル TEL：(03) 3357-1282	2 件以内 (1 件)	2025 年 5 月 12 日	1 件 1,000 万円	学術賞は次の 6 項目の研究分野で、研究の進歩発展のため顕著な功績のあった研究者に贈呈。 (1)バイオ技術を基盤とする先端医療に関する研究 (2)バイオ技術を基盤とするゲノム機能 / 病態解析に関する研究 (3)免疫 / アレルギー / 炎症 / 感染症の治療ならびに制御に関する研究 (4)循環器 / 血液疾患の病態解析 / 治療制御に関する研究 (5)創薬・創剤の基盤に関する研究 (6)創薬とその臨床応用に関する研究
2025 年度 研究助成		総額 3 億円 100 件	2025 年 5 月 7 日	1 件 300 万円	
2025 年度留学補助金		総額 1,000 万円 20 件	2025 年 5 月 14 日	1 件 50 万円	
2026 年度笹川科学研究助成	(公財)日本科学協会 〒 107-0052 港区赤坂 1-2-2 日本財団ビル 5F TEL：(03) 6229-5365	生物系で156件 (2024年度実績)	募集期間 2025 年 * 9 月 17 日～ 10 月 15 日	1 件当たり 150 万円まで	人文・社会科学および自然科学（医学を除く）の独創性・萌芽性をもつ研究に関するもの。4 月 1 日現在、35 歳以下の若手研究者へ助成。
上 原 賞	(公財)上原記念生命科学財団 〒 171-0033 豊島区高田 3-26-3 TEL：(03) 3985-3500	2 件以内 (1 件)	2025 年 * 9 月 4 日	金牌、 3,000 万円	生命科学の東洋医学、体力医学、社会医学、栄養学、薬学一般および基礎医学、臨床医学、生命科学と他分野との融合領域で顕著な業績を挙げ、引き続き活躍中の研究者。 「推薦書は上原財団webシステムにあり、事前に分生事務局へ連絡要。」
第 42 回井上学術賞	(公財)井上科学振興財団 〒 150-0036 渋谷区南平台町 15-15 南平台今井ビル 601 TEL：(03) 3477-2738	5 件以内 (2 件)	2025 年 9 月 18 日	賞状、金メダル、 200 万円	自然科学の基礎的研究で特に顕著な業績を挙げた者（ただし締切日現在、50 歳未満の者）。
第 42 回井上研究奨励賞		40 件	2025 年 9 月 18 日	賞状及び銅メダル、 50 万円	過去 3 年間に、理学・工学・医学・薬学・農学等の自然科学の基礎的研究において、新しい領域を開拓する可能性のある優れた博士論文を提出し博士の学位を取得した研究者で、37 歳未満の者。
第 18 回井上リサーチアワード		4 名以内 (うち 1 名以上女性研究者)	2025 年 7 月 31 日	1 人当たり 500 万円	開拓的發展を目指す若手研究者の独創性と自立を支援する目的で、研究を助成。研究期間は 2 年。

名 称	連 絡 先	件 数	締 切	助成内容等	概 要
第 34 回木原記念財団 学術賞	(公財)木原記念横浜生命科学 振興財団 〒 230-0045 横浜市鶴見区末広町 1-6 横浜バイオ産業センター TEL：(045) 502-4810	1 件 (1 件)	2025 年 * 9 月 30 日	賞状、 200 万円	生命科学の分野で優れた独創的 研究を行っている国内の研究者 であり、今後のさらなる発展が 大きく期待できる者。原則とし て締切日現在 50 歳以下を対象と する。
第 9 回バイオ インダストリー大賞	(一財)バイオインダストリー協会 〒 100-0005 千代田区丸の内 1-7-12 サピアタワー 8F TEL：(03) 6665-7950	1 件	2025 年 5 月 5 日	賞状、賞牌、 副賞 300 万円	バイオサイエンス、バイオテク ノロジーおよびバイオインダス トリーの分野の発展に大きく貢 献した、または今後の発展に大 きく貢献すると期待される業績 を上げた個人、少人数のグルー プまたは組織に授与される。
第 9 回バイオ インダストリー奨励賞		10 件程度	2025 年 5 月 5 日	賞状および 副賞 30 万円	バイオサイエンス、バイオテク ノロジーに関連する応用を指向 した研究で、 ・医薬・ヘルスケア ・食品・農林水産 ・バイオプロセス開発 ・化学・材料、環境・エネルギー などの分野で産業を生み出す研 究であり、これらの分野に携わ る有望な若手研究者を対象とす る。年齢 45 歳未満。
住友財団 2025 年度 基礎科学研究助成	(公財)住友財団 〒 105-0012 港区芝大門 1-12-6 住友芝大門ビル 2 号館 3F TEL：(03) 5473-0161	総額 2 億円 40 件程度	2025 年 6 月 30 日	1 件当たり 500 万 円まで	数学、物理、化学、生物学及び これらの複合分野並びに工学の 基礎分野における萌芽的研究。 45 歳以下。
住友財団 2025 年度 環境研究助成		総額 1 億円 一般研究 40 件、 課題研究 3 件 程度	2025 年 6 月 30 日	1 件当たり 最大 500 万円 (一般)、 最大 1,000 万円 (課題)	一般研究は環境に関する研究(分 野は問いません)。
第 67 回藤原賞	(公財)藤原科学財団 〒 104-0061 中央区銀座 3-7-12 TEL：(03) 3561-7736	2 件 (推薦件数に制 限なし)	2025 年 * 12 月 15 日	賞状、賞牌 (金メ ダル)、副賞 2,000 万円 (第 66 回)	推薦の対象は自然科学分野に属 するもの。わが国に国籍を有し、 科学技術の発展に卓越した貢献 をした者。
科学技術分野の 文部科学大臣表彰 科学技術賞および 若手科学者賞	文部科学省 研究振興局振興企画課奨励室 〒 100-8959 千代田区霞が関 3-2-2 TEL：(03) 5253-4111 (内線 4071)	科学技術賞 130 件程度のうち、 研究部門は 50 件程度 若手科学者賞 は 100 名程度 (学会推薦枠は定 まっていないが推 薦は若干名まで)	2025 年 * 7 月 22 日	表彰状及び副賞	科学技術賞研究部門は我が国の 科学技術の発展等に寄与する可 能性の高い独創的な研究又は発 明を行った個人又はグループを 表彰。 若手科学者賞は萌芽的な研究、 独創的視点に立った研究等、高 度な研究開発能力を示す顕著な 研究業績を挙げた 40 歳未満の若 手研究個人。
2025 年度島津賞	(公財)島津科学技術振興財団 〒 604-8445 京都市中京区 西ノ京徳大寺町 1 TEL：(075) 823-3240	1 件 (推薦件数に制 限なし)	2025 年 7 月 31 日	賞状、賞牌、 副賞 500 万円	科学技術、主として科学計測に 係る領域で、基礎的研究および 応用・実用化研究において、著 しい成果をあげた功労者を対象 とする。 [分子生物学会が学会推薦決定者 の推薦書類ファイルを島津財団 専用サイトに登録します。詳細 は学会事務局まで。]
2025 年度島津奨励賞		3 件以下 (推薦件数に制 限なし)	2025 年 7 月 31 日	賞状、トロフィー、 副賞 100 万円	科学技術、主として科学計測に 係る領域で、基礎的研究および 応用・実用化研究において独創 的成果をあげ、かつその研究の 発展が期待される国内研究機関 所属で 45 歳以下の研究者を表彰 する。 [分子生物学会が学会推薦決定者 の推薦書類ファイルを島津財団 専用サイトに登録します。詳細 は学会事務局まで。]
島津科学技術振興 財団研究開発助成		総額 2,300 万円	2025 年 7 月 31 日	1 件 100 万円	主として科学計測に係る領域全 般と毎年財団が定める科学技術 領域の「新分野」で独創的研究 対象。国内の研究機関に所属す る 45 歳以下の研究者。国籍不問。

名 称	連 絡 先	件 数	締 切	助成内容等	概 要
東レ科学技術賞	(公財)東レ科学振興会 〒103-0021 中央区日本橋本石町 3-3-16 (日本橋室町ビル) TEL：(03) 6262-1655	2 件以内 (2 件)	2025 年 10 月 10 日	1 件につき 賞状、金メダル、 500 万円	理学・工学・農学・薬学・医学（除・臨床医学）の分野で、学術上の業績顕著な者、学術上重要な発見をした者、効果が大きい重要な発明をした者、技術上の重要問題を解決し貢献が大きい者。
東レ科学技術研究助成		総額 1 億 3,000 万円 10 件程度 (2 件)	2025 年 10 月 10 日	特に定めず最大 3,000 万円程度 まで	今後の研究の成果が科学技術の進歩・発展に貢献するところが大きいと考えられる、独創的、萌芽的な研究を活発に行っている若手研究者（原則として 45 歳以下）。
ノバルティス研究 奨励金	(公財)ノバルティス科学振興財団 〒106-6333 港区虎ノ門 1-23-1 虎ノ門ヒルズ森タワー 31F TEL：(03) 6899-2100	約 35 件 指定機関から の推薦必要	2025 年* 9 月 12 日	1 件 100 万円	生物・生命科学、関連する化学および情報科学の領域における創造的な研究に対して助成。
第 57 回内藤記念科学 振興賞	(公財)内藤記念科学振興財団 〒113-0033 文京区本郷 3-42-6 南江堂ビル 8F TEL：(03) 3813-3861	1 件 (1 件)	2025 年 9 月 30 日	金メダル、 1000 万円	人類の健康の増進に寄与する自然科学の基礎的研究において、独創的テーマに取り組み、その進歩発展に顕著な功績を挙げた研究者。 ※応募（書類作成用）のための 本学会専用 URL が設定されま す。詳細は学会事務局まで。
ブレインサイエンス 財団研究助成	(公財)ブレインサイエンス振興 財団 〒104-0028 中央区八重洲 2-1-1 YANMAR TOKYO 6F TEL：(03) 3273-2565	17 件以内	2025 年* 10 月 10 日	1 件 80～100 万円	脳科学の広い分野における研究に対して助成を行うが、特に脳のメカニズムを解明する独創的な研究計画の助成に重点をおく。研究分野は実験研究のみならず、理論、モデリング研究も含む。
塚原伸晃記念賞		2 件以内		賞牌ならびに 副賞 100 万円	生命科学の分野において優れた独創的研究を行っている 50 歳以下の研究者。
海外派遣研究助成		若干件	2026 年* 1 月 9 日	1 件 30 万円まで	我が国における脳科学の研究の促進を図るため、国際学会、シンポジウム等への参加、あるいは短期間の研究者の海外派遣を助成。
海外研究者招聘助成		若干件		1 件 30 万円まで	脳科学研究分野において独創的テーマに意欲的に取り組んでいる外国人研究者の短期間の招聘を助成。
2025 年 コスモス国際賞	(公財)国際花と緑の博覧会記念 協会 〒538-0036 大阪市鶴見区緑地公園 2-136 TEL：(06) 6915-4513	1 件	2025 年 4 月 12 日	賞状、メダル、 副賞 4,000 万円	花と緑に象徴されるすべての生命現象に関し、地球的視点における生命体相互の関係性、統合の本質を解明しようとする研究や業績を対象とする。
2026 年度研究助成	(公財)長瀬科学技術振興財団 〒550-8668 大阪市西区新町 1-1-17 TEL：(06) 6535-2117	25 件程度	2025 年 10 月 31 日	1 件 250 万円	有機化学（材料化学を含む）及び生化学並びに関連分野における研究が助成対象。
第 22 回日本学術 振興会賞	(独)日本学術振興会 人材育成事業部 人材育成企画課 〒102-0083 千代田区麹町 5-3-1 麹町ビジネスセンター TEL：(03) 3263-0912	25 件程度 （機関長推薦 扱いとして 学会推薦枠 も若干件あ り）	2025 年 4 月 2 日～ 4 月 7 日 (受付日)	賞状、賞碑、 研究奨励金 110 万円	人文学、社会科学及び自然科学にわたる全分野が対象。博士の学位を取得しており、国内外の学術誌等に公表された論文、著書、その他の研究業績により学術上特に優れた成果を上げたと認められる研究者（45 歳未満）。
第 16 回日本学術 振興会有志賞		16 件程度 (2 名まで、※ ただし推薦が 男性のみの場 合は 1 名まで)	2025 年 5 月 22 日～ 5 月 27 日 (受付日)	賞状、賞碑、 学業奨励金 110 万円	我が国の学術研究の発展に寄与することが期待される優秀な大学院博士課程の学生を顕彰（34 歳未満）。
(一財)材料科学技術 振興財団 山崎貞一賞	(一財)材料科学技術振興財団 〒157-0067 世田谷区喜多見 1-18-6 TEL：(03) 3415-2200	各分野 1 件	2025 年 4 月 15 日	賞状、メダル、 賞金 300 万円	授賞対象は、「材料」、「半導体及びシステム・情報・エレクトロニクス」、「計測評価」、「バイオ・医科学」の 4 分野からなり、隔年で 2 分野ずつ募集が行われる。論文の発表、特許の取得、方法・技術の開発等を通じて、実用化につながる優れた業績をあげている者。

名 称	連 絡 先	件 数	締 切	助成内容等	概 要
令和 7 年度研究助成		30～35 件 総額 5,000 万円	2025 年 7 月 15 日	助成金総額 約 5,000 万円	光科学に関係する研究に対して 助成。対象課題有り。
令和 7 年度 晝馬輝夫 光科学賞	(公財)光科学技術研究振興財団 〒 430-0926 浜松市中央区砂山町 325-6 日本生命浜松駅前ビル 4F TEL：(053) 454-0598	1 件	2025 年 6 月 30 日	賞状楯、賞牌、 副賞 500 万円	日本の光科学の基礎研究や光科学技術の発展に貢献する研究において、独自に独創的な研究業績を挙げた研究者個人。(応募締切時点で 45 歳未満) 外国籍の場合は、日本の大学等公的機関に 5 年以上在籍し、その間に対象となる研究成果の中核を形成された方。
2025 年度朝日賞	朝日新聞社 CSR 推進部 「朝日賞」事務局 〒 104-8011 中央区築地 5-3-2	ここ最近では 4～5 件 (1 件)	2025 年 * 8 月 25 日	正賞(ブロンズ像) と副賞 500 万円	学術、芸術などの分野で傑出した業績をあげ、わが国の文化、社会の発展、向上に多大の貢献をされた個人または団体に贈られる。
第 37 回加藤記念 研究助成	(公財)加藤記念バイオサイエンス研究振興財団 〒 194-8533 町田市旭町 3-6-6 TEL：(042) 725-2576	M 分野・B 分野計 26 件程度 E 分野 5 件程度	2025 年 * 9 月 30 日	M 分野・B 分野 1 件 200 万円 E 分野 1 件 100 万円	バイオサイエンスの基礎分野において、独創的かつ先駆的研究をめざす国内の若手研究者を支援する。
第 15 回 (2026 年度) 三島海雲学術賞	(公財)三島海雲記念財団 〒 150-0012 渋谷区広尾 1-6-10 ジラッフビル TEL：(03) 5422-9898	自然科学部門 で 2 件以内 (2 件)	2025 年 9 月 30 日	賞状、 副賞 300 万円	自然科学部門は、食の科学に関する研究が対象。国内外の学術誌等に公表された論文、著書、その他の研究業績により独創的で発展性のある顕著な業績を挙げている 45 歳未満の若手研究者。
2025 年度 三島海雲学術研究 奨励金 (研究助成)		全部門計 80 件程度	2025 年 2 月 28 日	個人研究奨励金は 1 件 100 万円	食の科学に関する学術研究。若手研究者および女性研究者の積極的応募を期待する。
第 13 回ヤマト科学賞	ヤマト科学(株)内 ヤマト科学賞選考委員会事務局 〒 104-6136 中央区晴海 1-8-11 晴海トリトンスクエア Y 棟 36F TEL：(03) 5548-7120	1 件	2025 年 9 月 30 日	賞牌、トロフィー 副賞 100 万円	独創性、創造性に富む、気鋭の研究者を顕彰。対象分野はライフサイエンス、マテリアルサイエンス、インフォメーションサイエンス等の自然科学、技術分野およびその融合領域分野。
2025 年度 小野医学研究助成		15 件程度	2025 年 6 月 1 日 ～7 月 31 日 (受付日)	1 件 300 万円	助成テーマは脂質代謝異常に伴う疾患の病態生理に関する研究 (2024 年度)。①基礎医学②臨床医学③疫学④薬学⑤その他の領域 研究奨励助成は満 43 歳以下に限る。
2025 年度 小野医学研究奨励 助成	(公財) 小野医学研究財団 〒 541-8526 大阪市中央区道修町 2-1-5 TEL：(06) 6232-1960	15 件程度		1 件 150 万円	
第 9 回早石修記念賞		1 件 (1 件)	2025 年 8 月 31 日	正賞 (楯)、 副賞 500 万円	脂質研究において、独創的な研究による新しい分野の確立等、その進展に著名な功績をあげた研究者。
第 30 回慶應医学賞	慶應義塾医学振興基金事務局 〒 160-8582 新宿区信濃町 35 TEL：(03) 5363-3609	2 件[国内 1 名、 国外 1 名] (若干名)	2025 年 3 月 2 日	メダル、 副賞 1,000 万円	基礎医学・臨床医学ならびに医学に密接に関連した生命科学の諸領域で活躍されている研究者が対象。
大隅基礎科学創成 財団第 9 期研究助成	(公財) 大隅基礎科学創成財団事務局 〒 226-8503 横浜市緑区長津田町 4259 S2-16 TEL：(045) 459-6975	基礎科学 (一般) で 6～10 件	2025 年 6 月 30 日	1 件 A 枠 1,000 万円まで、B 枠 300 万円まで	細胞・組織・個体の新しい生理現象の発見とその分子機構の解明、をテーマとする基礎研究を支援。
		基礎科学 (酵母) で 3 件程度		1 件 500 万円まで	新しい生理現象の発見やその分子機構の解明等、人類と深い関わりのある酵母を対象としたこの生物種ならではの基礎研究をテーマとして支援。
第 7 回小林賞	(公財) 小林財団東京事務所 〒 106-0032 港区六本木 1-7-27 全特六本木ビル East 5F TEL：(03) 5575-7525	1 件 (1 件)	2025 年 * 9 月 12 日	賞状、賞牌、 副賞 3,000 万円	医学、薬学、農学、工学、理学などの生命科学に関する分野において、独創的な研究を行い、顕著な成果を挙げ、さらにその後も当該研究分野の発展が期待される国内の研究者を対象とする。

名 称	連 絡 先	件 数	締 切	助成内容等	概 要
2025 年度 地神芳文記念 研究助成金	理化学研究所 環境資源科学研究センター内 (特非) 酵母細胞研究会 〒 351-0198 和光市広沢 2-1 環境資源科学研究棟 N202	2～3 件	2025 年 4 月 11 日	1 件 50 万円以内	酵母あるいは糖鎖に関する研究を助成。基礎あるいは応用の別を問わない。39 歳以下を対象者とする。
2026 年度 一般研究助成	(公財) 発酵研究所 〒 532-8686 大阪市淀川区十三本町 2-17-85 TEL : (06) 6300-6555	全研究課題で 62 件 (2024 年 度助成実績)	2025 年 7 月 31 日	1 件 300 万円	研究課題あり。 (1)微生物の分類に関する研究(分離、分類、保存) (2)微生物の基礎研究(生化学、構造、遺伝、生理、生態、進化など) (3)微生物の応用研究(発酵、生理活性物質、プロバイオティクス、環境保全、バイオエネルギーなど)
2026 年度 大型研究助成		全研究課題で 3 件 (2024 年 度助成実績)	2025 年 7 月 31 日	1 件 1,000 万円	
2026 年度 若手研究者助成		全研究課題で 21 件 (2024 年 度助成実績)	2025 年 7 月 31 日	1 件 300 万円	
2025 年度 (第 23 回) 高峰記念第一三共賞	(公財) 第一三共生命科学研究 振興財団 〒 103-8234 中央区日本橋 3-14-10 第一三共日本橋ビル 10F TEL : (03) 3243-9061	1 件 (若干件)	2025 年 1 月 31 日	賞状、賞牌、 副賞 2,000 万円	日本国内において、生命科学分野での基礎・臨床研究並びに技術開発、特に疾病の予防と治療の進歩・発展に顕著な功績をあげた研究者(同一分野での複数名の同時推薦も可)や団体。
令和 7 年度 (2025 年 度) 安田記念医学財団 安田医学賞	(公財) 安田記念医学財団 〒 558-0002 大阪市住吉区長居西 2-10-10 TEL : (06) 4700-4556	1 件 (1 件)	2025 年 6 月 30 日	1 件 1,000 万円 (研究助成金)	大学の医学部、医科大学、医学研究所、癌中核病院等において、癌の予防と治療に関する研究に携わり、顕著な業績を挙げ、卓抜した能力を有し、癌制圧に熟意のある研究者(国内在住者)。
第 7 回太田原豊一賞	(一財) 化学及血清療法研究所 〒 860-0806 熊本市中央区花畑町 4-7 朝日新聞第一生命ビル 11F TEL : 096-297-2152	2 件 (2 件)	2025 年 8 月 31 日	正賞(トロフィー) と副賞 1,000 万円	感染症領域及び血液領域を研究対象とし、大きな成果のあった者で、今後も感染症領域及び血液領域の研究の進展に貢献が期待される研究者。(個人・研究チーム・団体等を「研究者」とし受賞の対象者とする。但し、原則として営利法人に所属する研究者は除く。)
2025 年度 化血研研究助成		10 件	2025 年 6 月 30 日	1 件 1,500 万円	感染症領域(人獣含む)及び血液領域を対象とした研究に対して助成を行い、対象領域の発展に寄与することを目的としたプログラム。
2025 年度 化血研若手研究奨励 助成		20 件	2025 年 6 月 30 日	1 件 300 万円	感染症領域(人獣含む)及び血液領域を対象とした次世代の研究者の育成に資するために、将来有望な若手研究者の研究を奨励助成。申請締切日時点で満 45 歳未満の者。
2025 年度 化血研ステップアップ研究助成		6 件	2025 年 6 月 30 日	1 件 600 万円	感染症(人獣含む)領域及び血液領域を対象とした次世代の研究者の育成に資するために、将来有望な若手研究者の研究をさらにステップアップするための助成。

●件数の()内は、応募に当たり学協会等からの推薦が必要な場合、本学会の推薦枠を示しています。

*は、本年度の案内を受取っておらず、昨年締切日を参考に示してあります。

締切日を過ぎているものは、本年度応募は終了していますが、参考資料として掲載しました。

第24期役員・幹事・各委員会名簿

理事長

(任期：2025年1月1日～2026年12月31日)

木村 宏 (科学大・総合研究院)

副理事長

倉永英里奈 (京大・薬 / 東北大・生命)、後藤由季子 (東大・薬)

理事

阿形 清和 (基生研 / 京大・名誉教授)

五十嵐和彦 (東北大・医)

石黒啓一郎 (熊大・発生研)

石谷 太 (阪大・微研)

上村 匡 (京大・医生研)

大谷 直子 (大阪公大・医)

鐘巻 将人 (遺伝研)

糸 昭苑 (科学大・生命理工学院)

胡桃坂仁志 (東大・定量研)

近藤 滋 (遺伝研)

斎藤 通紀 (京大・医)

佐田亜衣子 (九大・生医研)

塩見美喜子 (東大・理)

高橋 淑子 (京大・理)

中島 欽一 (九大・医)

中西 真 (東大・医科研)

中山 敬一 (科学大・総合研究院)

中山 潤一 (基生研)

二階堂 愛 (理研・BDR / 科学大・総合研究院)

濡木 理 (東大・理)

林 克彦 (阪大・医)

原 英二 (阪大・微研)

東山 哲也 (東大・理)

三浦 恭子 (熊大・生命 / 九大・医)

三浦 正幸 (基生研)

山本 卓 (広島大・統合生命)

吉森 保 (阪大・医)

(五十音順)

監事

井関 祥子 (科学大・医歯)、塩見 春彦 (千葉大・cNIVR)

幹事

庶務幹事 岩崎 由香 (理研・IMS)、中川 真一 (北大・薬)

会計幹事 稲田 利文 (東大・医科研)

編集幹事 深川 竜郎 (阪大・生命)

広報幹事 中山 潤一 (基生研)

国際化担当幹事 岡田 由紀 (東大・定量研)

第24期執行部

木村理事長、倉永副理事長、岩崎庶務幹事、中川庶務幹事、稲田会計幹事、中山広報幹事、岡田国際化担当幹事

Genes to Cells 編集長

上村 匡 (京大・医生研)

賞推薦委員会

高橋淑子 (委員長)、大谷直子、二階堂愛、林 克彦、三浦正幸

研究助成選考委員会

塩見美喜子 (委員長)、五十嵐和彦、中島欽一、中山敬一、吉森 保

キャリアパス委員会

胡桃坂仁志 (委員長)、甲斐歳恵、香月康宏、鐘巻将人、黒岩麻里、佐田亜衣子、篠原美紀、末次正幸、藤 泰子、平谷伊智朗、三浦恭子、三嶋雄一郎

次世代リーダー育成ワーキンググループ

平谷伊智朗 (WG 座長)、小宮怜奈、関根清薫、竹俣直道、寺川 剛、服部奈緒子、岡田由紀、斎藤典子

研究倫理委員会

糸 昭苑 (委員長)、石黒啓一郎、原 英二、東山哲也、山本 卓

生命科学教育

石谷 太 (担当理事)、篠原 彰 (委員)

日本分子生物学会 賛助会員一覧

(2025 年 6 月現在)

アサヒグループホールディングス株式会社
株式会社エー・イー企画
一般財団法人化学及血清療法研究所
科研製薬株式会社 新薬創生センター
コスモ・バイオ株式会社
株式会社 seeDNA 法医学研究所
第一三共株式会社
タカラバイオ株式会社 事業開発部
株式会社ダスキン 開発研究所
中外製薬株式会社
株式会社東海電子顕微鏡解析
東洋紡株式会社 バイオプロダクト営業部
株式会社トミー精工
ナカライテスク株式会社
日本甜菜製糖株式会社 総合研究所第二グループ
浜松ホトニクス株式会社 システム営業部
富士レビオ株式会社 研究推進部 バイオ研究グループ
フナコシ株式会社
三菱ケミカル株式会社
ヤマサ醤油株式会社 R&D 管理室
湧永製薬株式会社 研究管理部研究管理課

(21 社、50 音順)

■第 48 回日本分子生物学会年会 (MBSJ2025)

公式ウェブサイト

<https://www.aeplan.jp/mbsj2025/>

X (旧 Twitter) アカウント

https://x.com/mbsj_2025/

■日本分子生物学会

公式ウェブサイト

<https://www.mbsj.jp/>

Facebook アカウント

<https://www.facebook.com/mbsj1978/>

X (旧 Twitter) アカウント

https://x.com/MBSJ_official

Bluesky アカウント

<https://bsky.app/profile/mbsj.official.bsky.social>



特定非営利活動法人

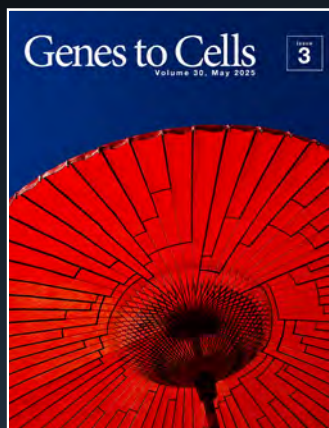
日本分子生物学会 事務局

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋 2-11-5

人材開発ビル 4 階

TEL: 03-3556-9600 FAX: 03-3556-9611

E-mail: info@mbsj.jp



Genes to Cells

Published on behalf of the Molecular Biology Society of Japan

Edited by: Tadashi Uemura

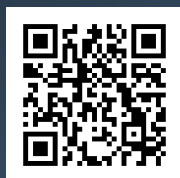
Frequency: Bimonthly | Impact Factor 1.3

日本分子生物学会の学会誌Genes to Cellsは、分子生物学の優れた研究成果を掲載し、著者にとって有益な学術情報や先見性の高い最新の研究情報を提供しています。全世界8,800以上の機関で読まれており、年間437,000件以上のダウンロード数を誇ります。是非Genes to Cellsにご投稿ください。

Genes to Cells 投稿の利点

- わかりやすく便利なオンライン投稿システム
- 投稿料・掲載料無料
- 出版までの過程をお知らせするAuthor Servicesをご利用いただけます
- 出版後6ヵ月経過した全論文が無償公開となり、世界中からアクセス可能になります
- オープンアクセス希望者はオプションで『Open Access』（有料）を選択できます
 - 代表責任著者のご所属機関がWileyと転換契約を結んでいれば、割引を受けられます
 - 上記に該当しない場合でも、共著者にMBSJ会員が含まれていれば割引があります
- 総説は日本分子生物学会のサポートを受け、無償でOpen Accessとして出版されます

詳しくはこちらをご参照ください <https://www.mbsj.jp/gtc/index.html>



オンライン投稿はこちら <https://wiley.atyponrex.com/journal/GTC>

2023年・2024年出版 引用数TOP論文 *2025年5月現在

The anti-inflammatory effect of metformin: The molecular targets (Volume 29, Issue 3)

Sakata, N

Nondomain biopolymers: Flexible molecular strategies to acquire biological functions (Volume 28, Issue 8)

Arakawa, K; Hirose, T; Inada, T; Ito, T; Kai, T; Oyama, M; Tomari, Y; Yoda, T; Nakagawa, S

Quick and affordable DNA cloning by reconstitution of Seamless Ligation Cloning Extract using defined factors (Volume 28, Issue 8)

Liu, A. Y.; Koga, H; Goya, C; Kitabatake, M

GM-CSF-producing CCR2⁺CCR6⁺ Th17 cells are pathogenic in dextran sodium sulfate-induced colitis model in mice (Volume 28, Issue 4)

Ariki, S; Ozaka, S; Sachi, N; Chalalai, T; Soga, Y; Fukuda, C; Kagoshima, Y; Ekronarongchai, S; Mizukami, K; Kamiyama, N; Murakami, K; Kobayashi, T



ジャーナル閲覧ページ

www.wileyonlinelibrary.com/journal/gtc

日本分子生物学会員は無料でアクセスできます。

初回ユーザー登録は学会事務局まで (info@mbsj.jp)

登録後の問合せはWileyまで (cs-japan@wiley.com)



WILEY

The Molecular Biology Society of Japan NEWS

日本分子生物学会 会報

(年 3 回刊行)

第 142号 (2025年6月)

発 行——特定非営利活動法人 日本分子生物学会

代表者——木村 宏